エトS7

SEKAI MIRAIKI.

SHAKWAI SHINKWA.

社會進化世界未來記

原名 第二十世紀

佛國アー、ロビダ著
日本 中村敬宇先生序
蔭山廣忠譯

東京書肆 春陽堂印行

26
29

題辭

空中舟艇似飛翰

半日坤輿可歷觀

無國無邦無鬬戰

共家共產共欣驩
衛生能享百年壽
執政更升一等官
欲達恒星縱無術
旅行月界恐非難

敬字中村正直

中村正直
敬宇

世界未來記序

宗教家不謂神佛者。但是宗旨之秘密藏而已。豈神佛之所以爲神佛乎。書之爲神者。今地反役於見庸之工人。而爲社會之奴隸者比比也。世書者佛國所驅塵駭氏以博識與真像之勢力所著之世界未來記也。而亦論有形與無形以來像寄社會進化之盛況。洋洋雖非奇異詭譎之說。翻者之則我東洋人之紀

（目錄）

社會進化 世界未來記目錄

第一回	學成女姪歸生府 夫妻明公道爭權	一丁
第二回	異變報來驚敵枕 樓臺踏雲懸太虛	十三丁
第三回	家無炊烟饗酒食 少女放飛舸遊覽	二十五丁
第四回	雄辯巧舊論刑罰 嬌唇輕弄救罪囚	三十四丁
第五回	議士羈絆如罪囚 監視固繞似形影	四十四丁
第六回	刑勝無刑退隱德 性果善歟感化效	五十五丁
第七回	設置實地講習所 大使練習政治業	八十四丁

而合及也。亦可知意匠之所費矣。抑謂未來思想之先導者可也。實有益於世。實淺鮮乎哉。嘗聞方今輕蔑小說家之考案者。出於小說家之考案。此書亦考案中之可歡者矣。世之所謂神佛。等合於此一部之書中矣。凡理之不可測。世概謂之神不可思議乎。

明治廿年六月　譯者撰

其題書

第八回　才不適學嫌論難　業異所好去政海　百十六丁
第九回　少女欲爲翰林員　不要宿訪歐各員　百三十二丁
第十回　碩學大會翰林院　歷史博士演新說　百五十二丁
第十一回　身在巴里府堂屋　觀聞外洋隔戰場　百六十六丁
第十二回　以傳聲機報新聞　犧牲身命爲編輯　百七十四丁
第十三回　競馬全廢競空船　府民熱爭得全勝　百八十六丁
第十四回　名譽恢復訴決鬬　淑女曲直決白刃　百九十五丁
第十五回　紳士女史見鬬場　傳聲機爲婚姻媒　二百三丁

第十六回　憲定々期革命法　政機使運轉圓滑　二百十三丁
第十七回　革命期迫準備繁　國民集都極熱鬧　二百二十五丁
第十八回　街頭震辯起民心　女勇軍來從馬港　二百四十二丁
第十九回　臨戰亂開博覽會　與金牌留奇皆匠　二百五十四丁
第二十回　官民劇戰有勝敗　民黨遂轉覆政府　二百六十三丁
第廿一回　女子集相場會所　滔々辯論復時價　二百八十四丁
第廿二回　金權强所向無敵　一國學爲大公園　二百九十五丁
第廿三回　辭王冠英雄企大業　潛海底美人驚奇觀　三百十丁

（目錄）

第廿四回　壯士以未婚將軍　少女和妻救危難　三百三十三丁
第廿五回　婚姻結社爲媒介　吉士浴場爲結婚　三百五十三丁
第廿六回　夫妻駕空船周遊　魯國崩裂天地新　三百六十七丁
第廿七回　洋中築浮嶋供難　游海底遇水雷爆　三百八十二丁
第廿八回　海賊掠浮島斷綱　漂客梶島漾太洋　三百九十七丁
第廿九回　浮島過固坐暗礁　傑士忽胸企大業　四百十三丁
第三十回　更洲成見六大洲　地球將訴無起業　四百二十九丁

終

社會進化
世界未來記目錄

（第一回　學成女姪歸生府　夫妻明公道爭權）

社會進化
世界未來記

佛國　アー、ロビダ氏著
日本　蔭山廣忠譯

第一回　學成女姪歸生府　夫妻明公道爭權

一孃喃姉君達塵界をバ眺み見玉へ身い大虛に舞ひ翔りて仙乙女に異あらぬバ塵界とい言ひたりかし瞬時間に山川草木眼睛未だ定まらざるに市府城邑觀を異にし精神さへも爽快に太と長閑にぞ覺ふあり

一孃併阪の學びの窓に垂れ籠みてのみありしかバ都の手振い言ふも更あり文明進歩の奇工い夢だに知らざりしが足の闕を出でしより走空舸に打乘りて更に地を蹈むことあく飛ぶ鳥よりも速に巴里の都に近きぬ人智の測り知られざる遂に造化の壓抑に凌駕したり喃和孃爾い思さずや

一孃和孃の宣ふ如く文明の進化い彼の古に言ひ囃す妖魔の大歩に彌增せ

りあれ見玉へ無數の鳥が彼方此方と飛び翔ると思ひしも眸を定めて能く見れば凡て飛空船の走るにこそ和孃を始め妹君數ならねども妾まで略螢雪の勞功を積み學成り業遂げ故郷へ飾る錦にあらなくて錦をなせる故郷に此文明の空氣を吸ひ此開進の雨露に浴さば樂しきことの限あらずや太と嬉ふぞ思ひ侍れり和孃等も定めて左こそ御座すらん

と問ひつ答へつ打語ふ三人の少女い何れ劣らぬ若樹の蕾花東風稍漸唇を綻ばして將に新春に傲らんとし青帝僅に微紅を飛ばして鶯兒の戀を惹かんとし黛黑の眼睛は希望を呈し薔薇の顏色は嬌びて自然花の麗はしきに似たり嚬然として笑ふ然は無心を表し亮然たる聲音は性の順良ぞ知られたり或は艶妖或は婀娜或は淡素或は純美其風韻は異れども何れをや取り何れをや捨てん二十四番評花の翁も容易に判し難かるべし漸くに成長つ少女の常にして渡り苦しき浮世の灘を未だ知りも得ざればにや笑をば生命と頼む少女子が彼一句我一句語るも聞くも樂さの未だ半あらざるに船は早くも巴里府なる中央會社の繫船場に來着しぬ、時是西暦一千九百五十二年九月（我明治八十五年也）

あり

抑も光陰は疾く往ひて歳月人を俟たず四時循環去て復た來らず群芳百花の妍艶を闘はす韶華たる風光も忽ち過ぎて梅雨濕々籬裏に滴り鬱懊を招く時來れば千紫萬紅泥土に塗れて新緑蔭森の下に驕陽金爍の炎々たるを避くるに至り涼風暑を拂ふて吟虫耳に上り梧葉翻つて芭蕉秋雨に摧くるの季に遷れば百葉霜に醉ふて寒威膚を刺し萬木枯凋して寂然たる愁狀を呈し唯時々涼風の颯々として梢を鳴らし皎々たる巒峰の戴雪と松柏の傲然たる翠態を見るあるのみ斯の如く四時風景觀望を異にして眼に倦み心に厭ふ遑あければ何日しかに浮世の變るも知ちざれど常に進化して唯變らざるは進化の大則變ずる者は浮世の狀態前世紀の緊要重寶たる馬車瀑車瀑船電信機の鬼活神巧を欺きしも今や迂遠ありとて棄てられつ恨を逃ぶる由もなく亞弗利加内地に身を隱し世の果敢なさを嘆ずるのみ是に引代へ揚々たるは走空艇駕雲船觀聞電機送書話器彼の哲學者の大主義なる萬有成立の大勢力を使役なしたる珍奇の器械い時得顏に色桑えて天涯灘洋の別なく往復の便利を得て

我が住む地球の周圍をゞ一週日もて廻るに足り廣き世界も爲めに狹まきの思あらしむ吁文明よ文明よ汝が功績太と高きも中道にして未だ全からず怠ることなく倦むことなく黄金世界の實域を僅の日子に現出せしめよ廿世紀の文明ゝ未だ足れりとせざるなり

却説て彼三少女が乘り組みたるゝ巴里府門麻多街中央管船會社の駕雲船Bー號と名くる者にして武爾坦地方の線路を飛行して行路難からず危險混雜動搖衝突の患ひも無く地上二百四十哩（我七百二十尺）の大空を箭よりも疾く飛行して旅客荷物を輸送する神妙奇絶人爲の業とも思はれず進化の偉績實に想像の外に出でたり抑も彼三少女ゝ世にも有名たる巴里の都に其人ありと知られたる蓋世の富豪拉沛寶騰氏の女姪等にして姉嬢を玻撫と云ひ妹嬢を芭稔と呼び其姪嬢を映簾と稱し幾多の星霜を布仁庭の女學校に送り已に學科を卒へしかゞ旅裝も輕捷しく譽を負ふて父あり伯父ある寶騰氏が玉を鏤め黄金を刻みし家居に社ゝ着にける爾程に家守る老僕婢女輩數を竭くして出で迎へ身の健康と安着を祝する聲の喧噪しく喜び合へる禮詞を受けつゝ三個の

少女ゝ心嬉しく驩然に握手の禮も了りしかば玻撫ゝ先に立ちたる老僕に向ひ

昔時に變らぬ襲鑠にて忠實ちつ家事を執り理めらるゝ事妾に於ても喜しくこそ思ふあれ誰れも彼れも皆一同打揃ひ變りもあくて最と愛でたし……夫に付ても嚴父慈母ゝ御健に座すや少しも早く歸京の由を告げ奉れよと急き立れば老僕ゝ小腰をかゞめ叮嚀に

主公夫人兩位とも御館にゝ座さず未だ歸り玉ゝざれば……兩嬢何れに御座すやは知らざれど疾く呼び迎へ奉らすや……何人ありとも使に行きね

映簾爾あり〳〵疾く行かれよ

と三人齊しく促すにぞ老僕ゝ惘れみ顔色にて

嬢樣達ゝ知らでや座する電聲機關と云ふ者あり是にて申送り玉はゝ直に主公の耳に達し御歸館あらせ玉ふべし……あとて故ら人を勞し御迎に參るべき其機械ゝ是あり

と指もて示す傍の喇叭に似たる機械の管に三個の少女ゝ驚きて立寄り見れバ機械より電線を通ぜるあり當下玻撫ゝ機管をバ口に押し當て三女が歸着せる由を言ひ送れば忽ち父寶騰の聲をして歸宅すべき旨答へけり其樣恰も壁を隔てゝ物語るに異あらぬバ奇異に驚く三少女が呆れ果てたる有樣を笑止と思ふ老僕等が歸り玉ふに聞もあるまじ出迎をなし玉へと勸むる言に三人ゝ表方を投して馳せ出れば慌てゝ引き止め

老僕其方に非らす此方ある三層樓にて御待あされ

と笑を忍び案内すれば不審あがらも誘ふ隨に三層樓へ打昇り共に訝り顏見合せて三少女が欄に身を倚せ惘然として待居たりしが折しも一艘の走空小艇（一人乘りの小艇）箭よりも早く驀地に此方を投して馳せ來り寄るよと見えしか船中より飜然と樓椽に飛び移る人あり是れあん拉沛寶騰あり身には時樣の美服を纏ひ金剛石を以て鏤め飾れる金鎖を胸邊に輝せり但見る笑を含める朱唇は温順の氣風溢るれども一たび之を開く時は驚天動地の奇策を吐露し愛を有てる碧眼は柔和の光を放てども一たび睨する時は拔山の英雄をも慴

倒すべく胸に經綸の大才を抱けるも其容貌は尋常富者が巨億の財を徒に守りて朽ち果てぬ穩好ある君子の如くにして甘世紀の大豪傑ある有爲偉業の人たりとは舉動の上には知れさりけり俟詫び顏ある三個の少女は今寶騰の歸りしかば前後左右に馳せ寄りて袂に縋り接吻の禮に親愛慈暮の情を籠め

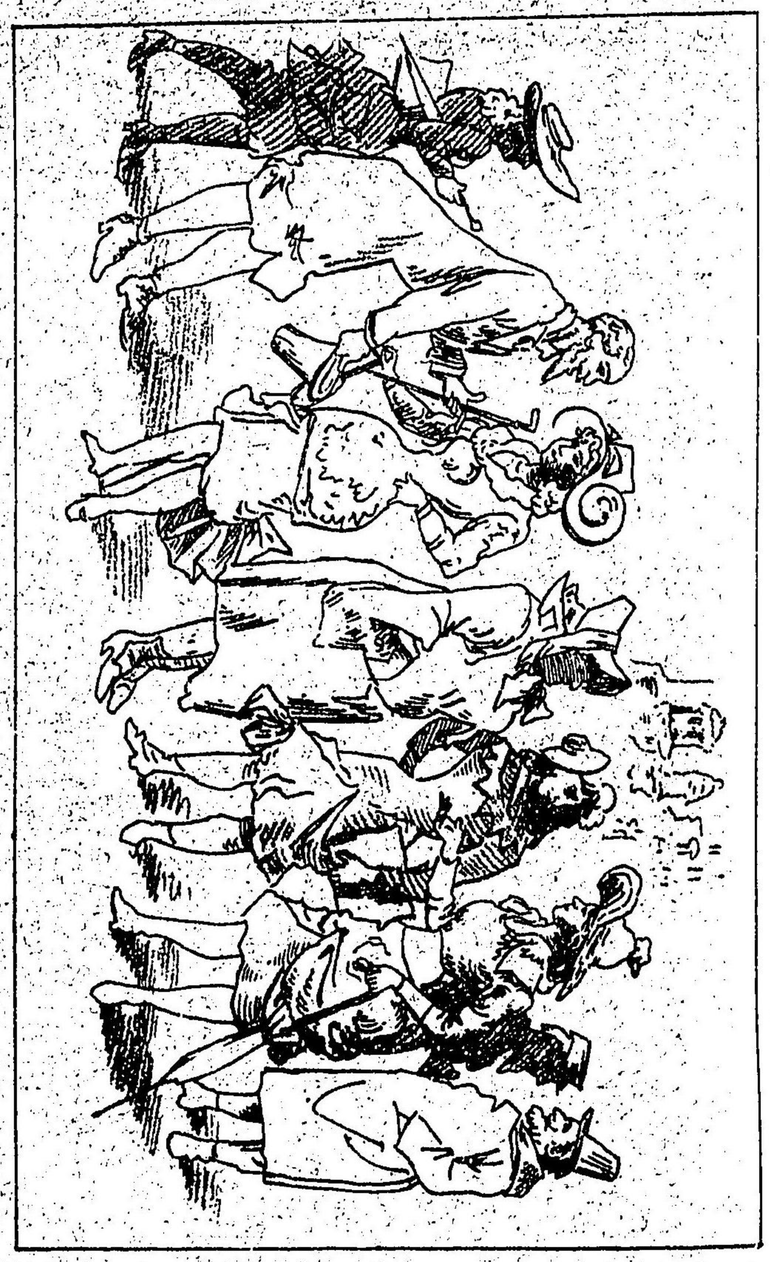
三孃父上伯父君……玻撫、祁稔、映簾等に侍るかし誠に麗しき御顏を拜し奉りて愛藝ひやら嬉ひやら言葉さへも言ひ出でかねて……

と嬉し涙に聲濕む三人が面を熟視する寶騰が雙の眼は愛愛溢れて三個を共に引き寄せて

双手も成長く太と美く生育しよ……暫時見ざる其間に滴れ大人と見ゆるまで品格さへも高尙せし學の效力の著しさ……健康の上に變りはあきやと燒野の雉子夜の鶴愛慕の情は古も今も變らず子を思ふ親の慈悲こそ有難けれ

玻撫學の窓にある間い智育德育諸共に十分の躰育さへに受けたれば三人

共最と健かあり尊慮を安ふし玉へかし
祀稔家尊を見奉るに付ても母上ゝ何處に御座しますやらん
映簾御不在あれば是非あけれど伯母君を何とかして少しも早く見奉りたし……何處に出て行き玉ひしや伯父君ゝ知り玉ゝぬや
寶勝我とて在所ゝ知らねども尋ねんと太と易し……誰かある蓄音機を携へ参れ
と命ずる聲に一個の侍女尺にも足らざる小函をば兩手に捧げ出て來り氏が側に差置けば三人の少女ゝ不審氣に顔見合せて在りけるが玻撫先づ口を開き
母上の書き遺されし手帳にても侍るかし
と恐る〳〵言問へば寶勝呵々と打笑ひ
此機關をば知らずとお……是程の事知らずと言ふてゝ濟むまじきぞ……爾れども知らずば敎へ聞かさん是ゝ蓄音器ト云ふ者にして母刀自の習慣とて出て行く折ゝ其方向を此器械に言ひ納れ置くあり……蓋を開きて聞



くころ宜けれ

と蓋を開きて小鈕子の頭に似たる銅片を指もて楚と抑へて動かせば器械は頻に旋轉して筒の如くに卷きたる鉄板次第に伸びる其表面に字にして字あらず畫にして畫あらざる異形の模樣を現し出せば空氣に觸れて音を發し寶勝夫人の聲音として

今日は政友と共に英吉利樓に會食の約あれば正午頃あらでは歸るまじと明瞭に聞ゆる中鐵板面の異形ある模樣は跟跡を止めず消え失せけるが見聞なせる三少女が驚愕けるこそ道理なれ有右而寶勝は久方振り業成て歸京せし三少女の爲に祝宴を催さんとて傳話機にて言ひ送り親き人々を招集い文學法律人情世態種々の談話をあせし末櫻筵を開き歡已に酣なる頃寶勝は映簾に打向ひ

和嬢知れりや婦人の權利は毫も男子の權利と異る所無し非如肉躰上の差異あるにもせよ精神の作用に於て何かあらん去れば今日婦人は皆男子の職業を探て以て己の事とすべし故に我巴里の本店は長男飛立に讓り與へ

ん彼れ已に身を理財の事に委ぬ必ず爲す事あるへし而して新約克と君士坦丁堡の兩支店を玻撫葩稔兩女に與へんと欲す即彼姉妹をして實務の衝に當らしめんと思ふあり和孃は幼ふして父母を喪ひ愍然にも孤とありしかば親に代りて此父伯が和女を敎育したるあり去れば遺財とても多しといふに非れば自ら社會の間に鞠躬して衣食の道を立てざるべからず……何業を望むぞや行政官か銀行家か……左もあらずば狀師あるか將醫家を欲するにや但しい地方官あるべきや……和女が受けたる敎育い其撰む所に應用して功を見る事著しかるべし心を決して業を定め身の適從を計れよかし

と慈愛の籠る諭告の言葉聞けど思へど浮世潟浮沈ある荒波に漕ぎも習はぬ無心少女が容易く答辭のあるべきぞ頭を垂れて答へぬぞ初の答なるべし之を看て寶瞞甚だ困じ一週日を期して練れる答を與へよとて話顏を他事に轉じける此時內主の歸り玉へりと報知の聲を先にして走空小舸を下り來る母が二層樓の梯子に足蹈み懸けあんとせし折下より馳せ上る三少女は母に葬

と絶り付き嬉し涙の外ぞあき暮ふ感情の色見はれて

三女は母上伯母君孫てより妾達の歸京をば今日なりとしも知り玉ふに他所くしくも振り捨てゝ何とて出で行き玉ひしぞ……思ひきや待たるゝ身ならで待つ人とあり戀はるゝ人と表裏あるとい情無き限りに侍へるぞかし

と母子の間の隔て無く少女心の一軸に怨み嘲ちて懇々しく兩手に縋る其愛情筆の得て記し能はぬ風情あり然あからに入りてい賢母の模範たるべく出ていい烈婦の龜鑑たるへき母刀自も秋尙ほ淸き淸眼に不覺涙堰敢へざるを見せましものをと押し包みて

人情公道兩あがら全ふし難かり和孃等い是れ莟の花浮世の嵐い知らされと此理を能く聞き方今の世に當りては婦人の權利を伸張し女堂の名譽に赫々の光輝を添ゑるぞ我々貴女が最第一の急務あれ是をしも公道と云ふ……親い子を思ひ子い親を慕ふ恩愛古今變らぬと傾く所に偏するを私情とい云ふあらずや……われ嗚呼がましくも政治社會に立ち女黨與論の方

針とあり未來の運命を指揮せんにゝ安くんぞ私情に戀々たらんや公道に從はゝ人情欠け人情によらば公道失せん若し能く公道を破るに人情を以てするの人あらば母ゝ其面に唾せんの……今日の會議に於て母ゝ撰まれて議員の候補に指名せらる其改撰の當日に男黨より撰まれて母と中原に鹿を爭ふ敵手を汝等誰とか思ふ母が所天と尊敬する母が處世の半身なる母が一身の支柱ある母が愛情の倉庫なる汝等が父上拉沛寶騰君其人あり……成否勝敗未だ之を今日に期すべからずと雖も搖て彼を敗らんとす……看よや三人の我愛嬢入りてゝ比翼の夫妻たり出でゝは吳越の政敵たり夫すら猶且斯の如し……汝等が大人備たる其樣早く眼にしたきゝ是母の情あれば飛び立つ程にゝ思へども成らぬ浮世の義理の糸繋がるゝ身ぞ形きゝ母と伯母とが心裡汲み分けて知れよかし山の井の深き思は社會の爲め斯が故に汝等が歸るを知りても俟居ることの能ゝざる其の事譯ゝ斯くとぞ知れ

と雄々しく見えても女氣の瞼に溢る露か時雨か潤と隆り濕める恩愛慈悲の

情涙の遣る瀬あければ三少女ゝ只茫然と顔見合して立たるのみ初て聞きし政治談に詞ゝおくて母の顔打眺めてぞ居たりける

夜も已に更けて客も追々に辭し去りて今ゝ一人も在らざれゞ旅の勞もあるべきに疾く〳〵睡眠に就よかし又明日話もせんものとて寶騰艦ら身を起し已の室ゑ閉ぢ籠れゞ三女ゝ母に會釋しつ己れ〳〵の部屋と定むる臥床に入りて夜具引被ぎ目睡む夢ゝ蝶となり飛び行く先ゝ布仁庭幼お遊びの學寮に幼き事を語り合ひし學の友の友垣に綠を摘み紅を折り春の日の長きも短かく暮し明せし嫩草の寢よげに見ゆる野邊おらん無心の乙女が胸襟ゝ樂しかりける事おるかし

第二回

異變報來頻敲枕
樓臺蹈雲懸太虛

四邊寂漠として聲無く更太と深けて心凄き眞夜中に鏘々たる呼鐘の音きに樂しき夢を破られし映廉ゝ獨語

應電話器の號報ありしか……何事やらん聞かまほし……何演劇の報知と

や……有名の作者が有名の傳奇を有名の俳優が演ずれば興味定めて深からん……成程滿場爲に面を掩ふと……爾もありあん……終れりとか然らば妾も枕に就かん……又號鐘の劇しきい……何と……

午后十一時兵爾巴拿府發電

西翁北國王劇場に幸す還御の路次萬雷地に震ひ焔烟天に漲り地雷火爆裂して愁ましき哉陛下は碎粉せらる

映簾恐ろしき事の知らせよ……あらずもかあ……

午后十一時半同處發

一着手に陛下を倒して凶徒喜に堪へず王宮を蹂躙し皇族を殺戮し滿城の鮮血流れて河をあせり是蓋し近衛親兵の屯營亦爆されて一人の王城を守る者なきに因れり凶徒勢に乘して火を各所に放ち煙烟の中に凱歌を唱へ以て全都の消滅を祈れば風伯之を助けて其希望を充たさしめたり

映簾又號鐘の響き來るよ……夢あらば疾く覺めよ現あらば夢なれかし……物忌しき知らせのみ……

午后一時朝鮮京城發電

下議院い執政官を彈劾して之を彈正臺に訴へ大統領い非常令を發して戒嚴を命じ仁川の民兵い官府に抗して武威を示し人心恟々鼎の沸く如く革命の期已に迫れり於茲乎內閣は任を解かしめ延て統領に及ぼさんとす

同時支那、南京發電

元老議院に於て關稅條例二十五條い否決されたり

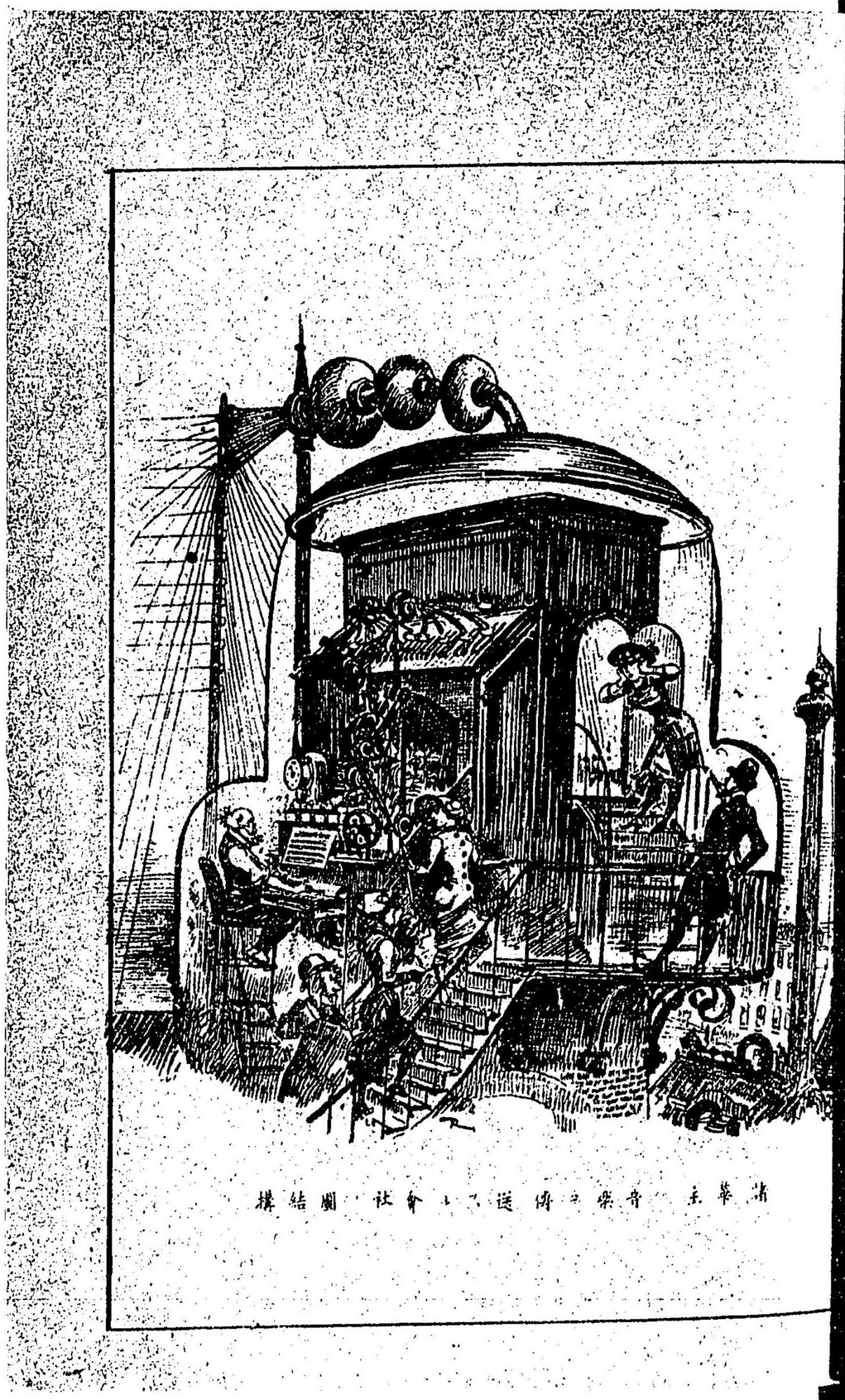
一時半濠洲米波崙府發電

當地大地震あり死傷無慮數万人屍躰の發見せる者六千有餘なり

二時佛加剌府發

東洋亞細亞中央管車の線路い山賊の切斷する所となり殺傷せらるゝ者實に夥し而して凶行者の踪跡絕えて知れず

映簾由あき事を求めたり……生憎に器械をば止めんとしても止まらず……眼に上る悲慘の啃狀眠らんとするに眠られず……疾く太陽の上れかし……又來りしか



二時半骨達利加府發

大統領刺客の手に仆る是を以て第四回とす人心激昂の模様あり……

映廉閉に忍びず……聞く能はず……誰人か呼び起さん

と獨語ち震へる足を蹈みしめて軈ち臥床を起ち揚り數多の呼鐘陳列して順序正く一々に侍女、家僕、舟人、火事、變災、盜賊、急病等の記號ゝ一々示しあれど心慌てし折柄とて戰く手先に力を入れ能くも見ざれば誤りて火事と記せし呼鐘をば思ひの儘に響かすれば萬箱死せるが如くにて寂々たる深夜ゝ常より も響き劇しく忽ち四方に傳へけるにぞ是に應ずる號鐘ゝ凄玄くも打ち鳴らせば自から愕ひて獨語

何事の起りしにや……自然に室の戸扉ゝ開けり……彼方の管より何やらん白き烟を噴き出しぬるゝ……市街の騒がしさよ……尋常の事にゝあるまし……大變災にやあるべし恐ろしゝ恐ろしゝ……如何なして宜るべき……

とて再び臥床に飛び上り褥被るも慌たゝしく息を殺して居たりしが之を聞

き付て急ゝしく駈て室内に入り來り小さくあつて臥し居たる映簾を搖り起し火災ゝ何處ぞ如何ありしぞ疾く答へよ疾く〳〵と迫立られて漸く面を差出し

映簾　妾ゝ少しも知侍らず如何ある故か白き烟が此室に何處よりか入り來れり

寶勝　前に和女が太とも劇しく火災の號鐘を鳴らせしかゞ電氣四方に通じ防火丁ゝ伍を爲して我が門前に蝟集せり……此の室内に充たる烟ゝ機力に依て送られし消火烟と云ふ者あり和女ゝ手過にても爲したるにや何故火災を報ぜしぞ

映簾　啊伯父上然らゞ妾の疎忽に侍りあん宥し玉へ詫び奉る妾眠らんとする毎に枕上の電話器ゝ何處よりか頻りに凶報を齎し來るにぞ其恐ろしさの堪へ難けれゞ誰人をか呼ゞんと是等の記號に目も注めず牽き鳴したる誤より斯く近隣を騒がしたり宥して玉へ恐れ入りぬ

と詫びけれゞ寶勝思はず絶倒し

未だ敬へ置かざりしゝ此方の疎忽あり……和嬢は聊か過失なし……電話の凶報ゝ變じて火災の號鐘とある耳新しき話柄あり……尙云ひ置かん若し電話報を止めんと欲せゞ斯くこそ爲す者よ……我ゝ是より粗忽の旨電話機にて諸方へ通ぜん……快く眠れよかし……人驚かしゝ御免々々

と笑ひ戯れ出て行けゞ映簾ゝ心安堵再び眠に就きたりしが三時半とも思しき頃枕頭再び號鐘の劇しき報知に思ゝす控と臥床を飛び下り四邊を屹と眺めつゝ

映簾電燈の光ゝ彌明るく左の玻璃に文字の見ゆるゝ……啊、何盜賊の入りたるとや……伯父上に知らせ申さん

と心裡に言ひあから怖さを忍び遽かに衣服を身に纏ひ室の外面に立ち出れゞ破と伯父に出で合へゞ

伯父和嬢ゝ何處へ行く者ぞ……殊にゝ顏色打變り朱唇の色も失ひて……

又何事か生ぜしあ

と笑あからに問ひ掛れゞ口の中ある答ふる聲も震ゝれて

盜賊の入りて侍る……盜賊の入り……

寶騰好し我已に之を知れり……和嬢と共に之を捕へん此方に來れ

と恐ち怖るゝ少女を無理に引き立てゝ金庫の方へと赴きけるが已に金庫の前に至れる時映簾ゝ身を震ゝし伯父に楚と縋り付き

伯父君彼所に見慣れぬ二個の人が飛つ踊りつ狂へるゝ何者にておはすぞ

や

寶騰即彼等は盜賊あり

映簾盜……賊とあ

と一入强く抱きつくにぞ

寶騰左あ恐れぞ怖るゝことなし……思ふに今夜の盜賊は五六人の餘もありしあらん……備の嚴あるに驚きて空船にて遁れしこと電機に依て之を知れり……大膽にも彼等二人は此所まても忍び入りて金庫の錠を打破りしが設けの機械に觸るゝとも知らずして電氣の作用に身躰は彼れ彼の如く狂ひ回り野蠻の演劇見るよりも尙一層の奇觀を呈せり這は可笑し忍び

難し

と腹を抱へて打笑ふに映簾も安堵しつ如何にやあると見てある所に電機は已に警察署へ緯由を通ぜしかは二三の警吏入り來り寶騰に一禮して電氣の關係を斷ち放てば二賊は其場に倒るゝを乘り掛りて捕縛あし賊の携へ來りたる小刀、鋸、合鍵、槌、其他の物を取り集め長と覺しき一人が寶騰に打向ひ

此奴等は是にて好し……逃げ去りたる餘賊は前に空船もて跡を追はせたりければ程あく捕縛に就きぬべし……安堵て眠に飽き玉へ……最早事はわるまじき……去らば

と計り暇を告げ兩賊を引立てゝ表面の方へ出行きける

宵眠未だ再びせざるに夜は少見と明渡り旭日已に東岳に上れば今日は力めて開け行く巴里府の變化を遊覽せんとて三人の少女ゝ輕便ある走空舟を艤し空中を乘り回し景狀如何にと覽下せば變れば變る浮世哉巴里ゝ昔の巴里あらで路安府までも續きたる其縱横の距離里數幾層倍を加へたり然れども街頭更に人影を見ざる者は盡し走空舟(アエロチプロー)の發明以來陸歩する人あき故なるべ

し然りとて車馬に非ずんば荷物ゝ運ぶ能ゝざるべきに終日軋れる骨なく馬の蹄の響さへ非ざるは地底電車の十分に用を充たすに由るあるべし殊に家屋便用の如きは前世紀と全く異るに至れり十九世紀にありては其最高き樓は賃金低くして貧民職工是に居り其最低き所ゝ賃金高くして富者の住とせり是れ其當時の便宜によれるなり而して家屋の最高き者も漸く七八層に止まりしが今日は全く然らず上層は價貴く下層ゝ價廉あり富者上に住み貧者下に居る是れ今日の便宜にして層ねの高きは十七八層をおすに至れり文明の進歩實に天地を轉倒せりと謂ふべし一日三少女は衣裝誂へんとて有名ある裁縫師に至りしが痛く衣服の變化に驚けり彼濶袴の如き者ゝ最實用に適せざるのみか空船の昇降に不便ありとて捨てられて良を取り便に就き益改良して婦人の衣裝ゝ更に男子の物と異らず是に於てか又初めて活動社會に活動すべき十分の衣服を得たりと云つべし良在て三人の少女等は茲を立出で其儘、船を往時に名高き凱旋門へと乘り向けたり

凱旋門の頂上より堵呂加泥宮の塔上に渡れる宏壯雄麗の建物あり是なん萬

國館と名くる酒樓にして悉く鐵材を用ひたる鉄柱の上に鉄板を架するに依て成れり其結構や器具、盃盤、割烹術に至るまで宇内各國有りと有らゆる國々の風を寫して作りたるものあれば胡馬北風に嘶かず山鳥頭い白くありぬと も九日望郷の臺に勝れり又

萬國館の屬園ある蹈雲園と呼べる者い幅員猶數十間の大虚に懸りて天より繋ぐにあらず地より率くにあらず只是れ幾個の大輕氣球を結び合せ其下に數十間の鉄板を釣り百の花卉草木を培養して數多の禽獸魚鼈を放ち山假い 諷々たる霞を罩めて岩石猶り傲り池い底清くして水自ら樂む實に天外の無塵仙境たり常に輕風に順て其方向を變じ伏て望めば景色觀を異にして毫も動搖危險の煩ひ無ければ是れを社空中樓閣と謂ふべきか奇なる哉妙なる哉と三個の乙女い手を拍て暫時い言ひも出さずして只管感嘆あしたりける 良在て針路を各所に轉じ翼なき身も天飛ぶ鳥の心地して猶世に有名たる鬼斧神工を欺きぬる諸建築を翔け回り時の移るを打忘れ日も西山に入相の鐘鎬然と西奴河に響き來たるに促され迎ふる星を戴て漸く我家に着きければ三

娘各寶勝に遊覽の景況抔譚り合ひつゝ晩餐も程あく終れば親心嬉しかるべし乙女等が心を娛しましめあんと寶勝三人を招き寄せ是より演劇を見すべきに此方へ來れと召連れて觀劇室へ行きければ

觀劇室にある道具の配置俳優の扮裝動靜音聲より興を助くる音樂の抑揚頓挫流亮ともて能く其度に適ひ應拉西の傳奇をぞ現出せり

玻撫父上演劇い此室にて演じ居るにや甚ぜに他の見物いあらざるぞ

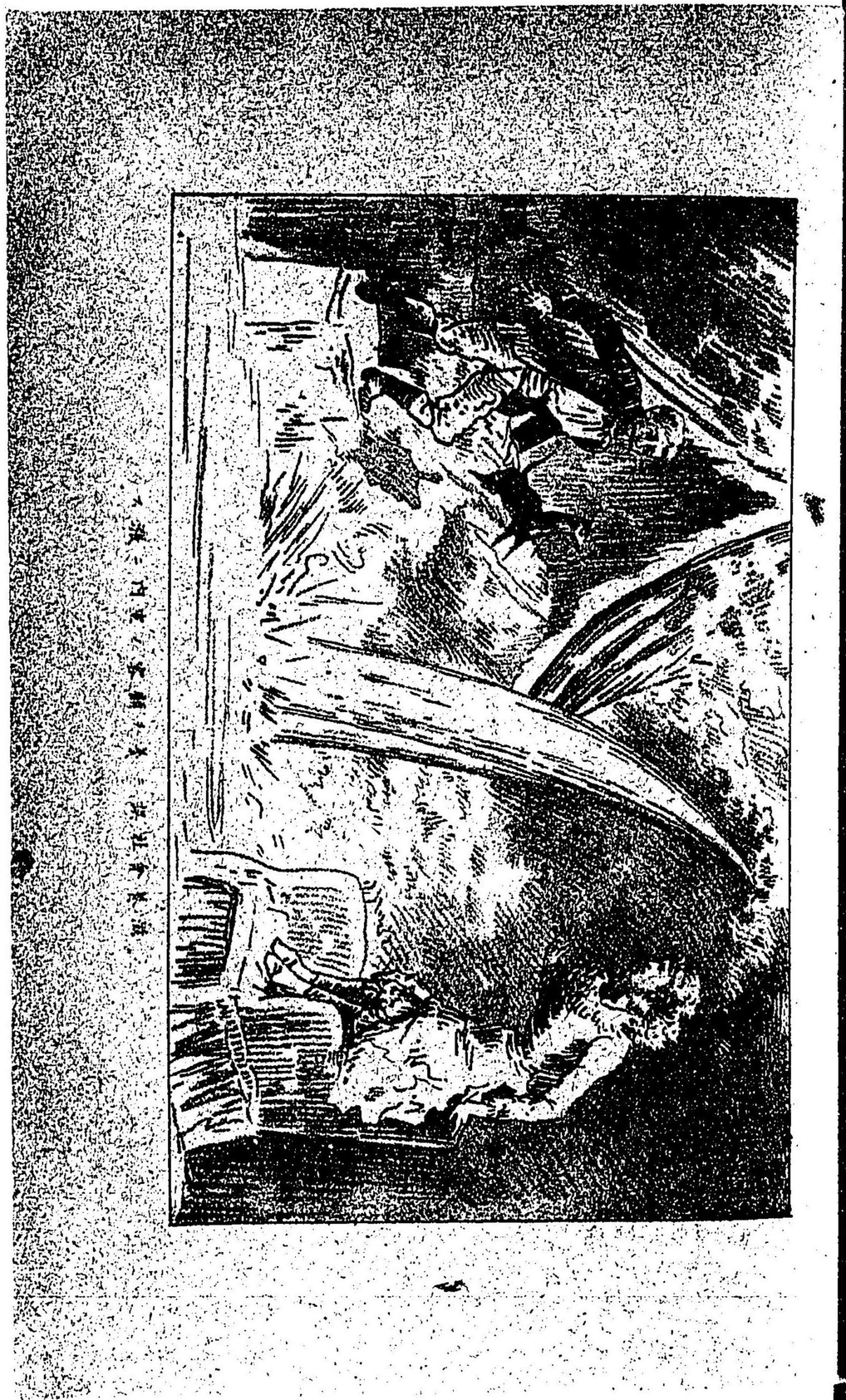
寶勝傍婦の物を知らざる餘りと云へば情なし……是い漢國の劇場にて演じ居る狂言あり……此幕を終りあば見物人を示さん

と說話す折柄音樂響き緞幕下り來れば拍手喝采の聲と共に觀樓の看客を余さず寫し出しける

寶勝七番の觀樓に我が知友あり援挨せん

と、て器械を繞りて何やらん螺線を動かし口を當て

巴里拉沛寶勝の觀聞會社に望む我線をして龍動劇場七番觀樓線と繋ぎ合せよ



と言ふ間程なく號鈴響き事の成れるを告げたれバ寶騰ハ彼知人と談笑應答數十分其面を見其聲を聞き互に興じ合ひけれバ三少女ハ呆然として夢みし心地して顔見合せてありけるが寶騰が再び見えん事を契り彼友人と辭するを見て葡稔ハ進み寄り

葡稔　父上汗も如何ある機が斯る不思議をあすものにや身ハ巴里の我家に座して竜動の演劇を覗き千里以外の其人と談笑面語自在あるハ一切心得難くぞ侍る後學の爲め敎へ玉へ

寶騰　然らバ詳しく話し聞かさん三人あがら能く聞きぬ此機械ハ觀聞器と呼ぶ物にして觀聞會社ある者あり蛛網の如く線を張りて天下至る所に通ず是が使用を望む人ハ僅少の價もて枝線を其家に通じ心に任せて使用せしむ營へバ甲より乙に通じたしと會社に言ひ送れば會社は雙方の線を繋ぎ合せ其人や宝、衣裳は玻璃鏡の面に現映し又其音聲用談雙方の耳朶に達する事宵に大都會のみあらず村落僻地卒土の濱に至るまで線路の通ぜざる所あく支店の設けあらざる所なけれバ旅行の者は別離の愁歎あく懇す

る人は朝夕見得て天下の事物悉な此一室に集り亦遠近の語無きに至れるは今現に汝達の見る如し又此機械ハ調子の昂低を自由にするを得べけれバ唱も演劇場裡の人と異らず文明の進歩豈妙なりと謂はざるべけんや猶汝達に示す物あり觀古演劇と稱して遠きハ沙比亞近きは戎馬翁時代の俳優を蓄聲器にて舞はしむべし

と云ふ折から如何ある調子の狂にや音樂の響きは迅雷の震ふが如く室内の道具は踊り出し皷膜爲に刺撃せられて座にも堪へられぬ程あるに寶騰鍵取り出し器械を少しく動かせバ微妙の調度となりにける

寶騰　叱、奴輩我家族ハ聾者にあらず心して音調をおせ然らずんば却て聾者となるに至らん

と叱り詰れバ會社の人の聲あるべし

仰の趣畏みぬ以后を必ず慎むべし枉げて宥させ玉へかし

第三回

家無炊烟　饜酒食
少女放飛　舸遊覽

廿世紀人間の生活的は殆ど前世紀と異なれり特に食事の如きは最著しき者にして今之を語らんに養食會社ある者ありて飲食の調理を掌り朝夕公衆の食膳を供しければ資産者は爭ふて是と約束を結び代料錢を拂て三食は云ふも更なり饗筵會食に至るまで皆會社の送達を仰げり其配送方如何と云ふに數條の大鐵管を市中に通じ無數の小岐管を分ちて華客の家に通じ小管毎に食物の名を記し置き電話器を以て需用の品を命ずれば其時刻に至りて記名の管口を開けば直に之を得らるべし會社に使役する所の男女數千人秩序整然更に亂れず是其數多の望に應じて毫も過なき所以なるか

一日寶勝は親戚なる權斗覽と呼べる紳士より招待を受たれば三女を率ひて會食の筵に赴きける然るに主客各養食會社を異にすれば互に己が最貪所を稱贊して嫌所を罵譏り口角泡を吹て霎時諍ひ居たりしが權斗覽は立上り

口角ふも詮無き事あり先づ我會社か割烹品の甘苦を試み玉はゝ論より證據貴君如何に剛腹なる嗚呼の人と云ふとても直に降伏し玉へん

と誇り顔に云ひながら鈴を鳴らして侍者を招き

權斗覽此方々を食堂へ御案内致すべし

と命ずれば侍僕は敬畏頭を下げ

御意あるが養食會社より未だ一品も送り來らず如何でか貴人を空き卓子に御坐せ申すべき

權斗覽咄一品も送らぬとな

寶勝貴殿が會社の行屆ぬ又格別の者と云ふべし成程感心仕れり

權斗覽近隣に問ひ合せしか

侍者皆同樣に申出づ

と答ふる折大河の堤を決りたる如く溢れ來りし羹汁ゝ室内よ充ちて流るれば主客の驚愕云ゝん方なく直に席を改めて熱汁の危難を避けたる所に侍者再び入り來り

養食會社々員某謁見を乞ひ奉る如何に答へて然るべきや

權斗覽此室へ誘ひ來れ我因由を問ひ見んに

と命すれば程なく誘ひ來るを看て

櫂斗覽今日の不都合ゝ何の原因する所ぞ疾く言へ聞ん

と焦噪て問ひければ下げたる頭を漸く擡げ

社員申譚なき今日の不始末詫び奉るべき言葉もなし何卒日頃の御愛顧に面じて只管御宥恕を願ふのみ其原因ゝ未だ確にゝ分らねど日頃弊社と競爭する者我大管を切斷したるに由りたるべし勿論當府内の養食會社ゝ大小合せて十位を踰ゆ實に商賈ゝ忌敵にて競爭の極する所遂に軋轢を生じ信義道德を顧みず或ゝ腕力に訴へ或ゝ謀略を運らして一向他社を傾くるに熱心し終に法律眼の睨する所となるゝ又勢の已を得ざる者歟今日の椿事も恐らくゝ其頭の事にて中らずと雖ども蓋又遠からざるべし呵々併し我社が諸太公の御愛顧を受くる大なるゝ却て嫉妬の媒孤柱となる所以にして我社の盛大を懲するに足る可し兎に角毀害者を捕らへ次第損害の賠償ゝ爲さしむべし……今日は抂げて宥せ玉へ早速改めて送り奉るべし

と揉手しながら媚びて詫びつ喋々饒舌り惕然暇を告げて立出でしが其在て切斷されたる大管も繕ひしと見え順を遂ふて食品ゝ送り來れば直に會食の筵を開きしが此混雜の結果ゝ客等に不愉快の感覺を呈して一坐興無く見えにける呼競爭の極將に食を斷たしめんとす

彼三少女等は見る物毎に珍らしき事のみなれば日毎に飛空船を飛ばして都の天を逍遙せり一日那的段古塔の上なる大割烹樓に船を寄せて午餐を

そ喫しける

十九世紀の詩仙威的彫呉が那的段(稗史の名)を讀る人ゝ其何たるを解すべし抑此寺は往古より宇内に其名を知られたる古院にして壯宏美麗天下に并ぶものなく一見して眩目せんとするの思あり其高塔の如きゝ巍然として雲際に聳へ神仙界と交通する梯かと怪まれ是に登らんと欲せば五百段の階級を上らざれば頂層に達するを得ざるしが今や空船直に其頂上に着きぬれば塔の前面ゝ變じて萬般の掲示場とあり其最上の露臺にゝ巴里中央飛空郵船定繫場を設けらる其擬造を如何にと云ふに那寺の兩塔の頂に堅牢なる鉄柱七間許なるを立て其上に鉄板を張り是に架機したる者あり今映籠等の一行が立寄りたる割烹店ゝ其上にあり即ち割烹樓上に鐵柱をば押し立て二十間許の

所を弓形に曲げ双方相連ねて茲に懸けたる酒樓なり其妙巧實に人意の表に出で譬ふるに物あく形容する詞無きに苦しめり有右而映簾等は其絶奇の工と絶美の食を味ひて茲を立ち出で堵呂加泥の勸工場に赴きける其場内地上に十五層の陳列場を建て地下に四層を築けり而して其間八百の回廊あり蜿々屈曲して延長七里を數ふと云ふ是に沿ふて酒舗あり又旅亭あり皆觀客の爲に供へたり陳列物の如きは五大洲中は愚未だ人跡の至らざる南北兩極の產物等凡世界にありと云ふ限を盡して陳列せり彼の米國の農產は日本の陶器と共に名を宇内に轟かし支那の絹布は英國の製鐵と共に譽を四方に傳播したり斯の如く千品万器視力疲れ神心倦みて恍然たるに至らしむる盛景目覺しくこそ見えたりけれ又此場内に使役する所の男女は總計一万五千人と云ふ而して男子は毎月一回宛隊伍を整へ兵式練繰をなすが如きに至ては特に奇觀なりと云ふ實に文明の威力は乾坤を轉動し鬼神を使役する造化の妙契にして僅に廿世紀を數ふるの間（造化主義が稱ふる所の世界創造前幾億年は暫く措く蓋不可知的なれはあり）に已に既に此奇を見る是をして尙數世紀の進歩あらしめば果して如何ある

觀を呈するや蓋吾人（二十世紀の人）が夢にだも想像し能はざる事あるべし又只當時の史筆が巧に之を寫し出すことあらんのみ生て其時に逢はざるこそ實に終天の遺憾あらずや

それ色界の迷津は才子も其智力を失ひ賢士も又光明を暗ふし一回此淵に臨んで溺れずと云ふ者なし那の拉沛寶騰氏は俊才衆万の人に勝れし事業家なれども春情の發動い又之を制する事を得ず道理の明光も黯り愛憐の暝暗界を照すこと能はず實に我あがら愚あり覺めよ〳〵と計りにて心神堅固に保てども去りも得やらぬ煩惱の心猿茲に犯ひ初め意馬止むるに由もなく女優魯沙に懸想して傷心焦思内にあれば色外に現れるゝも令閨は公務に忙はしくて嫉妬を起す閑暇も無く觀聞器は未だ以て十分の欲を充たすに足らず呼、迂遠の器械哉何の用にか供するゝとて罵られるゝもいと可笑し爾るからに寶騰氏が切なる思い遂に魯沙の情を惹き靡く秋野の女郎花我落にきと語られど心を以て心に傳へ天にあるてふ比翼の鳥地にあるてふ連理の枝巫山の雲い愛々の軸より起り楚蠻の雨は懇々の窓を打つ彼唐土の長生殿夜半人あく

私語の語ひにも勝りたりけん一日魯沙と諸共に其の旅亭に醉を取り走空舸に打乘りて醉を覺すの微風を得んと大空高く打上れば已に夜半を過ぎし頃故滿城凡て是れ燈あらざるなく地上に星の輝くかと疑はれて雲際亦是れ電燈懸り或は紅或は白或は青或は黃而して紫綠其色を異にするは地位を失はざる標燈と知られたり往來飛船の舷燈は日飛月走の形ありて東西南北に馳せ違へり然れども美景も樂しとせず寶騰氏は魯沙の膝を枕にして言ふことさへも夢幻

寶騰　天下何者か能く我眼を喜ばしむへき唯此一美嬋あるのみ呼愛よ〳〵汝あくんば此世は木石世界あり情よ〳〵汝あくんば世の人は皆むくつけき獸なり魯沙あくんば寶騰は生あき動物に異あらず

と半は現半は南柯正に眠りに就かんとする折舷燈を點ぜざる一隻の飛空艇は箭の飛ぶ如く速かに前より馳せ來り衝突するよと見えたりしが獰惡魔物を欺く凶漢三人忽ち飛駄と此方に移る其輕き事鳥の梢を轉るに似たり晃々たる秋水の白刃を振き放ち殺氣を帶びる聲太と高く

甲賊　匹夫匹婦奴輩空中の密會無傍の擧動寧夫のあるを知らざるや

と訛たる聲に醉を帶び嚙付く如く罵れば

乙賊　要あき事は言はずもがな疾く〳〵所用を果すべしやよ汝等速に携ふ限の寶貨をば乃公殿下に奉れ遲〻する時は是れ此白刃を汝等に饗すべし

金か命か二つに一つを撰めよや

丙賊　遲〻あして警察吏に着目られあば一大事早や疾くせずや

と白刃を揮て乘組人を脅せば物に恐れぬ寶騰氏も事荒立てゝは魯沙の身に過やあらんかとて三賊を後眼にかけ

噪々し靜にせよ……卒渡さんに是もて往きね

と有る限り財貨寶玉を差出せば取より早く己等の空船に飛び移り風より早く撥消す霧と遁去て行衞何方と白雲の立騷ぐ間に盜賊は早く形を隱しけり

吁、一利一害は事物自然の常理あり空船の便ありてよく又行盜の害を增せり而して其出沒更に端睨すべからずと云ふ空中巡邏も嚴かあれど容易に跡を絶たざりける嘆はしき次第にあん

第四回

雄辯巧舊論刑罰
嬌唇輕弄救罪囚

天網恢々疎にして洩らさず寶勝氏を脅かせし彼凶賊は忽ち縛に就きければ其引合として同氏も法衙へ出頭し當時著名の代言婦磨理皎孃に面會し其俊才名聲い巴里の法律社會をして重きを孃に屬せしむる有望あるに感服し家に歸るや否直に映簾を膝下近く招き寄せ

狀師の職は最婦女子に適せる生業あり法律の問題は實に愉快あらざるありされども民事行政は男子に屬し婦女は只刑事辨護を專務とす然れば其間自然快樂あきに非ず殊に兒に取るべき所以の者は兒が容貌美にして艶然たるも婀娜に流れず純にして素然たるも淡白に過ぎず人を感動せしむべき最上の風姿あり實に兒は生れながらにして辨護人の資格を備へりと懇に敎誨して磨理皎孃に托しける

當時代言婦として最著名あるは磨理皎孃及聞松孃の二人なり苟も犯罪の嫌疑を受けたる者は二孃の一に乞ふて辨護を欲せざる者あし若し其承諾を得

ざるに當てゝ大に失望して他に又辨護する狀師無きの思ひあらしむ去れば映簾は他の狀師見習女と打連れ立ちて法庭に出で師の議論躰度發音等を記臆なし家に在ては書類を寫し只管勉め勵みける

有形的の美てふ性質は其效用實に大あり刑事の辨護に於て愁波斜に送り清眼涙を含み嬌音嫋々朱唇の間より吐露する時は謀殺犯故殺犯の如き大罪天地の容れざる者と雖ども首を保つを得せしむ是併しあから磨理皎孃其人に限る美ありて辨なく辨ありて美あきは此限にあらず兩つあから兼得たる磨理皎孃の如きは實に未曾有と云つべし孃が喞囀たる玉音の一たび口頭を走り出づるや檢事判事陪審官無情木石の如くある憲兵看守に至るまで竊に暗涙を呑んで罪人を憫むの情を起すと云ふ

刑法學者が十九世紀に痛論あしたる廢死刑論は今日漸く實行の端を開き囚徒牢獄監倉等の文字は人類天賦の大權と氷炭相容るべからざるを以て其文字を改めて退隱及退隱所とし懲役を廢して殖民とし輕罪を罰するに退隱を以てし重罪を罰するに殖民を以てせり法律沿革史中特書して記載す可き事

にあん閑話暫措磨理皎嬢は映簾が勉励の一方ならざるを嘉し奬励愛育何卒して適れ天下に名を輝かす女狀師とあさん者とて常に彼を法衙に誘ひ教育至らざる所あかりしが磨嬢一日映簾を傍近く招き

和嬢は必ず將來に名狀師とあらんこと妾深くも之を看破きぬ藍より出で丶藍より青き其才識と勉學とは和嬢を鍛ふる良鐵鎚あり搆へて怠り玉ふあよ今百尺竿頭一歩を進めて刑事辨護の極意の秘訣を密に和嬢に告げ侍らん世上の人は犯罪に千種萬類あるを知りて外形の困難に眩ぜらるれど進んで其精神に立入りあば辨護せんこと太と易かり假令如何程錯綜せる重き犯罪あるにもせよ其犯罪は被告人よ利ありしか利あかりしかの二者に出でず前者即利する所ありての犯罪に付て辨護せんには我が尊むべき陪審官諸公……被告實に罪あり依て以て利する所あるが爲に此罪を犯せり證左分明亦贅言を要せず妾と雖ども又是を信ず然りと雖ども彼犯罪者をして此犯罪を爲さしむる者は蓋し其利益が彼を率ひて此域に至らしめしに因る吁彼も亦人あり豈其惡事たるを解せざらんや況や

其惡事の結果を恐れざるに於てをや之を解し之を恐れて而して是を爲す者は他あし自己及近親の生命を保全せんと欲すればあり然れども外部數多の原因は彼をして充分ある財貨を得せしむる能はず於茲乎此罪を犯すに非ずんば飢て溝壑に仆れんのみ看よ彼鬼畜に均き債主等は奪ふて飽かず剝て足れりとせざるに非ずや此境遇に瀕する者良心の明あるありと雖ども安くんぞ能く感情の曇らす所とあらざるを得ん君子は其罪を惡んで其人を惡まず況んや其所爲は惡むべきも其情は憫むべきあるに於てをや若し是に加ふるに刑を以てせば其不幸に累ぬるに不幸を以てする者あり是れ識者の笑ふ所にして聖人の惡む所あり陪審官諸公沈思默考其不幸の情狀を察し當時の地位を憫み社會的の不幸者をして法律的の不幸者たらしむる勿れ

との意を敷延して陳述せば可あり又第二の場合即犯罪の利する所あき者に逢はゞ

人は利害を辨別し能ふ而して利を避け害に就く者は常人にあらず瘋癲白

痴あり即道理心あき者なり道理心あき者は責任あし此犯罪の如きは毫も被告を利する所あし然り而して是を爲す所以の者は他なし其道理心あきを留するに足る是れに由て之を見れば其無罪の人たるを判知すべしと此意義を擴張して論ずるこそ我辨護法の秘訣なり夢忘れ玉ひそ

とて懇篤に教諭したりける

此時よ當り有名の公判あり所は需比爾と呼べる人が其叔母を殺せるの件にして辨護人は磨理皎娥なり評判高き事件にして且有名の女狀師が之を辨護する者から開廷の當日は聽衆早天より集りて立錐の餘地もあかりける

判事檢事陪審官威義を正して居並べば代言社會の泰斗たる磨理皎娥は見習生映簾を引き連れて設けの席に着坐したり罪人需比爾も出廷し告訴終りて磨理皎は椅を離れて身を起せば滿場の聽衆は息を殺して聞き居たり磨娥は靜に思を練り正に口を開かんとしてけり折罪人は如何思ひけん急はしく立ち揚り獰惡なる眼光磨娥の面に注射して

需比爾やよ狀師暫く俟たれよ我は貴嬢の辨護より寧見習生なる嬢子の辨

護を受けんと欲す何卒然かせられたし否然るを欲するあり

と傍若無人の請求に滿場凡て呆れ果て顏を眺めて居たりける

磨理皎我が見習生たる映簾は未だ一度も法廷に出て、辨護せしことあし妾ゞ及ぶ丈の盡力を爲すべければ夫にて滿足せられよ

需比爾否余は飽くまで貴嬢の辨護を謝絕するあり……強て見習嬢子をして余を辨護せしめんと欲す仮令如何樣云はる共余は強て余の素願を貫かんと欲するあり

磨理皎映簾嬢和嬢は此要に應ぜらるゝや

映簾否妾は飽くまで辭せんのみ

需比爾余は他人の辨護を欲せず

とて言ひ出だしては中々に頑固無比の凶漢が聞き入るべうもあらざるにぞ今はしも是までなりと磨理皎は映簾に向ひ

遁るゝ途あき此場の切迫力めて試み玉へかし妾傍に附添ひて一々教授あすべきに阿女ず聽せず辨護せよ

と耳語ければ映籠も今は遁るゝ路しおければ試み侍らんとて椅を離れて立
楊る傍には磨理皎が手勢發音一々に低聲もて敢ゆるを力の綱と映籠は徐か
に判官に打向ひ禮を正して

賢明なる陪審官諸君(と云ひ様磨娥の指揮に從ひ前なる卓子を丁と打ち)妾
未だ法識に乏し然るも今の不意に此大任を托せらるゝに逢ふ安くんぞ身
の不肖を以て辞するを得べけんや何とおれば不幸薄命の人將に刑辟を受
けんとして妾の眼前に在ればなり

夫罪惡は周圍より刺激する非運災禍の爲めに成る者多し被告の如きは即
然り抑も被告は戸主なりと雖ども老衰疲憊の叔母其財産を讓らず是名あ
りて實なき者あり實に財産は叔母の死するに非ずんば得る能はず而して
其死は神明獨之を知る何れの日あるを期す可からず

然るに被告は貧債積んで山を爲し殆んど窮巷に餓死せんとす而して積主
は日夜之を督促して止まず被告の進退彌谷り百計於茲乎盡き只其鬱を晴
らすに酒を以てし殆んど精神の錯乱を來たせり檢察官は其過酒を以て犯

罪の起因とせられたるも妾は却て之を以て被告が憫むべきの証とおさん
とす何となれば一身に集るの百憂は但だ酒に非れば散ずべからざればあ
り

被告が常時疎暴ありし如きは決して其有罪を確かむるの証左たらざるべ
し縱しや其影響する所ありと仮定するも是決して其本因ゑ非るあり

其本因を觀察すれば薄命の極遂に叔母の死を致したるのみ

と述べ來り磨理皎が敎に從ひ涙を呑み聲を曇らせ内情實に忍ぶ能はざるも
のゝ如く又心裡に痛楚を感ずる者の如く默然たること良久く漸くにして言
を續ぎ

不幸なる哉羅比爾や生れてしより今日まで二十年餘の星霜を艱難辛苦の
間に重ね世には捨てられ人には疎まれ只憑る所叔母あるのみ而して其叔
母は老婆の身にありながら吝んで財産を與へず悲請哀求策已に盡きたり
吁之を如何すべき加之被告は數人の稚兒あり飢えて叫べど顧る能はず寒
えて泣けども救ふ能はず實に親として忍ぶべからざる此慘狀を見んより

はと心を鬼に棄てたりしは是世間の慈悲を乞ふ却て親の慈悲なりかし而して今此棄兒に關して檢察官の責めらるゝよ逢ふ吁其無情一に茲に至れるや此地位に立つ者誰れか需比爾たらざらんや理昏み心眩じ只發情の指揮に任ずるのみ善惡利害を問ふの暇なし是れ被告をして遂に叔母を害せしむるに至りたる所以あり豈憫むべきの至りならずや

と一句一嘆一語一涙楚々人を動かしければ二三の陪審官は眼に涙を浮ぶるを見てこゝぞと映簾壓を低ふし蹙眉よ無量の憂愁を呈して陪審官に打向ひ諸君は皆一家の父に御座し子を憫むの情は知り玉ふあらん諸君は自已を全ふし玉へり生を重ずる心は知られ玉はん諸君が被告の地位に立たば如何して己を全ふし子を棄はんとし玉ふぞ是れ諸君が深く意を注がざるべからざる所なり前陳の情を汲み取られて淺き心の淺墓よも此犯罪を釀したる不幸の被告を憫み玉ひ公平無私の判決を垂れ玉はんこと偏に陪審官諸公閣下の仁愛よ願ぎ奉るものなりかし

とて猶一時も辨護しぬる清き言の葉澱なく西奴の水の滔々と流れ絶えせぬ

雄辯清音に加ふるの本休ある麗はしき眼に含む憂は鐵心の陪審官を初めとし需比爾を惡みし人々の心を和げて悲哀の情一時に迫て頻りに鼻を打拭せぬ傍聽あせし諸代言婦は映簾が辨護の巧に舌を卷き實に后世恐るべし我は及ばず及ばずと只管稱贊したりける當下檢事は身を起し咳一咳して演說を始め非常に映簾が說を駁擊せしも力判官を感動するに足らず大罪人需比爾は僅々十五月の退隱にぞ處せられけり斯るが故に需比爾の喜びは自ら禁じ難くして映簾の手を握らんとすれば吐嗟やと斗り飛び退ひて毒蛇を恐るゝ如くなり需比爾は呆れ顏にて

貴孃は余が哀情を知り余が不幸を憫みあがら何とて左い忌み玉ふぞ予が社會に對して負へる罪償は刑を受けて已に滅しぬ是皆貴孃の庇陰によると謝するよ辭なく喜ぶに營ふものあし肝に銘じて死するまで此高恩を忘れまじ願くは退隱所に來りて幽靈を慰むるを辭し玉ふことなかれ

と憚る色なく逃る間に巻を荷ふて映簾は醫理皎孃と諸共に名をば雲井に弓張の月に光を添へて行く其桃櫻何れをか姉と定めん何れをか妹となさん並

べては勝り劣らぬ聯璧の四下を照らす絶艶絶美島も栖所に歸るてふ其夕暮
よ兩人は打連れ立ちて揚々と我が住む家にぞ着きたりけり

第五回　議士羈絆如罪囚　監視圍繞似形影

映簾が雷名忽ち全府内に轟き知るも知らぬも一樣に書を送りて祝する者の多かりしかば寶勝氏の喜び譬ふるに物なく知己朋友を我家に招き姪女の爲に盛大の祝宴をぞ張りにける寶氏は當世一流の人物なるを以て其交る所殊に多く政治家學者紳士紳商豪家等其數凡ろ五六百人其人種を問へば多分い佛蘭西人あれども英、獨、以、魯、荊、西等數種の人も多かりけり

宴席には百事皆電氣を使用し侍僕も即電機なり器具も即電機なり火も亦電水も亦電萬事「エレクトリシチ」てふ廿世紀學術の美花あらざるはあらざるお り音樂の如きは樂器を須ひずして自然に妙音を奏するも亦是電氣の作用あり看客諸氏を慰めん爲め作り設けし舞臺よは名優各名技を演じ喝采をぞ博しける而して異種異說の人をして全く遺憾あからしめん爲舞臺を三階に分け上層は英語演劇中層は佛語演劇下層は以語演劇にて同一傳奇を同一舞臺に三樣に演ず其華美なる想ふべし

言語の如きは進化の作用の然らしむる所か万國交通の便彌盛んに異種相敵するの念慮益湧らぎ容顏骨格の殊異も漸次に減じ來りしより以來各國言語の妙處のみを撰み一種の字内普通の新語成りぬき斯くの如くにして進んで止まずんば彼哲學者は胸裡に描きたる萬國統一の實行も盡し亦遠からざらんとするなり

映簾は叔父に伴はれ來賓に應接して來車の喜を述べなどする内寶勝氏は一個の威嚴ある紳士の側近く進みて映簾を招き寄せ自ら紹介の勞を取り

是に坐する紳士は下院左黨の代議士たる流景琊君にましますあり……是は愚姪にして映簾香露風なり謁見を玉はり候得かし……流君の如きは名聲赫々夙に有爲の聞えあれば程あく廟堂に立ちて大權を左右せらるべしと語る時しも流氏の後に一人の老翁あり忽ちに口を開き

世人の眼光其時こそ一身に注射し來るあらん

と呟けば

流氏は温顏笑を含み一歩を前に進ませて

映簾嬢某は貴嬢の辨護を聞き思はず涙に噎びたり能くも爲玉へる者哉

實に感佩に堪へざるのみ……氣運の然らしむるとは云ひながら婦人の進歩したるは實に驚くべし殊に貴嬢の如きは才識學動言論に至るまで間然する所なかり

老人眉を顰め

侯するを止めよ

と罵るを顧みて莞爾と笑ひ

流景琿喊嘲たる聲は玉を弄して驚兒を慾殺せしむべく妖艶なる顏は花を曇み仙女をして健羨せしむべし朱唇輕く弄んで檢官恨み纖手高く擧りて判官惱む此朱唇と此纖手は果して何人の有となるべきぞ……誰人か是に觸るゝを得べきや絶代の才子にあらずんば能はざるべし芳卿は已に一世の才情あり必ず千秋の佳偶を得ん

と稱贊頻りなりければ映簾は去りも得やらず答もあらず頭を低れて赧み衣裳の端を弄ぶ處女の情こそ美しけれ

彼老翁は流氏に向ひ何か盲はんとおしける折寶騰夫人は進み來り流氏を伴ひ去りけるにぞ老翁も亦坐を立ちて其後にぞ從ひ行く恰も影と形の如し

映簾は漸くにして頭を擡げ此有樣を見るよりも疑惑忽ち胸に浮び玻撫女の姿を見るより其傍に走り寄り指もて老翁を差し示し

彼は抑何人ぞや

玻撫流氏は撒奴尼府の議員にして老人は同府の監察官なり

映簾汗は何と云ふ事にや妾は一向解し侍らじ

玻撫咄可笑し和孃も撰擧人となるべき身にて斯計の事を心得玉へぬにや

映簾解りたり然らば老人は撒奴尼府を監察せらるゝ委員なるべし

玻撫否違へり撒奴尼府の議員を監察するなり

と語る時しも其傍に毛那古國の使節と會話も已に倦みたりけん伯父は此方に打向ひ始終の談話を聞き居たりしか映簾に向ひ

委く我より話し聞かせん抑も今日の代議士と云へる者は職重く任高し即名譽の極位たり然かはれども快樂てふ者は毫盡もなし僻邑山村より撰まるゝ者は聊か優待せられざるあきにもあらざれど都府より出でたる議員には殿中の殿あるを以て之を待つ萬事皆撰舉人へ監督を受け坐臥動作悉く從はざるを得ず況んや議員の言論をや況んや議決の投票をや……撰舉人は剛直廉正苟くも假す所なき老翁二人を撰み之を監察委員とし議士の家に遣派し寸時も離るゝことなからしむ而して其受くる所の者は只燃燈の光線のみ是れ蓋し受くる所あれば枉ぐる所あきを恐るゝに出でたる者あり故に監吏たる者は情に絆され義に背くことあし議士の出るや之に從ひ入るや之に從ふ形影相伴ふて暫くも去らず是を以て議士が情慾利慾の爲に節を賣り操を矯むるの事あるなし……とは云へ議士の身に取りては迷惑至極と云ふべき歟……呵々

と打笑ふ折柄馳せ來る流景弄氏は

監察翁の喫咽時間十五分を偷み來れり初めて自由の身となりぬ

と相共に笑ひつゝ映簾の手を携えて舞蹈の群へ打ち交りぬ

其後映簾は日毎に招狀を受けて饗宴に招かれ家にある日は太と稀あり或は舞蹈或は夜會或は立食或は觀劇其人を尋ぬれば紳士紳商起業家より學士政治家豪富まで書を寄せぬ者もなかりける然るから映簾も殆ど招待に倦み果てしが人の誠の八重櫻色香を籠めし言の葉を無下に散らさん由もあく招かるまゝに其許此許と靡くは秋の女郎花引手數多の其内にて流景弄氏より招狀來りしが伯父は映簾か心進まぬ有樣を見て

汝は出身を狀師に期せしにあらざるや而して法律と政治とは關係至て密着なり流氏との交際は汝の職業上に利益あるべし加之流氏は温柔愛すべき人なり人と交るにい赤心を以てすることそ宜かるべし

映簾妾も亦を知らざるには侍らねども頑々たる白髮翁か常に語談の腰を折れば交際の利も薄かるべし妾と自ら考へ侍る

伯父知らずや映簾亦は一時の事にして永久に渉るべき者にあらぬを

映簾然らば流氏は代議士の冠を挂けて去り玉ふ歟

伯父汪ましき問係哉汝は實に至純あり毫も政海の航路を知らず……流氏は在野党にして未だ内閣に立たざれば地位の爲に餘儀なくせられ撰擧人の束縛を受け監視委員の眼界を去らず……然れども一だび雲雨を得て蛟龍池中を去り大權を掌握するに至りなば何ぞ監察委員を恐れん如何で撰擧人の羈絆に繋れんや嗚呼なることを云ふものかな

と叱るが如き血縁の伯父の慈悲こそ甚だ有難けれ

今茲に流景弄氏が室内ゑ立ち入り看客諸君と共に觀察を下さんこと蓋徒勞にわらざるべし何となれば當時の代議士なる者の狀態を知り得べければなり

流氏は妻子あり老實なる叔母ありて能く家政を管理し嚴密なる監吏ありて萬事に注意し家屋飾裝の質素純樸あるは皆是れ監督官の指揮に出でたりき前に代議士たりしより以來少く華美と認むる者は皆監督官に取り捨てらるる

營令ば流氏の學生たりし時用ひ來りし校長の腰椅子ありしが書齋に捉えたる机椅子と共に奪ひ去られたり蓋し懶惰あらざらしむる爲なるべし又室内

に敷きたる華氈の如きも淡白を以て生とすべき議士の主意に悖るとて取り上げたりしが是にても猶飽き足らずやありけん委員は嚴密なる調査を爲し遂に顏面にぞ及びける

美術の最上流に位する畫圖は云ふに及ばず寫眞印刷したる者と雖苟くも風俗を破り心を乱るゝと認められ文明に背き開化に敵すると信ぜられたる額面は皆拋棄せられたり譬へば西班牙、那威の優美韻致に富める山川の景色は彼の爲めに利せらるゝの不幸を受けたりき委員の説に曰く此間の景色は淡々素々幽雅高致を具ふと雖其景色が與ふる所の感想は延て君主政体の思想を生ずべし共和國民の宜く見るべき者に非ず只最も喜ぶべきは瑞士山水の額面のみ其韻致の高尚なる延て彼襞蘭たる一小國を以て自由の淵源と稱せらるゝ思想を養成すべしとて瑞國の景色のみは許されたり此他叔母の夫たる人の門帝磨民兵士官の服裝したる肖像ありしが官級の思想は同等の思想と牴觸するの譏によりて剝奪せられんとしたりしが叔母の哀嘆一方あらず夫の紀念は是のみあるに抵て憫を垂れ玉へと涙を浮べて乞ひければ爾程迄に

云ふあればとて遂に遺し置きよけり

頷面等の裝飾悉く奪ひ去られて室内漠然として甚だ損したりしのみか見る目醜き弊屋とも謂ふべき迄になりたるにぞ何とか計ひ方あるべしと百方嘆き乞ひしかば然らば議定したる上にて請願を容すべしと物の擇に手を尽しを見るに恰も共和神像の如き圖巴里府會及八百八十番議員の圖撒奴尼撰擧會の圖監察委員の像等にて愛國自由の精神を喚起すべき者なりとて委員が定めたる者なりける

流氏は前より寶騰氏の鄭重なる待遇を受けしかば之に酬ゆる酒宴を張らんとて二個の監察委員に商議しけるに彼老委員の云ひける樣

代議士の人々が豪を示し華を裝ひ富人と數々交通するは好ましからぬ事なれども寶騰氏夫婦の如きは實に豪傑の人と云ふべければ其一家族を饗するゝ於ては左のみ異議を容るゝ所なしとて饗宴を許しけり

其宴會に臨みては監察委員暫くも眼を放さず注意しけり映簾は上客なれば流氏の右に着坐しけるが宴始まるに及びて流氏は席を監察委員に讓りて他の席に着きたりける監吏の勢力又大ありと云ふべし

酒皆醇香皆佳にして坐客笑坪に入りけるか映簾のみは心に思ふ所ありけん彼監察官の擧動を瞬もせず見てあるに監察官は威儀を正し儼然として少しも形容を改めず美酒珍饌其前ふ山積すれども映簾は呆れ果て猶も容子を窺ひ居れり

當下委員は衣袋より一片の麵包と獸肉の鑵詰とを取り出だし次に小酒瓶を出して之を机上に排列し嚴正なる聲を揚げ

賓客諸君……斯くてぞ某は己の尊む主義に悖らず客に接する禮儀をも失はざるべし此壯大なる饗宴に於て某は流氏が具へたる滋養會社の珍饌は珊だにも之を受けず

流景弄老君今日は打解け玉へ愛たき孃が祝宴の事なれば左のみ嚴おらずとも宜かるべし……少し斗りは苦しかるまじ……祝して一盞を酌み玉へ

翁敢て辭せん我に良心の明かなるあり猶能く照らして惑ることなし此良心の鏡に對し余は決して義務を怠る能はず……仮令甘言以て余に陷はすも余が鐵石の心腸は決して動かす能はざるなり

寶勝氏は此時までも默然として在りたりしが破と打たる横手と共に

詐き得て公正なり斯くてぞ監察委員の任を全ふする者と云はまし喃左に

はあらずや我妻よ

夫人妾も然かぞ思ひ侍る只敬服の外なきのみ

と賛稱すれば揚々と

翁咖啡のみは受くべし然れども他は總て之を辭す受くるを快しとせざれば

おり

と公言し獨り己の酒を呑み己の肉を食へども眼は常に流氏を睨み咄にても代議士の資格を汚すことわらば霹靂一聲叱咤を加へ其責任を全ふせんと思ひ込んだる剛膽の氣配は面に現れけり

饗宴の翌日一個の華蔓（東花）を匿名にて映簾に送り來れる者あり映簾心裡に

思ふ樣是は流氏の賜賚なるべし昨夕は委員を憚らず懇切なる待遇わり今朝は色香のいと深き心を籠めし東花白々地に名は記さねど云はぬ云ふに彌増さる心裡の程こそ大懇しと口に云はねど神經は確に之を聞けるなるべし今日しも映簾の師と頼む巴里狀師社會の泰斗磨理皎孃が重罪裁判所に於て妻女を殺せる罪人を辨護するの當日あれば師に伴ひて飛空船に打乘り女丈夫が連れ立ちて引ぞ返さじ梓弓巴里の空を翔りつゝ法廷投してゞ急ぎける

第六回

刑勝無刑退隠德
性果善歟感化效

巴里の女狀師に其人ありと知られたる磨理皎女は辨護の巧に太ど猶世の人口に膾炙たり汗を何故と云ふに前回霜比爾が事件とは同日のものあらずして唯其容貌を見るゝらにも獰猛にして惡漢たるを知る可き程あれば人々皆極刑の大罪人と噂せり某新聞の記載する所に依れば其妻が密夫の有ることを知て憤怒の餘り遂に之を殺したりと云ひ傳へし頃ひい人未た其事を知らざれゞ甚だ不幸を憫みしかども已に環審も終へて全く那が性として剋薄兇

暴の爲せる所にして罪故も無きに殺したる事の判然したれば曩に憐みたる新聞の如きも今い却て太と悪くし氣に書き記せり世上斯る分野なれども了得に磨理皈其人丈けに些とも痿む氣色なく寧ろ利鈍を分つ折こそ來つれと喜びて勇氣日屬に彌増せりとぞ

嚮きに己が書記たる映簾が需比爾の辨護をなして大に世間の名を得たる末あれば磨理皈も一入の勇氣を勵み最も仁慈に乏しき陪審官さへ感ぜしめて名譽を博し得んものと亮々たる清音或い高く或い低く喨々喇々迎べつゝ六時間の長きに渉りて辨護したれば陪審官等い凡て之れが爲めに感動して正理の歸する所皆以て有罪ありと認めたる人の心も翻然として思想順に變り今や却て被告を憫み彼の需比爾い映簾が爲めに酌量減輕の寛典に處せられしかども通殺い磨理皈の辨護に頼て無罪放免の宣告を受くるの大幸福を得たりしかば傍聽の狀師等い云ふも更あり一同拍手喝采して雲時い嘆稱の聲も止まざりけり數多の罪囚を處刑して刻薄嚴かぬ判官等さへ我を忘れて只管贊稱あしたりきまた被告い青天白日の身となり社會に立つの人たれば監

視の憲兵們い最も嚴しく縛したる綵も鉄鎖も解き放たれて心も太と打解けて勞はる側への磨理皈女が邊りに親しく近づひて容を端し尊敬して

被告磨理皈娘我が妻を娶りてしより家族の風波斷え間なく身の幸福を獲んものとて結びしものは却て不幸を繋ぐ綵の繩浮世よ流る艱難辛苦は尽く此繩より傳へ來て我身の上に繞圍て悲慘の淵よ沈みては復び妻を迎へじと心竊に韜ひしが今我が爲めに芳卿が辨護されたる情狀を親しく看も し聽もして尚倩々と思ひ返せば我とても復た浮世に幸福を獲ざると云ふにも非ざれば……

と磨理皈の玉顔を斜に視れば磨理皈は之を顧みて

磨理皈實に然る事にこそ自ら敢て棄つべからず

被告芳卿の如きはよく我が心理を洞知て互に扶け俱に幸福を計るに適へる婦人にこそ

磨理皈君が溢美の賞辞何とて妾が當るべき妾が曾て受けたる稱贊の最と高きに思ふぞかし深謝に堪へぬ事にあん

被告芳卿の心果して然らんには流水豈意あからんや芳卿已よ深く我が心裡を洞ぬき亦能く我が性質を知れり芳卿に非ずんば我が妻たるの婦人あし芳卿にして同穴の心あらんには近きに婚禮の儀を擧げあん

歷理皎這は何を云ふものかな氣も狂るひしか譫語にも程こそあれ

と嗷然したる顏貌にて言語擧動もあらくしく側ある書類を把るや身を振り拂ふて馳せ去れば彼は半ば氣も乱れ

被告いまが今まで我身を憫れみ不幸を嘆ひて周到綿密辨護して救ひ助けし口の音のまだ消えも得やらざるに今更拒むも怪しの至り吁恐しき事をやしたりけん盛の花の人中に耻ぢる心もありつらん其れとも我が輕卒に愕きしか何んともあれ此儘に打棄て宜かるべきまたも近きに我眞情を諄く機會の無からずやは

と獨り呟々喞ちがましく語るをば聞くや聞かずや磨理皎ん餘りのことに驚き惘れあとをも顧すして映簾牽き連れ狀師が扣の其場所に這るが如く馳せ行きぬ然るからに扣所の他の說語ん此一大椿事に壓せられて甲口乙唇是が

爲めに動かざるんあかりしが一人の男代言人ん磨理皎女の成績を祝して言ひける樣

男代言　芳卿ん一擧兩得せしとや云はん怎ぜあれば一ん狀師に於ての榮譽を得一ん婦人に於ての榮譽を得られしに非ずや宮に判官を感動せしめたる而已あらず被告本人すら感動せしめたり是れ實に婦人の德なり我們如き男狀師の企て及ぶ所にあらず否企てんも野郎の企て能はざる所あり

一女狀師和孃ん那と結婚し玉ふにや

と後の方より戲むる人あれば雛やらんと磨理皎が顧みれば專ら離婚件を引受ける女狀師あれば身向を變へて笑ひながら

磨理皎もし女狀師が盡く辨護を頼む人々を夫とする者とせん妾ん和女の如く離別の不幸を歎ずる寡夫を慰むる事のみに從事す可し……

と半ばいひさして那の女狀師が顧客たる寡夫の間に怪しき浮說のありけるを其れと言ねど辞の裏に挾みしかば之を听て男狀師們ん言ひ合はさねど

も一同に手を拍きて賛けたる中より一個の男狀師が磨理皎に云ひけるは

一狀師　想ふに婦人の美麗に過ぐるゝ寧ろ婦人の爲めに惜むべし罪人迄も感情を惹き起すゝ蓋し是が爲めなるべし次來品行正しき証明書を携へる女狀師にあらざれば狀師仲間に入らしめざるこそ宜かるべし

と愚弄に云ひければ磨理皎ゝ胸の裡那們が人を感動せしむる能はざるゝ勿論却て眼からしむる無能の者にてありながら人を惑ぜしめ過ぐる抔とは肚痛き事あらずや人ゝ身勝手の者なりきと心のうちに嗤りつゝ映簾を伴ひ裁判所の槃場より飛船を飛ばして歸り語りに

磨理皎　映簾孃妾は那の兇悪なる痴漢の事よりして精神さへも爽かあらねば郊外に逍遙して酵氣をも散じたければ幸ひ是より和孃と共に先きに和孃が辨護せし需比爾を音問はんと思ふなり和孃は如何思ふらん

映簾　何とて那の兇漢を訪はんとは宜ふにや

磨理皎　如何にも然り遣は和孃が初回の願客なり禮義を棄なば兎も角も先つ一度は訪ひ行くも宜かるべし彼も妾と和孃との往て訪はぬを咄や不審

ことに思ひ居るべし

映簾　左は云へ需比爾は今猶囹圄に囚はれ居るにあらずや

磨理皎　然り妾今言ひ侍べりし如く新清の空氣を吸ひ緑樹青艸の菊懣たるを詠めんには恰も好き機會なれば往て彼の監獄を一見せん加之ならず需比爾は妾等兩人の花主なれば必ず妾等を見て喜ぶべし

と答ふるにぞ映簾は時情に疎ければ監獄を觀て罪人を訪んおどとの事は更に心に落ずして獨り窃かに驚くものから詞おく默然として居たりける此少女は久しく偏鄙なる故茂蘭の學校に入學して都會の地に出てされば世の開明進歩に後れて其の思想も未だ進まず然れは今磨理皎女狀師の言葉の中よも郊外に逍遙して鬱氣を散せんと云ひ又緑樹青艸を觀んおどいへる詞は需比爾の身を置く監獄と意の合はぬ事をのみ想ひ一度監獄といふ名を聞けば直ちに鉄柵に圍まれ鉄鎖に繋がれて不自由なる汚穢の所と信じ宛も彼の玻撫武爾の昔話にある監獄の如くに思ひけり既にして女狀師磨理皎は機關手に命じて空船を南の方へと走らせければ機關手は振返り無瑠の退隠所に赴

くにやと問ひけるに狀師は然りと點頭くにぞ頻に船は南に進みける此機關手と云へるは是迄數回磨理皎を伴ひて此牢獄に至りしかば能く路筋を諳じて飛ぶ如くに走りける什麼無瑠の退隱所と聞えしは佛蘭西國の首府巴里を距ること大約五拾丁許の南にありて沙奴の流に臨み其建築も宏大にして中央の一棟は殊更に以太利風の華美の構造に係り又其上に聳えしは高さ拾餘間もありと覺しき美麗なる燈樓にて遙に之を望みてろの退隱所なるを知るべし且此樓上より四方を望めば廣大なる庭園を設け林野は曠濶として際涯おく眼界に瀰るゝもの皆快樂を惹き心神自ら爽なるを覺ゆべし扨も兩個の婦人は頓て監丁の室に下りて入りけるに彼方は曾退隱者の書狀新聞等を配達する時刻にて此は羅微聯區彼は浮聯愚區又は柑園又は何某と其方角に從て振分け居たりしかば磨理皎は近づひて

需比爾氏は何處ぞやと問ひけるに

監丁此退隱所にあり

磨理皎然らば我等が此名刺を氏に通じて氏を訪はんとて來れる旨を告ら

れよ又退隱所長にも妾等が名刺を通ぜられよ

監丁先程需比爾氏は散歩にとて出行れしが已に歸られしや先つ兎も角も見て來らん暫時の間待たれよかし又所長は定めて貴孃等の來訪を喜び玉ふらん直ちに通じまゐらすべし

とて先に立て案内するにぞ兩女は後に從ひて所長の住める中央の最も壯麗なる家に向て進みける磨理皎は行々映簾に語りけるは

和孃も曾て知らるゝ如く此無瑠の退隱所の長なる人は今日仁者中の仁者と仰がれ人を憐むの心甚だ深ふして令德世に芳ばしく翰林院仁愛部の會員よして罪人感化友愛會なる者を設立して此古今未曾有の洪大なる企業を起すに際して廣く江湖の贊成保助を得しのみならず我政府の保護と巨額の下賜金をも得るに至れり卿は今より此温良寛淳の手段をもて人世の罪過を消滅せしめんとする温和沈着の君子を見るを得べし

と語り行くうち早くも應接所に來にけれゝ所長の來るを待ちながら兩女は椅子に倚りて室内を看るに内には五七の人々ありて互に相談話してありけ

るが茲にいと不審しく語音は英にもあらず佛にもあらず然りとて獨逸等の詞にもあらず少女映簾は得業生の學位さへ持てるが故に歐洲中の國語は一として其大略を知らざるは無けれども更ゑ其詞を解し兼て何國の語とも分らねば怪みつゝ磨理皎の顏を見るにぞ狀師はそれと推しけん

此は賊語なり

と云ひければ映簾大に驚き

然らば此賊語を話す人々は何人ありや

磨理皎此人々は大概妾ゲ見知りしものにて我等代言師の顧客なり

と聞きて映簾は覺えず身を縮め磨理皎の傍に寄り添へば磨理皎は打笑ひて決して恐ろしき事にあらず彼れ見られよ彼人々の容貌顏色既に精神靜まれる樣をあらはせるゑあらずや是れ必ず感化せられしによるあるべし

と猶言はんとする折から靴音跫然と響きて退隱所長は戸を開きつゝ入來るを見て映簾は漸々安堵の思ひをなしたりける此所長と云へるは實に德高き君子の風自ら顏に現れ其容貌一として仁愛を表せざる所なきが如く眼光は

烱々たるも威あつて猛からず額には寄る年波に皺を見れども頰は猶薔薇の色を帶び雪を欺くいと長き頭髮と相映じて麗しく一度聲を發するときは人已に之を感じ再び口を開けば皆其德を慕はざるゑし映簾も亦始めて其聲を聞き心神爲ゑ感化せらるゝの思ひあり所長は兩女に向ひ今日此の感化せられたる不幸兒の退隱所に卿等の來訪を辱ふせられたるは實に予の幸にして且此退隱所の名譽なりと一禮すれば磨理皎は笑を含み

磨理皎妾は君も知り玉ふ如く此館の出入代言なり君が管轄の退隱者中には幾多の花主もあるなれど此れある女史は此頃纔に代言の事務に立入られしをもて更に此等の事を知り玉はず未だ一度も此監獄と……

云ふ時所長は周章て肥太りたる雪より白き手を擧けて

所長否ゑ斯々る忌はしき語を使ひ玉ふゑよ若し退隱者中にて之を聞などするとあらば如何ばかり憤るや知るべからず宜しく注意し玉ふべし

と云へば磨理皎は聲を低ふし成程君の言尤ものとゑり妾も之を知らぬにはあらねども此女史の思想を君にも告げんとて思はずも斯る失禮の語を使へ

り希くば恕し玉へ扨妾等が今日茲に來れるは女史と共に顧客ある霜比爾氏を叩きて禮を欠かざらんが爲めなり

所長然る事にてありしか今監丁は卿等の名刺を通ぜんとて辛ひ彼處なる霜比爾の許に趣きたれば此間にて女史が先程嫌ふべく忌むべき名を下されし此退隱所の光景を某自ら案内して見せ參らせん某は此館内に種々の裝飾をさへ加へたり幸ひ卿等が高評をこそ願はしけれ兼て知らるゝ如く予は常に我退隱所をして何ぞ他の手本たるに恥さらしめんとの精神須臾も止まぬ我口より自ら述るも嗚呼あれども予は此が爲め万事に退隱者の稱美を受け實に心嬉しくこそ思ふなり

と云ひつゝ兩女を從へて室内に群集せる退隱者の間を過きし時所長磨理皎に耳語けるは

彼等が眼光の漸く温和あるを見られよ是已に彼等が錯亂せる精神の舊に復して鎮靜せるが故にて已に本善の性を恢復せる兆候なり

といと誇り顔に語る折から最後に來る少女映簾は此善良ある退隱者中の一

男子が來りて吾が軀に觸るゝよと思ふ間もなく衣服の間に手を入るゝ如き樣に不圖手を出して懷中を搜れば遣は如何に忽ち財囊を失へり然れば心大に驚けども彼の温厚ある所長の心配憂慮せんとを憚りて色にも出さず尙其後に從ひ行くに所長は又廣やかなる一室の戸を開きて

所長此室は退隱者の逗留遊戯場あり見らるゝ如く万般の遊器を備へ玉突より瑠列度に至る迄一として備らざるなし又歌留多將棋とみの類各人の欲するまゝあり此左方なるは書籍室にて三萬卷の書を備へ正語半正語不正語の三部に分てり先づ退隱者初めて來る時は急激に正格ある書を讀ましめて嚴直の事を見聞せしむるも其實効なきをもて初めは猶正さゝる賊語にて記せる書を與へて讀しめ漸く時日を經てより半は賊語半は正語を交へし半正語をもて記せる書を與へ已に此時精神漸く爽ならんとして已よ本姓の善に向ふの時なるをもて此半正語の書にて猶愈々之を化育し後に十分精神舊に復するを見て最後の部ある正語にて記せる冊子を讀ましむ之を要するに罪人不良の徒を感化して本性の善に復せしむるには温和

仁慈をもてするにあらされハ決して得へからす

と云へハ磨理皎ハ大に感じ

磨理皎妄想ふに此ハ唯罪人の化育のみに止らす世上萬般の事總て皆其秘訣とする所ハ茲にあり

所長壯年盛の爲には殊ゝ其身体をして強壯あらしむるがため此構内に最良の運動場及び庭上遊戯の法を設けたり請ふ卿等樓上に登りて玉抛其他の遊戯の狀を一覽せられよ衆人念餘念あく此等の遊戯を爲せり實に身体と精神の樂は此より善き者はあらざるべし

磨理皎想ふに然らん而して君ハ退隱者の有樣を看て既に滿足せらるゝに

や

所長然り予ハ將に雀躍せんとす予ハ已に年來言ふが如く罪過ハ決して不治の症に非ず只憾むらくハ人間の智ハ未だ精神を惡に陷らしめざる前に豫防する至靈至妙の奇藥を發見すると能はざるのみ然れども罪過の病に罹るものある時は之を治すると決して難からず世の仁者は皆口を揃へて

精神の健康を恢復するは決して古來用ひ來れるが如き嚴格なる懲罰法の手段によつて得べきにはあらず只精神の罪根を絶ち狂疾を治するハ單に温厚以て之を遇し之を樂ましむるにあり一言之を言へば幸福を以て感化するに在りと言ひ今一人として異說を唱ふるものなし是實に眞正の治法にして實際已に万國の採用する所とありしを見れば百年來此說を稱ふる學士の世の駁擊に對して相爭ひしも實に無功あらざりしを知るべし卿等試に思ハれよ彼等が精神錯亂狂顚して罪を犯すの目的ハ果して何處にあるや豈徒に人を苦しめ他を害するのみにて滿足するものならんや又豈此等を目的として罪を犯す者ならんや他あし只是れ自ら食欲を滿たさんと欲するが爲なるのみ實に是吾等が須臾も忘るべからざるの關鍵あり其れ然り故に彼等に財物を與へて其欲を充たすを得せしめよ彼等は忽ち本性の善に復し精神忽ち健康とあるを得ん是則ち幸福をもて善に導くの大理なり

磨理皎實に君が退隱所ハ他の模範たるに餘りあり妾等ハ稱嘆の外言ふべ

き事あし

所長否請ふ暫く待ち玉へよ先程も言ひし如く我退隠所い近頃多少の装飾を加へたれば卿等一見の勞を厭ひ玉はさるべしと思ふあり且政府の允准を得て日曜と木曜の両日には我退隠者を引連て弁根撫公園に散歩することゝなれり其日にい溶泊質素ある行厨を携へて公園の樹下若くは岩上に思々に坐を占め清泉よ臨んで食事をあすい實に譬ふべからざるの快樂あり又某い退隠者等を集めて或い植物學地質學あどを説聞せ又或い絲を垂れて池に釣せしむ是れ亦最良の感化法なり卿等の知らるゝ如く政府は殊更に我退隠所内よも沙奴河の支流を引きて通じたれば頓て我遊園と此流とを見玉ふべし而して其景色の美にして且雅致風韻あるい卿等も必ず稱美せらるゝならんか實に精神の妄想を消滅するものい釣魚を措きてい決して他よあらざるべし我退隠所内には此河流の外猶魚類充満せる一池あり

磨理皎そい誠に結構の設けあり

所長是等は卽ち此退隠所をして他に比類あからしむるの装飾なり日猶浅しとは云へ此装飾は我退隠者に著しき効驗を與へ血氣勇猛の徒は活潑運動に依て次第に温順となり兎角に物を考ふる性の退隠者は河流に傍ふて行きつ戻りつ釣魚の爲に全く妄想を絶ちて感化するに至る請ふ見られよ彼處に竿を肩にし籠を手にして遊園の奥に進み行く男子あるよあらずや磨理皎眞に然り彼い果して釣を垂るの人あらん

所長卿は如何に思ひ玉ふや看よ彼が顔色い温柔あるべし眼も觀からず足つきも静かあるにあらずや磨理皎然り眞に篤實なる人の如し偶之を見れば宛然小地主が日曜の散歩に出るが如きの有様なり

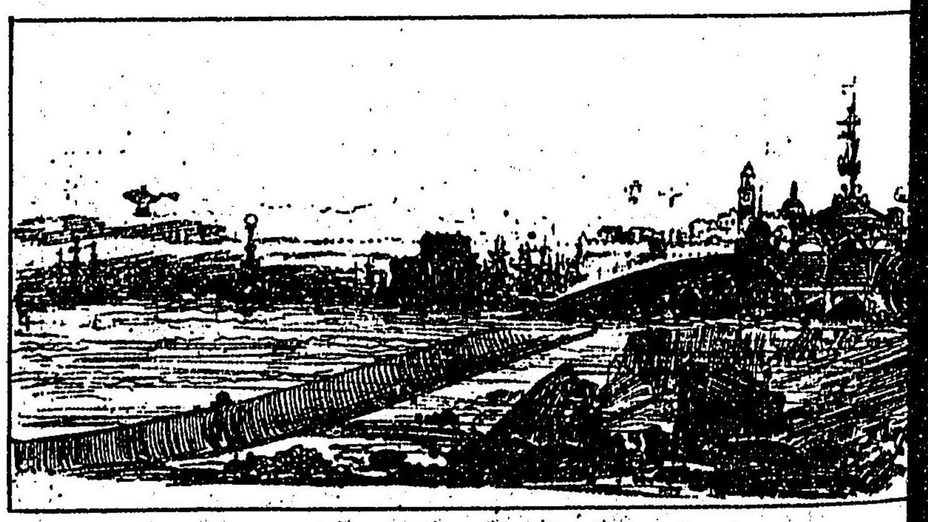
所長抑も彼い如何ある男子ぞと問へば空中の夜盗を爲せしと六回に及び其他兇器を携えて强盗をしたること四回なるをもて遂に爰に送られたり然れとも今い早や追々感化の傾きあり尚是より六ケ月の間釣漁をあさしめてのち佛國い予に托するに悪人を以てせしも予い其代りに佛國に返すに温和篤厚の一男子をもてすべし又此方なるを看よ彼處の岩上に腰を掛け

新聞を讀みながら煙管を口に啣みて烟を吹く肥満たる男子を見られよ彼は實ユ奈何ともすべからさる男子なりしが何故に此退隱所に來りしや慥には覺えね共卿は之を見て如何に思ひ玉ふにや

磨理皎殊に最も健康なる有樣に見受らる此は果して何人なりしや所長實に卿の言はるゝ如く今は斯く肥え太りたれども始めて來りし時は實に骨と皮とのみなりし就て言ふべきことそあれ凡ろ罪人の茲に來りて肥え初るは卽ち是れ感化の効漸く現はるゝに因てなり若し彌よ肥滿するに至るときゝ予始めて安心することを得此時に及んでや身体精神兩ながら既に健全とあれると經驗の上より來れるいとも慥なる考案あり

磨理皎要するに此退隱所は万般の事實に整頓せりと云ふべし所長然り余りに整ひ過ぎしをもて終には既に退隱の期を過くるも猶茲に留らんことを希ふ者多きに至れり此等は予が心に於て實に之を憐めども他に詮方なけれバ强て門外に追出す事さへ止を得ずして爲すとあり然らされバ新入の者に室を與ふると難きが故あり然れバ彼等は常に予を尊み愛すると宛

罪人青天ヲ仰テ慈心ヲ脱却ス



常船往來ノ景

（第六回　刑勝無刑退隱傳　性果善歟感化效）

かも神の如く親の如し

と語る時以前の監丁走せ來り

監丁漸く需比爾氏を見出せり今氏は氏の園内に在りて何卒拄ても兩貴女の玉趾を勞されんとを希ふとのとなり

所長然らば予も亦卿等と同伴すべし需比爾氏は新入あれば猶能く觀察すべき事もあり

とて所長は磨理皎娘の手を携えて映簾及び監丁を從へて需比爾の園へと赴きしが其通路に種々樣々なる遊戯をおせる退隱者等は皆遊戯を止めて恭しく一行に向て敬禮しける其中より一人の惡相おる少年映簾女の傍らゐヅカ〳〵と進みより摩燈を請ひ求めしゞ此時映簾ハ彼が爲に懷中時計を奪はれしを知れども此度も所長に氣の毒おりとて一言半句も云ひ出さず頓ていと廣大なる庭園を囂徹の生垣もて幾條に仕切したるを過ぎて漸く兩女の顧客おる彼需比爾の居る庭園にぞ來りけり此時需比爾は草の上に兩足を伸ばし鼻を天に向け口に煙管を啣み一心不亂に雲を望み頻ゐ高く煙を吹き遣らん

と餘念なき体なるを見て

所長此は需比爾が漸く夢みる所なり是れ決して悪しき兆にあらず感化の初歩なり

と喜ぶには能くも心を注めざる磨理皎は庭の戸を開きて進み入り

磨理皎需比爾君よ定めて今日迄妾等が來らざるを不審くや思はれしならん全く事務忙しく遂に禮を欠くに至れり偖頃日は如何に暮し玉ふにや

需比爾予が生活はさまでわしきと云ふにあらず先づ此方にて寛かに語られよ又我れ若き代言女史に贈らんとて預じめ作り置たる束花あり先づ之を進ぜん

とて需比爾は傍なる束花を取出て思ありげに映簾に贈りける時

磨理皎君も不自由を感ぜられぬ様なれど日覆だに無きは少し不足なりと云ふ時所長は急にといめて磨理皎の耳に口を寄せ

所長其言ふては甚だ悪し曾て茲に天幕ありしも予は故に之を除かしめしは必竟其語音の同しきよりして需比爾が重なる不幸の原因なる彼の叔母

（天幕叔母同音）の事を思ひ出さしむるの恐あるをもつてなり決して是等の事を曖氣にたもだし玉ふなよ

磨理皎又手は斯る深き意のある事ありしか寔に注意周密到らざる處なしとこそ云ふべし然らば他事を語らんと耳語きて又需比爾の方に向ひ一層聲を高らめて

磨理皎君には茲にあるも万事不自由なる事あらざるや

需比爾然り予は毫も悔ひ歎く事なし食物は可ありにて遊戯の快樂もあり實に不自由はなけれども唯一の缺點ともいふべき事あれども……

所長需比爾其は何事なるや

需比爾他よはあらねど茄啡の品質甚だ良からず願くば今少し詮議ありたし且玉突の具も甚だ少なし

所長遊戯室には既よ六臺あり

需比爾去れども是にては未だ十分ならず常に塞がりてのみ居れば順番の來るを待つに甚だ長し

所長成程尤ある事なり予は直ちに政府に上申して其數を增すべし

需比爾其事さへ出來なば予は實に此に居る程樂しき事は他にあらず

と談話の間に映簾は物思はしげある顏つきにて需比爾が贈れる神花の束ね集めたるを打守りて居たりしが此時磨理皎女狀師も之を覗つゝ

磨理皎實に美麗ある花なり

と云ふを聞きて需比爾は映簾女に打向ひ

需比爾貴女ゝ此花を知り玉ふや貴女に贈り參らせんとて故に予が自ら生育したるあり

と云ふを聞きて映簾は噫と許りに顏色變じ心亂くを知るやしらずや需比爾は

然あり然あり唯卿に進ぜんためのみ某は苦心して斯く卿花を作れり、しかのみならず已に法庭にても言ひし如く卿能く我心を知り我情を察し我自ら逃るが如くに辨護せられしをもて遂に我心も爲に感動せり其に卿は某が大恩人あり然れば予は今卿に此の卿花を進ずるあり

映簾今君より得し此束花こそ……

需比爾卽ち予が園生に作りし花あり

と胸に手を當て故よ面を和らげ莞爾と笑めば映簾は最早こらへかね今需比爾が思ひを込めし美麗の贈物ある束花をも忽ちに投捨つ磨理皎女及び所長に一言の禮をも述べず元來し道へ走去て宛も全退隱所の人々が追跟來るかと思ふばかり廣園を彼方へと脫兎の如く逃げ行ければ所長及び女狀師磨理皎は痛く映簾の擧動に驚き其儘に捨置かんには如何なる事の起らんも知る可からずとて監丁をいそがして其跡を逐はしめ後需比爾に向ひて其失禮を打詫て之を辭しわかれ猶所長は女狀師の手を携えて中央の所長の居館に歸りける

所長卿は我が退隱者の騷ぎ立を見玉はざりしや何か用意する如き模樣に心づき玉はせざりしや

磨理皎然り妾等が考へにて見れば祭典の用意とも云ふべくソレ彼處よは何か緣門樣の者を作るやうに見ゆるにあらじや

所長成程是こそ一の凱旋門なり

磨理皎然らば今日は貴顯の來臨にてもあるゞ故にや

所長否々極々手ぢかの話あり卿い此凱旋門の何故なるやを察し得玉ふにや某一應卿に語らん今日は正に阡阿布禮祭日なり

磨理皎果して斯る事あるにや

所長即ち此某が祭日あり我退隱者は某を驚かさんとて皆々一致して此事を企てたり然れば卿も之を知らぬふりして成たけ彼方を見玉ふあ先つ聞かれよ八日ばり前より醵金館内を回りて集まりし金にて某ゞ肖像を寫眞彫刻術にて作り之を我尊むべく愛すべき長官閣下に呈す武瑠中央退隱所一統との數語を配せり

磨理皎實に彼等が企ては神妙なる事なり

所長予い今より感涙をとゝむる能はず今夜は果して如何ならんかと鼻拭を取り出して双眼を拭ひつゝ早や凱旋門の下に來りしかゞ所長は故に頭を垂れて見ぬふりして過ぎ彼等をして誠意を遂げしめんとなしけるに

磨理皎は思はず上を仰き見るにぞ所長は大に驚きて急に之をとゝめしも早遲蒔にて此時退隱者等は所長の近く來るを見て急に時限を早め拍手喝采の聲ともろともに凱旋門を全く現はし阡阿布禮万歳所長閣下万歳と異口同音よ呼いれは所長い驚き呆れし有樣にて胸に手を當てつゝ凱旋門を仰き感じ入りたる顏色にて

我愛兒等よ予は汝等が厚意に感じて答ふるに詞なく只予い双眼の涙をもて答へんのみ

と言ふ時委員々々と呼ぶ聲の下より四人の男子列を離れて前に進みいと大なる東花を所長に呈するを合圖に委員一同口を揃へ

けふやは君が祭りなれ　深きなさけの露ぞこぼる

我等が身にぞ潤ほふて　こゝろも清く洗ふなり

塵もに銘みて、わめ地と　掘ひをかけて、忘れまじ

世にあり難き、惠みなり　國家の績ほし、よの中の

きみが譽れは、日や月と　雲井にたかく、輝やきて

世々に光りを、殘すめり　榮くよはひ、松が枝の
緑りも千代や、萬づ代と　まこゝろ込て、祈るなゞ

と新に作れる贊阿耳布禮の頌歌を聲朗かに唱ふれば群衆は帽を打振り手を挙げて皆万歳とぞ祝しける此時所長は磨理皎女狀師に耳語くやう

所長　此唱歌する委員等い皆十年以上茲に退隱して他に尊まるゝ人々なりと聞く

磨理皎　然らい此頌歌を作りし詩人は如何なる人にてありつるや

所長　ろは巴夫智と呼べる者にて以前は某地の金預りを業とせしが他人の金を私消せしをもて茲に來り常に詩文に心を凝せり又無事なれば精神能力自ら衰ふとて頻に乞ふにより今は當館の書籍を受持てり此巴夫智の内々の話にて某は今日の事をも已に知れり就中醵金の事ゑ就き一條の賊に感佩に堪さる美談あり

磨理皎　そは如何なる事にや

所長　卿聞かれよ先に云へる某が半身の肖像を造るとて皆々金を醵したる

に尚金員不足して奈何ともおし難きゑ際し二人の退隱者は自ら進んてその不足を補はんとを約し窃かに當所を忍び出て往來少おき大路に出て日の暮るを待ち牛商人を遣わ要して竟に此金を調へ來れり彼等は此が爲に猶六ヶ月の退隱所入の期を長ふせらるれども之をも厭はて金を調へ來るは賊に感心の事あらずや某は初めて此話を聞きし時には嬉しさの餘り覺えず涙を浮めたり

磨理皎　賊に美談なり

と言ふ時詩人巴夫智は已に唱歌を終りしかば所長は手を胸の上に當て感動せし体をなして頓て口を開きて群衆に打向ひ

所長　諸君よ諸君、わゞ最愛なる諸君予い此の盛大なる祭典の榮を受けて欣躍に堪へず予い是ゑ酬ゆるに大赦を以てせん特に犯則者を赦しまた來る月曜の午前まて外出の自由を與へん(拍手大歡叫)

衆徒　酒を賜へ〳〵

所長　まてよ〳〵に諸君が予をして犯則の責めをとらず予が云ふ所を守ら

が何の幸か是に及バん必ず月曜日午前十一時を期して歸るべし晝食に後るゝと勿れ萬一相當の事故なくして豫定の時刻に歸へらざれバ食後一週日い菓實を得ると能はざるべし

衆徒祝へや祝へとも〳〵に醉ふもうたふも祭あり

所長しり〳〵直ぐに準備をあさしむべし然れども祝宴の後にあらされバ漫りよ外出すべからじ

と太と叮嚀に諭せしのち磨理皎狀師を誘ふて本館の方へと歸り乍ら所長予は彼等が斯る光景を見て感涙を止めあへず卿も見らるゝ如く皆能く感聞の効あるを知るゝ足るの狀あり去りあがら卿に注意まてに言ひ置くべき事こそあれそは他事にあらず錄り遲くまて此退隱所の近傍に留まらぬことにし玉ふべし如何とあれバ卿も知らるゝごとく予は彼等に休暇を與へ外出勝手たるべきを許したれバ恐くバ路上平日の如く安穩あらざるべし或は不慮の事あしとも言ひ難し用心して歸られよ

と云ふを聞きて磨理皎は驚き呆れ心の中に思ふ樣若し然らば斯く迄に感化

と云ひ德育と云ひ喋々しく唱ふるやからが成功は果して何處にかある退隱者等が溫良の色あるゝ全く心より化したるにゝ非さるべし噫と歎じて猶豫すべきに非されば急ぎ監丁の室に到りて

磨理皎映簾孃いざ歸るべし空船は何處にあるや

と言ふ時映簾ハ一禮して磨理皎孃よ向ひ

妾一度代言師たらんとの望を起してより今日に至る迄姉ゞ教示と懇情とを忝おふせしい海より深く山より大ある恩義今更謝するに詞なし死するとも爭で之を忘れん然れとも妾能々思慮して今は代言師たるとを好まじからす

磨理皎如何に卿は狀師たるを希はずとや已に名を世に知られながら今更之を止まるとは何事ぞ

映簾妾が心は已に決せり復た如何ともすべからず妾は狀師の望を絶ち且再び需比爾氏を見ざらんのみ

と斷然云ひ放ちて復た動かすべからざるのみ決心とは見えたりけり磨理皎

は映簾の言を聽きていと訝しきことに思へどもその顏色と云ひ斷言と云ひ深く心に感ずる所ありての出來事ありと思へば更に强ひもせず姑くろの意に任せて家路にこそは就きゐけり

第七回

設置實地講習所
大使練習政治業

如右而中央退隱所に在る需比爾を訪ひたりし映簾は後見たる伯父ゐ向ひ決心の旨を告げたりしかば實勝氏の驚きは一方ならず餘りの事に開きし口を閉ぢもせで霎時は映簾の顏のみ打守りて居たりしが良や久ふして歎息しつゝ

伯父汝は狂氣ばし爲したるにや何故今更心を變じて斯る事を思ひ立ちしぞ代言師は實に後來に望ある良職なるに之を希はぬとは想ふに本氣の沙汰には非ざるべし汝は已に過し日の事件にて名を世に知られ行々は一二を爭ふ狀師となるべきに自ら之を止めば一には我身の益を思はず一には人民の幸福を謀らず抑も汝は鰥寡孤獨を保庇辨護するを好まざるか

映簾否々妾は實に憐むべき此等の不幸なる鰥寡孤獨の人々を保庇するを厭ふて狀師を欲せざるにもあらず唯だ妾は此の不幸ある鰥寡孤獨の製造人とも云ふべき兇漢狡兒を保庇し爲に辯を費やし心を苦しむるを欲せざるが故に斷然志を變ぜしなり

伯父汝は已に狀師たるに倦みしにや偶一顧主の少しく汝の爲に感動せしをもて汝は忽ち狀師たるを好まざるに至れり汝は已に心に之を決したるや

映簾然り全く決心し師磨理皎鐵にも之を告げて其第三位の書記たることを辭せしなり

伯父然らば汝は是より如何なる業を爲さんとの心にや

と問はれて少女は今さらに返答すべき詞もなく只頭を垂れて居たりしが斯てあるべきにあらされは恐る〳〵頭を擧けて

映簾斯かる前途のことなとは未だ露ばかりも心に浮び出てず

と云ふを聞き伯父實勝氏は少しく氣色を變じて聲音も銳く

噫實に困り果たる少女よあ漸く汝が方向も既に定まりたれば我後見をも遠からず解くことを得べしと早くその用意さへ整ひ汝が財産の精算をもなし置きて頓て一世話逃れんと思ひし事さへ水の泡にて又もや斯る事となり後見を解くともまた急には出來ざるべし

と屢々歎聲を發するにぞ映簾も何と應へん樣もなく互に詞あかりしが良ありて伯父は映簾に問ひけるやう

然らば汝は他に是れぞと云ふ志もなく又何をなしたらばとの定まりし考へもなしとするか何事も好ましからずとせば最早汝は如何ある事業も適せざるものとするにや

映簾誠に斯る事業は性來好まざるのみならず話に聞くさへ身震せぬ許りあり

伯父好々いよ〳〵斯と定まる上は又好き工夫あるものにて今は汝が身の方向も斷然と定まれり

映簾夫は又實事よや如何ある故ぞ

と驚くを看て伯父は爾こそとうちうなづき

實に決せり是より汝は政治社會に身を立つべし

映簾然りとは云へ政事家とならんには……

伯父汝い已に他に志あく自ら過する所を知らず只何事をも爲す能はずと言ふに非ずや政治社會の事務亦是他と均しく一個の職業なれども之を他に比するときは至て便宜ある事又類あしと云ふべし是實に八十九年の大革命の賜物ありと云ふも認言あらざるべし汝も知るかは知らねども彼大革命の前迄は世に此等の職業もなく若し或藝能學術等の事業中に一個の適せる職を得ず何事も手に合はぬ人々は已むを得ず徒食して居ながら蠹兒の蠹るを待しかど今は此政治の職業といへる最も便宜ある者世に出來て誰にもあれ他の職業を爲し遂げぬ人々を待つあれば汝も今より政治の事に身を委ぬべし

姪然は然りあがら妾は實に……

伯父汝は又々如何ある事をか述べて抵抗せんとするか政治を業とするも

決して卓越拔群の才能學職を要するにあらず汝は未だ知らざるべけれど今日堂々たる政治家と雖も十に八九は皆他の業務に失敗して後此政治社會に入りしものあり若し此便宜なる政治の職業なかりせば或い今日有名の政治家と云はるゝ人も些細なる藥舗或は至て閑暇多き公證人にて終りしなるべく又或は著名の政談家も砂糖を秤りて一生を送り竟に世に其人のあるあしをも知られず又は雷名世に轟く省卿も僅に一小都會の寫眞師にて此世を終りしあるべし去れども砂糖屋あり藥舗なり又は公證人なり寫眞師あり斷然その後來に屬すべき望あきを知りて偖政治社會に入りしか故にこそ今日にては皆有名なる政治師ところありしあり噫汝は知れるや今時は政治家と云はずして皆政治師と呼べるとを此等の政治師等政治社界に羽を伸して諸人の尊む所となり撰擧人は皆我一に之を我等の代議士とせんとし人民は皆謹んで其説を服し且此等の人々の生れし都會は榮譽として誇り終には其人々の爲に銅像を建て紀念碑を作るに至る而して其根元を尋れば前に云へるが如き人々なるのみ

姪なるほど斯る職業は寔に便利ありと云へ世に男子の政治家あるを聞けども未だ婦人の政治家あるを聞かず

伯父是れ亦世間知らずの忘想と云ふべし政治社會は婦女子と雖ども自由に立入るの權利あり今い女子と雖も政權一として之を有せざるものあく撰擧人たるを得べく撰擧せらるゝことをも得べし汝猶曉り得ずんは往て伯母御に問へよ伯母御は此度予が當地の男黨の候補たるに抗して自ら女黨の候補となり雌雄を來る撰擧會に爭はんとて其用意頗なり女子も業に已に撰擧權あるが故に民撰議院中に女子にして議員たる者二十人内外あり僅に二十人内外に止らば微々たる如くに想へども次第々々に增加して日を逐て盛あるに至るべし既に政府は婦人をして官吏たるとを得せしめたり殊に或地方にては縣令職を罷めしに其夫人代て縣令の任に當るを得るに至りしもあり要するに婦人は精神緻密にして且万事に温順あれば事務總て圓滑にして澁滯せず行政廳の間に屢起り易き紛擾も婦人をして之を爲さしむる時は甚だ少なし汝も或は良縣令たるやも知るべからざるに

非ずや

と嚙んで含める伯父の說諭に姪女は漸く曉り得たりけん折々笑を含む樣あるにぞ伯父は心に悅び又もや意の變らぬ內にと尙も語をつぎ

伯父去れば此業なれば後來大に望あり今より汝は直に政治の學問を始むべし予れ速に其旨を傳へ片時も早く汝をば傳習所の生徒たらしむべし

と云ふを聞き姪女は嘗て音樂傳習所にて苦みし事を思ひ出して驚き親に映簾に又今傳習所よ行けと命ずるにや

伯父否々音樂傳習所には非ず我汝を遣はさんと思ふは政治傳習所の事なり汝は万事に疎ければ此等の事すら猶知らざるべし抑も政治傳習所とは官立の學校にて後來政治社會に望を屬する少年子弟の特別なる敎育を受る所あり此等の模樣は汝頗て親しく見ることを得べし校長は予が最も親しき朋友の一人なれば汝今より入校するも必ず都合よく運ぶなるべしと思ふなりと伯父は此事を細君にも謀りければ云へるやう

伯母此は至極宜き考へなり後日必ず望あるべし就は入校の手續等に關し豫め計ひ置ころ可らん明日は妾自ら映簾を伴ひ去て校長の許へ赴くべしとみづから奮て勇たち一人にても女子の政治家を增さんと思ふ其熱心の程こそ思ひやられけり映簾は此夜蓐に就けども眠られず夢の如く現の如くにて天明に達するまで或は裁判所或は政治傳習所又は需比爾又は地方官などさま〳〵の思想混淆錯雜して心に浮びしかば翌朝起出しときも政治傳習所長を訪ふの勇氣も更に無かりけり此政治傳習所長は廉直方正の士にて嘗て政海の波瀾を凌ぎ千辛万苦を經て其名を著はせし人傑ありしが今は老衰べたればとて身を退ぞきて此傳習所に入り專ら敎育に從事して後來佛國の爲に有爲活潑の大政治家を輩出せしめんと日夜心を碎きて倦まざりしとかや然るに實勝夫人何卒して一個の女黨政治家を養ひおさんと思へば進まざる映簾の心を勵まし如何にもして勉强せしめんと思ひ

伯母映簾よ汝は定めて此政治傳習所にい男生徒のみなりと思ふおらん然れどもその實は然らず妙齡の女生徒たる者多きと毫も彼の音樂傳習所に異ならず然れば必ず良き學友をも得るおらん況してや妾が想ろに校長に

頼み置けは必ず皆の人よ篤く待遇せらるゝあらん先づ一刻片時も早きこそ第一の策ありいざ往かれよ

と急がしたてゝ伯母ゝ映簾を伴ひ一隻の空船を走せて校長の許へぞ赴きける抑も政治傳習所と聞えしゝ衆人誰とて知らざるものなく或ゝ耳に聞き目に見もして皆其何たるを識るあるべし傳習所ゝ伐知倶乃大街に在て宛も巴梨の中央に位せる宏壮雄偉の建築にして其の校内を數個よ分ち或は講義室あり或ゝ獨學室あり或は數箇の玻璃窓を穿て周圍に樹木を植え空氣の流通甚だよき勉強室あり或は又民撰議院の模型に因て其儘ふ造れる廣やかなる室ありて生徒議事の科を修むるの敎場とす其他猶敎師の詰所及生徒の寄宿舍ありて寄宿生及通學生を置き大に政治學を敎授せり今や政治傳習所長ゝ實臘夫人の來り訪ゝると聞きて直ちに之を巳が扣所に招き入れられける實に此立法院に年を經し老成の校長は其容貌すら既に議院政治を表するの人物とこそ云ふべけれ身には黒色の服を着け白色の頸巻を纏ひ金枝の眼鏡を懸けて口を結び且數十年來政治社會の刻苦心勞の爲に一耳を聾せしと覺し

く右の耳に象牙製の聽微器と稱する器械を掛め人ありて語る時は苦痛を忍びて其方へ此器械をば廻はしけり實臘夫人は一禮して校長に向ひ

目下當校生徒の數は如何ある都合にやあらん

校長然れは其事なり當今は婦女子迄も政治を談論し國事を是非するの世とありしをもて爲に當校も生徒の數を增したるのみか知らるゝ如く世情の風潮として誰も政治彼も政治と皆人が先を爭ふて政事に志す有樣あれば實に當校の生徒も既よ充滿せしのみならず正に多きに過きたるの有樣あり

實臘夫人然らば中にゝ婦女子の生徒も多少之れあるべしと思へども如何にや

所長然り先づ四分の一許りゝ婦女子の生徒なり

實臘夫人果して然らば國家の爲め祝賀すべきの事あり妾ゝ婦女社會の次第に智識の度を進め漸く天賦の權利を恢復するに至るを見て實よ欣喜ふ堪へさるあり如何とあれば男子ゝ恣まゝに中央政府及ひ地方廳の官吏と

あるの權を專有して婦女子に分たざらんとす想ふに今や政治に志ざしオ
識經驗に富むの婦人なきにあらざるべし噫男子は何ぞ早く婦女に政權を
分つて共に事を執らざるや
と思はず慨嘆するを聞き校長は襟を正して答へけるは
我今政治家たるの資格をもて夫人に答へんには我亦己れが執る所の說あ
きにあらねども今は政治を談すべきの地にもあらず去れば別に述ぶべき
事もあかるべし又校長となり後來佛國の政治家を養成するの身を以て言
へば毫も同性に偏頗する所あく予を以て視れば女子も男子も一視同仁と
や云ふべけれ
寶勝夫人貴君が本來の性質より由りて推すれば定めて斯こそあらんと妾も
常に思ひしなり
校長今日の勢にては苟も婦人にして女子ある者は皆之をして縣令郡長な
どの行政官吏たらしめんと希はざるものはなく皆爭ふて當校に登らしむ
往時は女子を生めば紘哥等のみを習はしめしも今い新聞記者若しくは代

議士たらんとするに至り世人擧て政治家たらんとす想ふに數年を出でず
政治家を以て社會の大半を塡め被治者却つて少なきに至るも知る可らず
と笑を含んで述べけるにそ寶勝夫人は會釋なし
貴說の如くなれば已に生徒の數も滿員あるよしなるにも拘はらず妾は今
日尙一人の女生徒を誘ひ來れり强て願ふも憚り多き事あれども年來の好
誼に依りて手數面倒ある入校の式を適用せず希くは本校の生徒の末に加
へ賜ほれよ
校長他ならぬ貴夫人の賴談なりいと容易き事なれば速に承諾せり然らば
貴嬢は直ちに初年の學科を學び玉ふべし他の人々より偏頗ありとの誹を
受るかい知らねども貴夫人の依賴お係はれば豫科一年を飛び越さしめて
本科生たらしむべし
寶勝夫人そは誠よ忝おき事にてありき然らば姪をば直ちに入學せしむれ
ば宜しく計らひ賜いるべし今日は女黨の委員會ゑ出席の約ありて早已に
その刻限にも至りぬれば失禮おがら妾には暇を賜はりたし

と常に忙しき寶騰夫人は校長及ひ映簾女にも別れを告げて傳習所を出去りけり既にして寶騰夫人出て去りしが間もわらず校長の打鳴せる呼鐘と共に出來れる小使の案内に從ふて第一年生の教場に教師へ紹介の詞を得て入りけるが此教場は甚た廣やかよして數多の机を並へたるが中央には一條の往來を通じ之を區域として左右の兩大部に分ち六十人内外の生徒各其机に倚り右一半を男子とし女生徒は左の一半にぞ着席し正面には一段高き檀上に教師の席をぞ設けたり映簾の入來りし時い教授の最中なりしかば小使に誘はれて一個の空席に着き差當り教課に必用の書ある政治、地理書、行政法及ひ郡長必携等を受取りしが此時滿場の生徒は映簾の方を顧み男子は肘を捻り て映簾を見女子は映簾の服裝を見て嗤ひを含みけるかゝれば生徒の心を惹き起さんとて殿と机を敲き

講師諸子よく我講ずるを記せよ諸子若し農業須要の獸類の病理病目を知らざる時は農家必要の牛馬の事や農業の概略を述べて其場を終るべし併し餘り漠然たる演說をおすも不都合あれば若し獸畜の中に傳染する病の

事や農業用の符徴熟語抔を滑して述ふる時い果して之ゑ感服し博學有識の人たりと思ひ大に人心を收むるとを得べし

と太と爽に講ぜるを听き映簾い惘然として其事柄の解し能はされば側ある一人の乙女を顧みれば彼方は映簾の蹙ける樣を見て可笑とや思ひけん笑を含めは映簾は聲を低ふして

卒爾ながら今講ずる所を聽けば此は獸醫の科にてもある事にや

と尊るにぞ乙女も同しく聲を低ふし

否々然る事にはあらす卿はいまだ知り玉はずや是ところ代議士及ひ郡長の科にて今の講義は代議士及ひ郡長巡廻箱中ある農談會の章なり

映簾さらば今教師の講ぜられし獸類の病名云々の事は

乙女されこそ郡長代議士等が農談會に連りし時あすべき演說の心得あり

映簾果して然る事ありしか妾も漸く會得せり

と低、語くちまたも講師い語を續ひて

講師諸子が重復するを忌まずんば已に演べ終りたる事が其議院たると郡

長ある差別に依て亦自ら其事柄の同しからさるべきを說くの必用あるを感ぜり即ち郡長の點に在ては單に政府の意を遵奉して述ぶるに止まることあるは今更喋々するも及ばざるべし獨り議員に在りては然らず此場合に於ては先づ其議員の政府黨なりや將た保守或は反對黨ありやを分たさるべからず郡長及び政府黨の議士の演說い必ずや農家の安寧幸福農業の進步家畜の繁殖等を稱美の語贊歎の句を交へて述べて政府の良政を稱するの外あるべからず然れとも反對黨の議員の演說い少しく異らざる可らさるか如し試みに諸子に問いんとす諸子の中誰か果して反對黨の議士が演說すべき大体を演べんとするか

と云ひながら生徒の方を見て在りしが一男生右手を擧げて表する者ありしかば直に之に命ずれば生徒は咳一咳して聊か愚見を演ぶべしと態度を搆へ

諸君よ諸君我が聊か胸間にあるところの愚見を吐露して法蘭西の農業が進步せる著しきに感じて予が考へを述んとす嗚呼農業は國家の大本ありて我國の農業は實に富盛なり而して其有樣を見るに政府は十分の保護を與

へず又敢て之を奬勵せず

と說きける時講師は今少しく烈しき語を用ひて政府の不法不理を重く述ぶべしと注意せしめしかば

生徒　我政府は止に之を保護勸勵せざるのみあやず諸君も已に知らるゝ如く我政府は今日一稅を課し明日又一稅を賦し重稅苛租をもつて却て之を害せんとし而して是れが增殖進步の路を閉塞せんとするに非ずや

講師　佳あり佳なり

生徒　諸君幸に予に與ふるに數分時を以てせよ而して精密の論點に說き及ぼすを得せしめよ

と倚沿々と政府ゲ施政の宜からざるより佛國農業の衰頽を來せる事を述へ痛く政府の行爲を駁しければ講師は大ひに能く其体よかおへるを稱し

講師　適なり斯の如くにてこそ十分なり他の諸君も今は必如何ある体裁も

で如何なる事を述ぶべきかと了解會得せられしあるべし諸貴嬢等も亦同

じく解し玉ひしならめ然れば明日午前の課業の時は女生徒の中にて議員

又は郡長の農談會に於ける演說を爲さしむべし各其用意して出席あるべし其參考には牧畜新聞紙上に家畜及ひ其將來の形勢と題する一篇あり退場後能く之を熟讀して演說の材料となし玉へ

とて是にて課業終りしかば此日は映簾女も心を勵まして明日の課業の用意

教師の命に從て演說の草稿を作り刻苦して一日を送りしが其翌日は各生徒皆其草稿を差出したる後ち初年の生徒一同は教師に從ひ議院科の教場に至るに滿校の諸生徒皆各々教師に從て此に集り居たりしが映簾等の教師は自己の生徒に向ひ

政府黨の生徒は右傍に又在野反對黨に屬するの生徒は左邊に各々着席せよ

と命ずるにゞ偶り映簾は如何ある事にや少しも合點しがたければ彼の隣席ある少女を顧みて委細を問ひけるに

乙女和娥は未だ之をしる知り玉はずや當校の學科の中にて初年生も二年生も又三年生に至る迄一組の生徒を二大部に分かち一を政府黨の生徒一

を反對黨の生徒と呼べり各人朝野の兩黨中孰れに屬するも勝手なり妾は在野反對黨の一人なり然しながら狡猾に立廻りて兩黨の教課を受け或は反對黨に在り又時としては政府黨に入ることあり

映簾然らば當校の都合も知らざる故妾も先づ姉の所爲に倣ひ兩黨に往來すべし

乙女然り妾も其事を和女より勸むるなり誠に稽古の爲には至て都合よろしき仕方ありいざ妾と共よ來られよ恰かも今反對黨の教師の背後ある極左黨の席に着すべし

とて誘ふに從ひて映簾は少女と共に左の方の偏りたる席にゞ着しけり

乙女和女も見玉ふ如く此教場の有樣は實に一個の立法院に宛然たり始めより此教場は妾等をして議院の論議に熱せしむるために作れるが故に其構造に至るまて全く代議院の模型に依りて建築せしあり議長席あり演壇あり又內閣員の席あり議長は我傳習所長にして此人は嘗て眞正の議院にて議長たりし人なり

映籬然して彼方あるアノ内閣諸卿の席に着せる人々は如何なる方あるや

乙女そは均しく我校の生徒にして皆三年期の人々なり又内閣議長即ち首相の役に當る人は一人の教師あり和女知り玉はずや此校にては總て課業も實地應用に最も適する樣をあすの主旨にて實に此傳習所こそ縣令郡長を成育するの處たるのみあれば猶代議士諸省卿全權公使等を養成するの學校あり

映籬然らば彼の生徒の間よ混じて着席せる教師等は如何なる事を爲さるゝや

乙女教師は矢張生徒に教授するあり則ち討議を始むるの方法他の辨論を中止するの手段或は其中止せんとて嚣々たるに答ふるの法などを教ふるあり我等の教師は極左黨よりて他の言論を中止するに最も妙を得たる人あり頓て和女も之を見らるべし和女も定めて本校の教師たる人々い皆皆て代議士ありし人或は縣令たりし人々ある事をば知らるゝあらん

と云ふ折しも議長は鐘を鳴せしかば少女も急に口を箝ぐめ映籬に目注して

知らすれば扨い議事の始りしかと彼方を屹と見てあれば其時議長い口を開き

諸君今日此に議すべきの事い我尊むべき議員ある丕扶怡萬武羅氏より提出せられたる内務に關する質疑の件の討議を引續くべきあり發言權い約爾斯の丕扶怡萬武羅氏に在り

と述ぶれば少女は映籬よ向ひ

本校の習慣にて各自本籍の縣名を稱して其名を呼ぶが定めなり然れば妾も沙奴の頤妙朱ところ呼ばるゝありと云ふ折しも一人の少年左部の列を離れ腋に浩瀚の書類を挾みて演壇の上に登り

少年諸君と云て(甘水を呑み)諸君予は前回の議席に於て十分に政府が不正不良の施政を詳述し且諸方より耳朶に達せる苦情を委細に諸君と共に調査するを得ざりしなり故に予は本日倘政府の諸官吏が彼の議員撰擧の時期に當て不正不法の奸策を施し全國到る處撰擧會中十に六七は權謀を用ひて撰擧人等を籠絡瞞着せる事實を述べんと欲す

と演じ終れば右黨同音に拍い疾く拜聽したしと呼ばはれば中央の二三議員い

是君等の爲に瞞着せられしなり

とぞ叫びける此時一人の左部の敎師此饒舌者を默せしめよと呼ばはりければ

武羅君們い喇弄して以て我々言論を妨げんとす何ぞ斯の如く卑屈あるぞ

予い決して此の囂々の聲の爲に默して壇を下るが如きの男子にわらざるあり予は君等の無禮の詞を聞き尙彌々進んで精密に政府が不正の行爲に關して我正々堂々を主とする佛國西國の輿論民心は果して如何に憤激せるやを述べんと欲するあり

茲に於て壇を退け發言權を中止せよ

と中央及ひ右部の人々呼はれば左部も負けずに

否々決して之を聞くあり武羅を妨げんとする者は是政府と同穴の狐狸なり

と兩黨より互に相罵りて議場騷然たれば議長は遂に鐘を鳴し聲を揚げて議場の靜肅を命ぜざるべからざるに至れり左右兩黨各自勝手の言を吐き其有樣は宛然眞正ある議院に列するが如し頓て議長は尙本日議事に付すべき事項を再述して猥りに他の辨述を妨ぐるあからしめしをもて武羅氏い漸く其語を續ぐを得たり

武羅 諸君は果して我が逐一醜惡を揭げ來て論辨せんとを望むべし予は請ふ之を枚擧せん予は今殊更に縣令其他行政官の任免黜陟に關する政府が不正偏頗の行爲を述ぶるを要すると雖ども然れとも予は是より此の偏頗に依て職に就きし縣令等が行爲を述べて以て彼等が撰擧會を瞞着し我完美ある普通撰擧をして其眞結果なからしむるに至れる最も最も恐るべく最も憎むへきの事實を告げん予は先づ紗朱惠勢耳縣より初めんゐ撰擧會の期に迫りて政府は縣令を免し之に代て縣令たらしむるに一の婦人をもつてせり此婦人は果して何者ぞ其容貌の艶美を以て名を全州に知られ能く一言一語もて世人の心を屈服せしむるに足る一種奇妙の能力を天より稟け

其已に加斯耳、巴若約郡長たるの日より民間に種々の苦情を起せる一婦人あり而して其職に着くや第一着に爲せしい如何ある事ありしや諸君は果して之を知るか彼婦人い數日の間戸長書記其他屬官等を招き非常の盛宴を張て之を饗せるの事實は當時の新聞紙上に詳かにして予は紗朱、惠勢耳縣廳の會計報告書に之を閲するに饗應費二十五萬法及び葡萄酒代壹萬五千法と記せるを見たり亦決して少許の費用ありと云ふべからず

唯是のみに止らず此女縣令は猶此饗宴を滿足なりとせず更に夜會を開き舞踏を催し政府が常に我黨の人たるや否やを知る能はざる縣會議員及び戸長等を招きて歡樂を盡せり是れ則ち滿蒙の手段に非ざるを得んや諸君よ此をしも猶忍ぶべくんば又何事か忍ふべからざらん而して此縣令は地方に於て勢力ある撰擧人等を籠絡するに其天成の美貌戯謔の所爲とを以てし且獨り此等戸長議員等を籠絡するに止らず尙加ふるに縣内の女黨を籠絡煽動して政府に反對せる議員の候補者と拮抗せしめ遂に女黨より候補を出さしめて縣内の各戸夫婦の間尙不和を生ぜしめたるに非ずや諸君

若し尙是等の事實を疑はゞ予は是より此不幸なる紗朱、惠勢耳縣内に於て撰擧期の間に生ぜる夫婦別居の請求の數を詳記せるいと長き帳簿を朗讀せん

此時止よ〳〵と叫べり

而して政府は其黨の候補者をして撰擧會に勝利を得せしむるか爲に實に万計億謀を施して又餘す所あし或數縣に在ては政府は激進黨と連絡し政治自ら男子をもて成立せるよりも拘らず女子激進黨を挑撥して男黨を壓せんとするの甚しきに至れり

と說き來れば五七の女生徒口を揃へ

政府の行爲最も理に合せり是男子中の鈍々たる者漸く婦女子の奴隷視すべきにあらざるを知るものあり

と呼はれば反對黨の敎師は高聲にて

諸君些々たる少數の若輩を消滅せしむべし

と叫びけり

武羅吁政府は那の天性天理に背戻して男子の上に立ち長上權を專有せんとを公言するを憚からざる急進過激の女黨と連結せり然り今日我上を統治する政府の人々は將に我社會の基礎を轉覆破壞せんとする婦女子と連結せり而して某々の數縣に在りては男子の官吏を免じて激進女黨員をも

て之に代るに至れり殊に紗蘭土縣の如きは突然故なくして玖耳武の戸長を免じ之に代ふるに他に適當の人も多からんに其妻を以てするに至れり

と憑河の辯舌滔々と說き去て女權左黨及び右黨の器々たるをも意とせず猶三十分許も自說を述べ痛く政府を攻擊して餘す所あく演じ終りて拍手大喝采の聲と共に演壇を下れば議長は發言權を內務卿にぞ與へたり亦も此內務卿たるものゝ初年生中にて嶄然頭角を顯せる一少年にして其才名世に知られ已に眞正なる內務卿より頓て少書記官に撰拔すべき旨の內意ありと聞さへ聞こえけり少年は水を盛り砂糖を混じあがら

諸君よ我は敢て冗長の演說に諸君を倦ましむるを欲せず故に予ゝ諸君が能く我演ずる所を聞くを許さるゝの喜びに感じ勉めて簡單に述べんと欲

するあり

と云へば極左黨の敎師ゝ生徒に敎へて喝采せしむ

內務卿 今予に先つて有名の辨士が雄辨を振つて毫も顧慮する所なく鐵面皮にも實事らしく自家の揑造に係るの事と纔に疑似の痕跡とを見て牽强附會の臆想を逞ふして諸君をして憤怒忌嫌せしむるの事項を舌に任せて陳述せられたる其事實と理論とを併せて之を一擊の下に破碎するは予に於て決して難きを覺えざるあり然り且予は彼の議員の攻擊非難の毫も諸君の心を呼び起すに足るの價値あきを信じ之を默々に付して心に之を笑ひ又大人氣おく之を爭ふの必用ならざるを思へり然れども亦退ひて熟考するに四方の非難を受けて其理を論し人心を安じ我責任を尽すは亦是れ我輩內閣員の將に爲すべきの職務あるをもつて終に此壇に登り卿か述ぶる所なき能はざるに至れり

此に於て內務卿は僅か十五分時間計りに演べ終て壇を下れば議長は

諸君今日の議案に係りて諸君の意見を問はんと欲せば各自皆我議院が執

るべきの説を記されよ頓て書記をして巡回して受取らしめ其秀を拔て以て議事に付すべし

と云ひければ滿場忽ち肅然として數分時間は聲を發する者なく諸生徒皆頭を垂れて各思考し終りて筆を執り數行の意見を書すれば書記は机の間を巡廻して之を受取けり沙奴の類西妙朱女い沙奴の映簾香露風の爲に二三の有益なる注意をなして云ひけるい

和女は猶斯る事には慣れざれば如何なすべきや知らざるべし頓て能く其都合も飲込玉はんなれども先夫れ迄は簡單に普通の事を記し置くこそよけれ若し和女の意見に採るべき所ありて他に秀つるときい之を論議に附するをもて和女は演壇に登らざるべからず

映簾否演壇にと驚けば

類西然り是れ他くまて和女の説を述べて他を駁するが爲にて實に有益必用の科なり妾は成たけ理屈ばかりて認むべし妾は且男子左黨に激切なる駁論を加へて徹頭徹尾内閣の所置を贊成せん

とて稿を起し僅か五分間にして書き終れり其文に云ふ

我議院は内閣が某々の數縣に於て天稟の有す可き女黨の權利を全奪せずして其幾部を分與せるの最も天理眞道に合するを察して之を贊成し且政府は漸次女黨の主張する女權恢復の請求を容るゝ汲々たるべきを察して更に政府に同意を表す

類西映簾に向ひ是にて我説は明瞭確乎たり

映簾少しく劇烈に過るにあらずや

類西和女は實に不活潑なり恐く自由婦女たるに適せざるが如し妾は激進も最も激進にして乃ち純粋過激黨の一人あり和女は知らずや目下女子の急務は男子を凌きて長上權を得るにあり想ふに女子の幸福は擧て此一事にあり

と答へしが果して類西の提出したる意見は撰拔せられて第三回の討議に附せられたり既にして其順番に到りしかば沙奴の類西は左部の列に離れて徐ろに演壇の上に登り咳一咳して

諸子女諸君……我女黨は今内閣の處政を贊成して此く稱美するも猶未だ政府の所置と云へば百事皆贊成すべしと云ふにあらず唯夫れ古來の迷夢を破り積年の弊害を一洗し女子をして從來の不法なる壓抑を免れしめ政事上の權利を增進するの好結果を得せしむるの一事を贊成稱美するのみ我内閣の至賢至明ある彼の自由考案と共に女子の最高なる官職に當るの實力あるを察知せり今日は女子と雖ども既に撰擧被撰擧の權を有せり唯未だ我女黨が多少の權利自由を恢復せしより以來諸氏の内閣尙引續きて頑迷にも道理もなく事故もなく今日に至まて顯要の職に就を得せしめざるが故に女子は國家に盡さんと欲するも未だ十分の能力を使用すべきの地位を得す只僅に區々たる小吏たるを甘んぜざるべからざるの不幸に沈淪せり然に我賢明なる内閣は斷然公に此不法不正の習慣を破棄して第一着手に於て紗朱、惠、勢耳の女縣令及び於和孺、武周住羅奴の両女縣令其他十二の女郡長と數多の女戸長とを撰任して以て我政府は彌よ自由平等の大理原則を鞏固安全あらしめり嗚呼、彼の紗朱、惠、勢耳女縣令に向て某氏の加

へたる種々の非難の如きは一として確乎たる事實の證跡あるにあらず要するに架空模糊の妄言たるゐ過ぎざるなり彼の男縣令のみ獨り飲食し或は他を招待して饗應するの權利ありとするか又男縣令のみ獨り其平生の辭苦を慰むるが爲に踊舞を催すの權利ありとするか女子の縣令は何が故に此權利なしとするか論じて茲に至れば實に彼の種々の非難は其根據あきのみあらず實に兒戲に似たる笑止の事ゐ堪へさるゐり我立法院は宜しく之を精査すべし決して默止す可からさるなり

と嬌舌喃々流るが如く演し了り沙奴類西壇を下りて意氣揚々と我席に復するとき後部の壇上より婦人の聲にて

我愛兒よ能も述べたり出來したり

と賞するものあるゐぞ映蘆い頭を回らして顧れば後部の壇上にい數行に居並て數多の中年以上の婦人等議事を傍聽しかゞら手仕事を爲す樣子あるに

ぞ世事に疎き映蘆は又もや怪しみて類西に問ひければ點頭きて

此い皆女生徒の母親あり男子い獨り來れとも妾等如き女生徒い皆母親と

相伴ふて來るなり

と云へば映簾い然る事に侍るにやと猶も四方を見廻しつゝ又も向ふを指さして類西に打向ひ

邪方に居る人々い何人にておはすや

類西此い本校の生徒にて新聞科の教授中なり今諭事を傍聽して筆記錄を作るなり

とゞ教へける當時政府科の教師たるものは皆曾て有名の政治家にして且十中の八九は内閣ゐ立て諸省卿たりし經驗ある人々にして少年男女の生徒に國家を統御司治する大術の原則を講し反對黨の攻擊非難を他に轉じて其鋒を避るの方法を說き或い議院を制馭するの手段を教授しけり就中最とも有名なる教師は是まて内閣に入りしと十一回にして終に少男子女の教育の爲に自ら職を辞して此校ゑ入り當時屈指の雄辨家ゐり此人は此政治傳習所の教課の外に尙或代議士等の爲に一回の謝禮壹千法宛にて講義をゐし其餘暇に猶種々の著述を爲し其政治術の著の如きい最も世に用ひられれて傳習所

の教課書たるのみならず又現に政治社會に執掌せる人々さへ必ず一本を携ふるの有樣にて且其著術に係る政治家必携の如きも國内之を有せさる者少あく代議士要務と稱する冊子も前數者に劣らず大に世の好評を得たり又反對科の教師も均しく立法代議士院中の錚々たる人々にて多くは皆政府に抗して屈せさる敏智の生徒を養生せんとて自ら此の校に入て教育に從事せり固より自ら是等の議論に慣れたる人々なれバ詳細綿密に政府を非難駁擊するの方法内閣に反する政社政會を盛んにして内閣を苦め又人心を鼓舞激昂せしめ且質疑難問等ゑ政府を困らせ次第に内閣の勢力を殺ぎ終に進退維れ谷まるに至らしめ機熟するを見て忽ち之を轉覆するの手段等を教授せり政府此校を立て教則を定むるも毫も偏頗心あく總て政府黨保守黨の生徒を養成するに止まらずして尙後年政府に反して盛んに爭論駁難すべき反對黨の生徒をも教育せしめ曾て之に干渉を加へず是蓋し年來の經驗及び一定の年限に於て必ず轉覆せられさる可らさるの憲法なるよりして猶更偏頗心を來さゝるべし若し此事をして前世紀の我等が祖先をして知らしめば必ずや驚

駭して此廣大無邊の大理を了解する能はざるべし其一定の年限に於て必ず政府の轉覆せられざる可らざるは猶革命の條に於て仔細に之を記すべきなり而して傳習所教課書の最たる者は政學類典と名づくる書にて書中には苟も政學に關する事項は網羅し盡して詳細に之を論述講義し平凡の人といへども之を解し得べく且少しく心を込めて此一部を讀ときは是のみにても可なりの郡長たるべきかを備ふるに至るへく又或は縣會議員國會議員となるも敢て難きにあらざる程の良書なり此書を根本として其次に列すべき書は反對黨文法書政府黨文法書說明員必携官吏必讀急進反對黨講義錄等其他一々枚擧に遑あらす

第八回

才不レ適レ學 嫌ニ論難一
業異レ所レ好 去ニ政海一

却說映簾女い類西女の訓ゑ從ひ兩黨即ち政府科反對科の兩科を講習したれども固より深く學問を好まず又實務に志しあるにもあらず唯伯父の進めに是非なく入校せし程なれば此等の書を見るも倦怠を生じ困難するのみ務め

て勉強いするものゝ未た政學の佳境に入らず歎息のみして其日々々を送りけり之に反して隣席なる彼沙奴の類西妙朱は或い政府科或い反對科の教師の講義を聞き心を籠めて勉強するか故に常ゑ彼議院科の練習の時には必す討議の中に交りて名論を吐き稱譽を得て必す各週の末には賞詞を得て其家ゑ皈れども映簾は毎週その手帳に惡評のみを得て皈るか故に寶勝夫婦も實に困り果て特に寶勝は今の如き有樣にてい後見の任を解くの日も實に幾年の後なるや知るべからずと歎息するの外いなし又夫人も其心こそ異あれ歎息するは同一にて斯てい迚も後日女權黨の名婦とならしめんとの望みも早や遠し難しとて大ひに落膽したりけり然れとも夫人は如何にもして映簾を政治に長せしめんとの心猶止み難ければ屢々政治傳習所長の居宅を訪ひて懇に映簾女の事を委囑し且其學力の有樣なとを尋るに一度として悅ひて家に皈りしとなく必ず顏色怏々たるは全く映簾の學問毫も進歩せさるが故ありけり少女い只纔に代議士と郡長とは其職務の異あるを知るのみゑて議院科の練習の如きは深く心にも留めす或は自ら意見を認むるの時に當て政府

と反對黨とを混淆し自ら政府黨中に在て却て政府を攻擊し或は身反對黨に屬するの日に在て愚かにも政府黨の說を頻りに贊成して自黨を非難するなどの事多く又彼練習の時に當ては未た一回も壇上に登りて一言たも吐きしことなければ彼代言人たりし時思はすも露比爾事件にて名を揚げし如き僥倖も其身に至るの機會あかりけり已に三ケ月を經ると雖も絕て自ら質疑を起し說明を乞ひし事さへあく其甚たしきは其日々々の議事に關して意見を述る時い日々同樣の文面にて唯我立法院い內閣の所置を贊成す或は贊成せすと記すのみにて毫も其甲斐なけれい寶騰夫人を見る每に有名なる校長い歎息あし

夫人は斯迄に心を碎き給へども映簾孃は迚も成業の望あらさるべし予試に諸敎師の意見を問ふに皆口を揃へて少女の何事にも應用の力少く甚た滯鈍なる旨を答ふ予い敢て飾らす聞が儘に夫人に告るなり若し幸にして万一に成業したらんにも女郡長となるを以て大ひなる僥倖とすべし想ふにそれすらも常に事務小き穩便の郡長にあらでは勤まるまし

と語りけるにぞ寶騰夫人は返す辭もなく悄々として皈りける有徒而傳習所にては議院練習科の間よ新聞科の練習ありて此科にても尙政府反對の兩部に分ち其敎師たる人々は現に巴里府中にて有名ある諸新聞記者を撰扱して之に充てたるが故に或は實に唾氣を催す如き面白からざる講義も多けれども生徒等は皆之にも倦まず只管に肝要の事と思ひて神妙に之を聽聞せり議論の科の如きは實に其中にも最も倦退を生じ易く敎師は憲法第百四十五條第四款の解を長々しく講述し又は行政立法兩權の權限及び其他面白からざる件に付實に非常に長き講義をあし又每週必ず全校の生徒を集めて一箇の所置更に政府より出でたることゝ仮定して之を問題となし一半の生徒をして飽までも之を辨明せしめ又一半の生徒をして之を駁擊せしめ各敎師等之を統ぶることゝなせり又其翌週には攻守朝野の位置を變じ前週にて政府の所置を贊成辨明せし者此度は之を駁論し而して嘗て駁論せし者は今回に於て之を贊成主張し此の如くにして大ひに筆鋒を磨き議論に慣れしむるが故に新聞科を終りて此校を出る時は少年等兩黨何れの新聞に入るも固より兩

者熟したれば大ひに便利を覺ゆるのみあらず時と場合に因ては政府黨を離れて反對黨に就き朝には在野黨を贊成して夕に保守黨を左袒し臨機應變に其說を變換するにも實ふ最も都合宜しとぞ而して政府黨の敎師は嚴正確乎を主とし反對黨科の敎師は慷慨活潑を要とす殊更に駁擊科の如き人心を鼓動し政府の內閣員に向ては筆を極めて之を非難排擊するにあれば一層慷慨激切を要すと雖とも映簾は兎角温柔無氣の語を併ふるをもて常に敎師の叱責に遭ふとも亦奈何とも爲し難く固より天性に因るとは云へ毫も進步熟達の樣子あければ己れも日夜に心を苦しめが兎角する間に試驗の期日ぞ近づきけり然るからに映簾は如何にもして兎や角試驗に及第せんとて頻に勉强し心は矢竹にはやれとも固より好まぬ學問ゆへ忽ちに倦怠を生して一日々々と送りて早くも試驗前の週とありしか此週は地方代議士の辨舌練習の科ありて農產物地質肥料農家の風俗習慣其他家畜等に關する諸般の專用語の概畧大意を知る爲に先つ諸書を繙閱せざる可らす且其他蔬菜類の大別種類等の大要をも調べざる可らず此等の事果ての後ち演說の草稿あども作らざ

る可らず然れば容易ある事にはあらす又筆記試驗の問題は全生徒其學期の如何に論なく一般に精細完備の地方議員に適用せる汎般の演說原稿を起させける其問題掲ぐれは

一撰擧會開の演說
一有力なる撰擧人の愛嬢か結婚の筵に臨んで賀する演說
一農談會に於ての演說
一消防兵選應の演說
一紀念碑建築に臨て爲す演說
一樓上より街頭の衆民に對して爲すべき演說

右演題の外尙緊要のもの二三題を與へたり此等の演說草稿を作りて出せる時は目下政治社會に知られたる代議士內閣員其他の政治家をもて組織せる判定掛の人々之を閲覽する手筈なれば映簾は進退維れ谷まれども亦奈何ともすべき樣なく斯くてあるへきにあらざるのみか万一に僥倖なしとも云ひ難く試驗を首尾能く終りて高点を得る時は政府科あれは外務又は內務或い

地方の官吏に採用せられ若し又反對黨あれゝ國内の撰擧人等互ゝ之を爭ふて我黨の代議士たらしめんと待懸る程なれゞ兎にも角にも試驗を全ふする時ゝ立身の階梯を得べきことにて映濃も一時は試驗を受るの氣力なき迄に弱りはてしが逃れ難き事と云ひ且沙奴類西が種々に勵ましけれゞ遂に其用意に懸りて數部の帳簿を取り一部毎に一箇の演題を筆太に記して同時に數通の草稿にぞ着手したり

第一撰擧會開の演説

我同胞兄弟姉妹諸君嗚呼、今日ゝ是れ如何なる日ぞや諸君が權理を保護し且是を防禦するに熱せる數十年の間猶且一日の如く百般の進歩と改良を按ずるに汲々たるは實に河水の混々たるに均し斯の如くにして今日此會を開き万國未た曾て行ひし事なき眞正なる普通撰擧の大法を我佛蘭西が卒先して擧行するの快樂に至る妾等議員たるの身に取ては殊に其感情の如何あるべきや諸君は必ずや察知せらるゝならん撰擧權を有する我同胞兄弟姉妹等が代議士たる……

第貳有力なる撰擧人の愛孃が結婚の筵に臨んで賀する演説

夫人幷に縉紳諸君代議士の近親なる族戚ゝ郡内撰擧權を有する尊むべき此紳士と愛すべきの此貴夫人となり其れ然り此故に今日此我一族の祝筵に連りて共に歡を盡す又眞に親族同胞の感を起すこと更に切なるを知るべし

孃や孃や孃ゝ又純粹なる獨立自主の女子とあり我愛すべき鄕里の一撰擧人たらんとす貴家累世の先例に徵するも孃か必ず英邁の志氣を以て進取の途を開き我幸福を增進し我憲法を改良するに汲々たるべきを信ずるなり妾ゝ之を賀せんとす孃の所天……

第三農談會に於ての演説

會員諸君妾ゝ一に農業の學理を知りて其他を知らず是所謂机上の農業者なり今實驗農業家たる諸君の健康を祝する爲に此杯を傾け且眞正なる牧畜家及其牧畜の爲に祝杯を擧げんとす

農業牧畜ゝ實に……

第四消防兵整應之演說

我親愛ある各官兵士諸君我も又是消防兵の一人なり我い立法事務の爲に身自ら諸君と共に我市内に火を失るに方て現場に走り到るを得す警鐘天に響くの時に當て工手諸君と先を爭ふて共に消防に力を致す能はすといへとも然れとも又我寄附あしたる新式の喞筒は必す予か爲に現場ゑ臨んて力を竭し我か代理するを信するなり

我は世に貴重ある消防兵の……

第五紀念碑建築に臨で爲す演說

貴夫人幷に縉紳諸君我輩が今日我鄕里に降誕したる大政治家の爲に紀念碑を建築して之か祭典を營むの席に連り聊か蕪辭を述ふるを得て實に歡喜雀躍に堪へさるあり予が先進なる此大政治家は三十五年の久しきに及べとも猶一日の如く終始能く立法院に我鄕里を代表して吾人の幸福を增進し吾人の思想をして貫徹せしめたり諸君は氏か曾て千九百某年の終りに當りて七日間の工部卿となり後幾回か内閣員たらんと力めたる事を記

せらるべし……

第六樓上より街頭の衆民に對して爲すべき演說

我同胞兄弟姉妹諸君將に開票せんとするに臨み一言せさる可らさる者あり予は彼の予に抗して飽まで相競んとする諸氏が予の身上に向て罵詈誹謗を極むるも予は一々答ふるの大人氣なきを思ひ唯默して而して心に其卑劣を哂ふの外なからんとす彼等は如何に奸謀を逞ふするも豈予と投票點を爭ふを得んや予は過去と現在と將來とを問はず輙頭輙尾自ら改進黨員を以て任し社會に慚づるあきを信す……

斯の如く凡て發端數語い配し得たりしかども腦裡思想已ゑ盡きて又一句の書き得べきに非されべ映簾も一生の思想を腦中に探り入れども更に一語も浮ばず志勢倫涅茂庭淳周衛累宗彌羅乏顏坊太等の各演說書を幾回となく繰返し打返して讀と雖とも一の新案も出でされべ如何ともする能はす此上は只此冒頭の後に直ちに結論を簡端に一二行つゝ附加へて演說を終るの外なかりけり既にして

此稿を教師の目前に出す日の前夜となり圖らず想ひ出せる事こそあり想ふに此等の演説は文章をもて綴ることあたはざれば此上は神の聖語を以て奇異の演説文を作りせば可ならんかと風と考へ付きたれば少しの思慮も取らず第四の消防饗應の題を一遍の詩体に改めたり

綾なき闇みの烏羽玉の　夜半に聞ゆる響がねの
樂しきゆめを破りつゝ　人うちつどふ市なかを
列もみださず潔ぎよく　火消し器械を先に立て
勢ほひ込んで馳て行く　消防つはもの勇ましく
、、、、、、、、、、、　、、、、、、、、、、

と異様の演説文を綴り神德の稱歌に似たる筆力文勢もなき新奇のものに韻を合せて百五六十句も書き弁べて漸く之を終りしも已に他を改むる暇なければ他の諸演説文は其儘にて差出せしが已に試驗も始れども生徒の員數五百有餘名もあれば教師及び彼の判定者等は一人々々に各試問するものから尚八日間を費せり

試驗場は彼の議院科の教場にて判定者たる人々は彼内閣員の席及び議長席に着坐し生徒は各自の定席に列し其母親等は總て平日の如く後部の壇上にぞ着坐しける當日生徒の父母等多くは美服を着飾り我子の試驗如何ならんと憂ふる心は自ら顔に形はれて今や遲しと待にける然れば其子弟にして高點を得て預じめ約束ある公使附の官に就んか又は我娘の首尾克く問ひに答へて學位を得ば兼て望める如く彌郡長に任ぜらるゝを得べきや子を思ふ親の慾目ハ誰一人とて我子の拙きを思ふ者ハなかるべし如右而左方の壇上には本校よ出でたる社會に身をも重ぜらる全權公使代議士内閣員縣知事等の人々の爲めに別席を設けたり然れバ生徒か教師の試問に應して十分の問ひを發したる時に最も盛なる賞詞贊美を送るは皆此壇上より出るも亦必竟は各自若學せし經驗あり且は同校に教育を受けたる故なるべしとは問はずして知るべし之に反して生徒の父母等の席よりは兎角に我子を愛し敢て他人の子を憎むと云ふにはあらねども嫉妬猜忌の心より唯さへ姦しき婦人等なればバ聞苦しき苦情など云ひ出すものあり或は云ふ今の生徒は何も知れるに

あらず全く教師等が偏頗の心にて獨り彼を愛すればこそ斯くは能く答への出來るならん後日に至りその學力のあるやおきやは自から知らるゝなり彼の生徒にして能く代議士の任に堪ゆる事とせば我家の小僧も亦代議士たるに餘りありと甲か云へば乙も亦夫以萬娥は此度こそ必ず縣令とならるゝならん彼少女は教師其他のお氣に入りと云へば丙も亦た阿奈杜度沙智仁も某氏の保護あれば都合も百事宜かるべし彼の判定者ゝ某が叔父にして或省の卿たり杯と噂とりゞ喧しくぞ聞えける

賓騰夫人もまた判定者中には懇親の人も少なからねば前以て映簾の事をも托し置くべしとて夙に此席に來る筈なりしか間の悪しき折りも折とて今日は女權党の委員會ありて是非とも出席せざる可らざる必用の事件起りしかば未た來らざるうち已に映簾が第三百五十八番とありければ怎生とばかりに試問の席に就かんとする折り誰やらん判定官の中に今日の試驗ゝ何れも缺點あし之を要するに學校の生徒皆非常に進歩せり斯の如くんば頓て壯年の男女にして有名の縣令雄辯の代議士無類の内閣員を出すに至るべし實

に末頼母しきことありと傍らなる同僚に物語るを聞き映簾大よ氣力を得たりしか既にして判定官例により映簾に向ひ

娥ゝ政府科の生徒なれば我が問案に答ふへし

偖て現内閣ゝ新法草案を反對なる立法院に提出せしが内閣ゝ自党の勝算を得る十分の目的あるに際し政府党殊に内閣党の代議士等は可否孰れに投票すべきものあるや

映簾妾ゝ否に投票すへし

と答ふれゝ判定官ゝ大に驚ひて嗚呼娥ゝ未た議院政治の一班をも知り得さる者の如し此時に至らば議士たるの人ゝ全力を擧けて調査委員なる者を置き又是を大分し又猶小分して之を數多よ分ち各精密に調査せしむべき是れ必然あり如何とあれば到底全体の儘にて調査は行屆かざるを以てなり然らば現内閣か反對党の駁擊を蒙ること必す劇烈にして其地位實に危險あるの日に當り一刀兩斷の所置を爲さんとせば娥ゝ何とするか

映簾妾ゝ代議士の權利を以て直に質疑し政府が充分説明を要求せんと欲

するあり

判定官咄政府の説明を要するとや

と問ひ返へされて映簾心所き彼の隣席ある類西ゲ演説によりて金牌の賞與さべ得たるを思ひ出し何の思案もあらばこそ直ちに應じて

映簾否々汗い全く心得違いあり妾其時ハ直に内閣が憲法違犯の廉を以て告訴す可し

判定官咄内閣を告訴するとお然れども孃は内閣黨に非らすや

と判定官等も餘りの事に驚愕せりまた映簾も神氣殆ど打亂れて己が政府黨か反對黨なるやさへ恍惚として五里霧中に在り兩黨相淆じて思慮も遠慮も烏や霧やに口より出まかせに種々の答をなすをもて試驗掛の人々も其言ふ所の餘りに解し難く少しも理に合はされば可笑さも通り過き開きし口を閉ちもせて壓氣にとられて居たりけり良ありて彌よ首尾悪く出來損ひしかば黒丸を與へんとて其用意する折りしもあれ後ればせに入來れる賓勝夫人い斯るべしとは思はねハ判定者中の人々に頼まんものをと試驗官の背後の

口より入來るに前に述べたる始末あれハ今一足早かりせハ斯までにはあらざるべきに遺憾あることとしてけりと后悔すれども今更に臍を噛まんも及ひ難く忙然として唯嗟嘆して在りたりしが判定官い答案の編たるを彼れ此れと繰り返して居たりしが良在て映簾に尋ね聞書試驗の中に某代議士の演説を韻を踏んで詩体にしたるい孃が筆勢に似たり

問はれて映簾何やらん呟々云ひけれハ判定官い微笑て有韻の演説草稿い古來未た例あらず太た新旨構なり蓋し孃は文學の才あらん今より之を專修し玉へ或は成業の目的もあるべけれと此政治の事に至つては其初歩大意だも解せられざるが如し然れば某も決して孃が政治大學にあど入んとの念を起し玉はぬ樣にありたしと思ふなり何れの學校に赴き玉ふとも必ず今日の試驗の如く最劣點を得て四方より黒丸をこそ得玉はん斷然志を變じて他ゑ要むる所あるべし孃が爲めにも益するならんと諭しおがら黒丸を與ふれば映簾は悄々として少女心の生なきまでに弱り果て席に復しければ壇上の人々も皆其敎へ難きを歎じつゝ互に噪然語り合ふをさへ聞くものから太ど倘

身も世もわらぬ心地をすめり想像さへ氣毒なれ之を見る寶勝夫人は姪女の事よしあるからに他に對しても面目を失ひ遺憾やる方あらりしがいつまても斯てあるべきにあらざれば校長に面會して是迄厚く世話を受けしことを謝し今日の有樣にては到底政治の術を覺へて成業すべきの見込なければ退校せしむる旨を語りけるにぞ校長も氣の毒ながら承諾の意を述べしかば夫人は直ちに映簾を伴ひて飛空船に打乘りつ我家をさして皈りける

第九回　少女欲レ爲ニ翰林員一不レ要レ宿訪ニ歐各員一

猶ほ父のごとき伯父心今日の試驗は如何あらん成効好かれと心竊に祈りしが寶勝氏も映簾が進歩の鈍きは豫て知らぬにあらねども斯かるべしとは夢にだも思はねば夫人の話説に仔細の事を聞きて驚くこと大方ならず又もや三ケ月を無益に費したりと歎ずれば夫人も傍より言を繼ぎ映簾は迚も政治にて成業の見込なければ退校を屆けて伴ひ來れり唯文章の思想は少しく取るべき所あるが如し后來如何すべきやと話すを聽きて寶勝氏は點頭て成程

彼が作りし詩は少しく見るに足るが如し然らば今より文學を修めしめんと相談忽ち調ひけるさても寶勝氏夫婦い我所存を映簾に語るに少女は兎に角に毎日政治傳習所に趣きて面白からざるのみか解し難き講義などを聞くに比すれば幾何かましなるべしとて二つ返辭にて承諾あしければ寶勝氏も打喜び

然らば彌兒は以后文學の專門科を修むることに斷決すべしさて斯く事の極まりし上は一日も善は急ぐを最上とするなれば明朝より學士會院に向て同會員の候補たるべきむねを云ひ送るところ肝要あり

と云ふを聞き映簾は驚きたる顏色にて何と云ひ玉ひしや學士會院の候補の申込をなし置べしとかや如何にも然り苟も文學に志しその業に就く以上は十分心を籠めて修學すべきあれば直ちに此等の申込をなし置こそよかるべし

映簾妾は今日が今日までも少しも文學と云へることは……

寶勝エヽ何と……

映簾妾い曾て斯る事に心も付かざりし去りとては餘りに早きよ過るには
あらずや妾は是より文學に身を委ねんと心を決せしのみにて未だ少しも
學びしと云ふはあらず然るに今より會員候補の申込をなすは餘り早き
に過るにはあらざるべきか寶騰否々今より直ちに申込をなすは勿論一分
時だも速あるこそよけれ斯くするは今日の習慣なり兒一度文學の科を修
むる以上は早く此申込をあすところ益ありて毫も損するとなし如何にとあ
れば該院にて會員を撰むに當り其學才にて撰拔するあり或は申込の前後
新舊の順序よて撰び出すの規則あるをもつてなり
映簾然らは申込の前后によりて會員となることありや
寶騰然り實よ然り汝は未た之を知らざりしや佛蘭西學士會院の組織は千
九百二十五年一大改革を經たり其初め文化未だ開けず宛かも暗夜に均し
きの時よ當り佛蘭西國中にて僅に八十乃至百人の文學士あるに過ぎさり
し頃は該會員の數も四十人と限りしかども其后漸次に開明に進むに從ひ
文物盛んよ開けて文學士の數も舊に百倍して全國よ充滿せしより學士會

院も區域甚た狹しとの感を起し四十員との制限にては未だ充分あらざる
か故に或は十員を增し或は五員を加え又は別に婦人の員數を定めあどし
て次第に其數を增加せしも世人は猶未た滿足せず殊に新聞紙の如きは皆
頻に其擴張せざるべからざるを論し喋々として相唱和するに至りしをも
て遂に斷然大改革を擧行し從前の會館い悉く皆取り毀ちて更に規模宏壯
なる一大新館を建築して充分の餘裕を作り然して後ち行政官の布達よよ
りて更に學士會員の數を增し定員を四百人となし且會員採用の新法をも
定められたり是聊か世の望みに副へりとするも猶是にて滿足すへきには
あらず若し最初卽ち十九世紀の割合にする時い今日は文學士の數非常に
增加せしが故に定員を四千人にもなさゝる可らず然れば諸新聞い皆此說
を主張して更に大に計畫する所あらんとせしも實際に於て行はるべきに
あらされば政府は竟に定員四百人の外又准員二百人の制を定めたり
映簾妾は實に今日より會員候補の申込をなすへきにや
寶騰然り前にも云ひし如く今日文學に志す者の一般に爲すへき事あり汝

一度之を申込み置ときは、會院は常に汝の爲す所に注目して若し彌よ汝が他に傑出して會員たるの學識才力あるを見ば直ちに撰拔して會員たらしむべし好しや此撰拔に逢はざるも今より申込おくときは三十年乃至三十五年を經る間には必す申込の齎きに依て會員たるを得べし斯る譯なればとそ片時も早く申込をなしおくべしとこそ云へるあり明日は宜しく諸氏の許を訪ひ廻るべし

と此日は此話説を聽きしのみにて映簾も我部屋に退き何は兎もあれ政治傳習所に行ことを免れ嬉しさに堪ずして眠りに就きしかば夢の中には早くも學士會院に入りて學士の列に入りし樣をも見るなるべし其翌朝は賓騰氏早くも映簾を呼ひ起して急かしたて

速かに衣服を着けて直ちに訪問をなされよかし予は已に電話器よ訪問すべき會員の宿所等を尋ねおきたれば躊躇せずにいそがずや

と急き立られて映簾は禮服を着くるもそと〳〵に行裝も已に調ひけるが此日被撫、祀稔の兩女は各々其銀行にありて伯も早く已よ外出せられし后あれ

ば映簾は一人にて食事をなし了る時賓騰氏は尙不充分ある事ありしとて再ひ會院に問合をなして手に一冊子を携て入り來り映簾の前に差出して云ひけるは此は會員の宿所其他汝か訪問に必用あるものを記せるなりと

映簾然らば四百の會員を一々訪ひ廻るべしとのことにや

賓騰否々然する時は訪問を終る頃は其身も死するべし豈斯る愚お事をせよと云はんや只々部長を訪問するのみにて十分なり四十人毎に一人の部長あれは都合十人にて准員は計算に入るに及ばず此小冊子には其人の宿所姓名の外に尙其著述類の事までをも要記したれば談話の間には隨分意を注きて其人の著書の名を引用すべし

映簾妾は一人にて訪ひ廻るべきにや

と伯父の心を測りかねて恐々尋ねければ固より然りと答ふる時少女は小冊を披見して

映簾此は思ひの外に遠方なり蒲堂に住せる會員あり

賓騰巴里、摩度利、阿爛管車にて行ば僅か一時間の行程あり

映籠今一人の學士會員は頓景玖府に住せるあり

寅勝其迎も管車にて行かば僅に十五分間にて達すべし其他は總て巴里府内又は近傍ある於禮晏、昏珮育等なれば三日の内には十分廻り了るべし先づ葡堂府の會員より訪ひはじめよ

との差圖に從ひ當家の飛空船に打乘て巴里、摩度利、阿爛管車發着處に赴きけるに此處より一時毎に阿關に向て半急行の列車發し阿爛より頓武圓、空末志の管車及ひ仁安座、短賀荷湖の地方に通せる亞弗利加中央管車を連絡すると舊時の鉄道に異あらず今や文明愈進み全く舊樣を一變したれども隴を得て蜀を望むは亦人情の常にして世人は旅行の猶未だ十分速ならざるを歎して滿足せずとは云へ此管車の如きは實に近年の大發明中の最大最奇なる者と云ふべし

往時は摩度利府に到る迄幾何時間を費やせしや今日より既往を顧れは思ひ出し難き程なりしに今は通常列車にても管車なれば一時半にて達することを得べく又急行列船なれば僅かに一時を費さずして着すべし豈亦速なりと

云はざるべけんや今人か舊時の氣車を看て迂遠なりしと咽ふも亦故あることにこそ此南方管車停場は實に巴里府屈指の建築にして四方より來る管車は皆空中に架し渡せる巨大の圓管中を走せ來るか故よ一般の管車停場と勘しく此停場も亦空中に構造し鉄柱をもて之を支へ遥に紋斯利の岡上に幾へたり然れば空船にて來る乘客は直ちに管車に乘るを得べく又地上より來る者は電氣昇降器の常に自から上下するあれば直ちに是に乘りて容易に登り來るを得べきの裝置あり此日映籠は管車の切手を所持してありしが此切手あるときは何れの管車に乘るも差支なきこと亦彼の書信に郵便切手ありしか如し映籠の着せし時は恰かも列車の將に發せんとする折なりしかば直ちに乘込ことを得たりしとぞ抑も各列車は幾多の空圓筒を連ねしものにて各圓筒の間は往來を通じ置き昇降するよは最后の口よりし然して各圓筒には筆太に各々其停るべき地名を掲げ其地に到る時は裝置せる靈妙の器械の力により自から他の列車と分離して止まり少しも他車の進行を妨げ止むることなきは實に妙と云ふべし然るから映籠は浮耳土と記せる圓筒に入りけ

るが頓て列ねたる圓筒の鉄管の中に進むと覺しく少しく動きしを感ずる間もなく種々に混雜したる電氣空氣の兩氣を利用する機關忽ち運轉して矢を射るが如くに走れども席上に坐するに異ならず四十の圓筒形車に八百人の旅客を載せ一時間の速力は四百里にして且毫も圓筒中の人をして動搖を感せしめず此列車を引て走るの力こそ實に靈妙不思議と謂ふべし之を鐵道氣車よて旅行せし時代に比較するときは人智の進歩して彌よ巧妙の域に赴くこと眞に驚くばかりあり且管車中は曾て些少の危險もなく線路を外づるゝの憂ひは勿論兩筒の鐵管を通して往復には其線を異にするが故に絶えて衝突の憂もなし唯時として不都合あるは止まるべき地に止まらずして動もすれば行き過ぎる事あるのみあり此は如何なる理なるやと問へば器械の油切れて運轉の工合十分滑らざる時は其止まるべきの地にて圓筒他の連車より離れず或は又時として速力緩くて時間後れ次に發せる列車に逐付れ其行く所まで之に推されて行くことあり生憎にも映簾の乘りし時は器械手の少しく注意を怠りしより管の口を閉ぢて列車と機關車とを連絡する時に制規

の速力の十分一を失ひて其儘にて出發せしかば其進行遲くして淳耳土府の前儘かの處にて此列車より二十五分後に巴里を發せる急行列車の爲に逐ひ附かれて之に推し行かれける映簾は最后の圓筒内に在りしが故に此時少しく動搖を感じ我知らず傍らなる人に倒れ掛らんとして列坐せる一人の夫人は搏地と仆れける一男子側より

吁我乘車ゝ後車の爲めに逐ひ附られて押し行るゝと覺えたり西班牙の馨度利府迄は押し行かるべし聊か待遠を見ざる可からず唯契約の淳耳土會食に後るは遺憾の事あり

映簾なんと宣ふぞや馨度利府迄行かざれば止まらぬにや……

と大に愕ひて尋ねければ

合乘客さればあり此車ゝ後の急行列車に押し行られ居るものあれば止めんとするも能はざるあり我們ゝ一度馨度利府に着し十二時十五分同處發の管車に乘て淳耳土府まで飯へり來るの外に詮方あしさすれば淳耳土府に着するゝ午後一時廿分にあらざれば能はず然る時ゝ予ゝ是非ともに會

合せさる可らざる緊要ある會食に列あること能はず管車會社に向つて損害を請求せざるべからず

と語りければ今や詮方もなかりきと映簾も放念て列車の行くよ任せけり漸く一時半の后に摩度利の停車場に着しければ急行車の止まると均く映簾等の乘れる列車も其處に停りけれゝ停車場の器械手は直に管車を他の線に移して津耳土の方へ出發せしむる用意をぞなしたりける

既にして十二時二分にて尚出發迄は五十三分の猶豫あれば映簾女ゝ此間に摩度利府を一見せんとて此處よて小なる飛空船を傭ひ器械手に有名の場所を案内せよと命じけるにぞ是より少女は空船にて博物館王宮其他名勝の地を巡覽し猶杜禮度地方へ赴きて美由英度、涅耳能にて蜜柑を求むるとて地上に下りしが圖らずも此地ゝ來りて有名なる鬪牛を見ずして歸るも亦殘念あり時間にゝ尚十八分の餘裕あり器械手も亦少女に勸めて鬪牛場の上に案内せしに此日は恰も此地にて鬪牛をあせる折ありしかば地上より高きこと十八間の空中より俯して遙かに地上を望めば黑色の大牛の猛り狂ふて場内を

暴れ廻るを觀たりけり此時此牛は已に四匹の馬を倒したる后なれども尚少しも驕りたる色なく其勢の銳きとゝ觀者をして戰慄せしむる程なれば映簾も心に恐ろしく器械手を促がして急ぎ停車場に飯らんとするも中々に耳にも入れず一心不乱に鬪牛に見入りしか頓て一場の鬪ひ終りしかは漸くに少女の命に從ひ飛空船を走らせて停車場に飯り來りしは正よ十二時五十四分にて管車の涅耳土へ向け出發するに一分の間あるのみなれば周章て管車に乘込むやいなや列車は忽ちに出發せり扨も此管車に猶一箇の不充分と云べき欠典あり此れ他にあらず車は鉄管の中を走るか故に四方を望み見ることを能はず雅致ある野景明媚の山水の間を過るも之を觀賞するに由なきの一事即ち是あり然れば當時鉄管を改良して之を厚ふし透明ある硝子の圓管に改めんとの説頗に行はるれども此改良を行ふには巨大の費用を要するをもて會社も斷全此考案を實行する能はず然れば容易には此改良を見るの日に逢ふ事を得ざるべし斯る次第なれば映簾も名高き比禮寧の高嶺を觀ること能はざるを遺憾に思ひつゝ頓て涅耳土府に赴き見れば折あしく遠方尊ね來り

し會員ゝ本日巴里へ赴き日暮の頃にあらざれば帰宅せざるよしを聞しかば暫く市中を徘徊し其刻限に至りて再ひ訪ひ行きけるに已に帰りしとのことにて直ちに引見し太と叮嚀に來意抑問ひければ

映簾　本日高門を叩しゝ別義にも侍らず學士會院候補人名の中に妾が名を加へ給はらんことを願はんが爲なり猶亦百事よしなに高諭し玉はれかし

と云ひしまゝ偖ても此方ゝ詩人なるが开も又歴史家ありや將た雄辨家ありやと考ふれども生憎に管車の間遂より心靜ならざりしが故に伯父より得たる彼の小冊子を詳かゝ閲するの暇あらざりしかば復た言ふべきの事柄も無く拍子の抜けたる有樣ありしが此時學士會員ゝ傍らなる机の大なる抽斗より佛國西學士會員候補者登錄簿と筆太に記したる一帳簿を把り出たして遍ゝ候補者たらんと云ひ來りし扣簿あり今嬢が申し込を記入すべし貴嬢は是れ四万六千八百九十二番あり

映簾　唱四萬……然らば迎も……

主人否々決して心を勞し給ふなよ此番號は千九百二十五年よりの番號にて今は三万八千七百二十二番を最とも舊き申込とす來月の會には十四個の欠員あれば其内七人の會員を撰抜にて探り他の七人ゝ申込の尤も舊きものより擧るの評議あり然れば三万八千七百二十二番以下の人々は此度の會員となることを得らるべし故に貴嬢も決して失望し給ふなかれ三十年乃至三十五年の間には必ず會員となり給ふべし

映簾　何分よろしくお引立を願ふのみ誠よ種々の教示を蒙り謝するに餘りあり

主人　否決して玉詞を費すを要せず某も三十五年の后嬢か入會の演說をさるゝ時には必す一片の華詞を述べて答へ奉ちんと今より切望に堪へずと說き丁り猶種々の談話をなせし后映簾は已に候補に列せられしかば心勇みて管車に乘り込み巴里を指して帰りしが旅行の疲勞を慰めんとて其日は他に訪ひ行かず翌日ゝ寳騰氏の住居と同區内に住める會員ありしかば先つ其人を訪ゝんとせしゞ家を出る前に昨日困りしことを思ひ出し寳騰氏に尙

會員の身分其他の事をも尋ねければ

寶騰加彌耳、爾馱西氏は會院新聞記者の科にて通信員なり先つ知り置くべきは氏の著書ある其最も世に稱せらるゝ某街の殺戮と題せる冊にありその要を說ば土利蒲の災禍六百の死屍俄かゝ地中海管車の特發急行列車にて土利蒲に達せしは右の變より纔かに一時半の后にして四個の製作處は火煙天を焦して燒るにぞ其慘然たる景狀は思はず心膽をして寒からしむ云々其大畧は斯の如し

と听ひて映簾想ひけるは今回ゝ言ふ可き事をも知り得しかば心易しと心も勇みて飛艇を飛ばし僅かに三分時にて直ちに彼學士會員ある加彌耳、爾馱西氏の宅に到りて案内を乞ひ名刺を通ずるに家僕と思しきもの出來り

主人は已に出て去りて不在なり

と答ふるにぞ

映簾去らは何時頃には宅あるべきや

家僕皈りの時刻は預じめ知り難し纔かに十分計以前ゝ亞米利加の備惠稅

に向て發足せられたり

と聞き映簾は痛く失望の色を見はしけるにぞ家僕は氣の毒にや思ひけん

太西洋乘雲船の解纜ゝ午前第十一時あれは今より直ちに阿西寧耳の發船處に赴き給はゝ想ふに爾馱西氏ゝ而會せらるべし

映簾然らば是より跡を逐ひ去らん

とて船を急がしたて阿西寧耳の發船處に向て走りけるに地上百間餘りの空中に今にも發せんと艤裝せる三個の巨大なる大西洋の乘雲船浮び居り其近傍にて無數の小飛空船蝟の如に集りて或ゝ族客を送り或ゝ荷物を運ぶ樣盛にして一際の奇觀あり今や會社の役員ゝ最后の檢閲を終りて用意全く整ひ荷物旅客を載せ終り次第に出發せんとぞ待りけたり映簾は近づき

亞米智共和國に向て發する空船は何れなりや

と問ふに一個の船夫出てゝ

稚贊稅號あり

と敎へしかば直ちにその船に乘り移らんとし之を看れば此稚贊稅號は大西

洋乗雲船會社の一等船中にても一二を爭ふ美麗壯宏の大船にして米耳武奴及び其他の近港へ向け貨物を運べんとて滿載せる奈太耳號と稅亞蒭稱袁、奴字耳幾稱の諸地方に向て航せんとする蘭庭耳號の中間に浮ひたれば映簾は其船に乗り移りて學士會員加彌耳、爾馱西氏に面したきよし船の役員に云ひ入れけるに今氏は荷物を点檢する最中あれば那方の室に在りいざ案内させまいらせんとて一人の船夫に命じて誘はしめける映簾は船夫に伴はれて上等室に至り即ち此室なりと教へられ徐々と歩を進めて客室の戸を開き慇懃に禮を盡して

卒爾の事ゐて侍れども妾い今……

と云ひあから首を擧げてかの語を繼がんとして打驚きつゝ其人を見るに身に潜水器を着けて異形の風をなし面体更に何人なるや知るべからず今其背部に附着したる留氣器より胡膜管もて連絡を通ずる折にてありしかば映簾は其果して學士會員あるやを知る能はざるものから

失禮ある事には侍れども今妾が訪ひまいらする君には眞に佛蘭西學士會

院の加彌耳爾馱西君にておはすにや

と尋ねけるに彼方は氣管の端より聲を泄らして

然り不敏なる某こそ加彌耳爾馱西あり

と答へけれい映簾は忙しく會釋なし

加彌耳君よ妾が今日拜顏を願ふは會員の候補たらんと欲してあり何卒妾が名を候補の名簿に登記ありたし妾は是より專ら文學を修めて貴會の末席を汚さんことをこそ希望の至りに侍るなり

加彌耳請ふ先つ此椅子に倚りて憩はれよ今直ちに拜語すべけれども失禮あがら暫時の間猶豫ありたし某い今荷物を点檢する時あり某旅行する時い短銃潜水器防火服等其他總て必用の品物を携帶するの習慣ゐて此度い百十二回目の革命に會せんとて美惠稅に赴むかんとて出發せり直に紐育までは海底管車にて赴きそれより地上管車にて美惠稅に赴くこそ普通の旅行あれども某は殊更に此乗雲船を取れり革命の期は來週と豫定したれば尚餘裕あるべき旨を大統領より報し來れり

映簾曾て君が通信を傳へ聞きて幾度か心膽の寒きを覺ゑしに再ひ驚き怖るべきの通信を拜聽するあるべし

加彌耳叉手尊名は

映簾映簾、香露風と呼び做せり

加彌耳文學は如何なる科に志し玉ふにや

映簾未だこれと學科を定めしにあらず

加彌耳貴嬢若し他に是と思ひ玉ふ學科あくんば先つ今日より新聞科を修むるを好しとす其他歴史詩歌小說の如きは已に陳腐に屬したりと云ふも不可なかるべしと思はる

映簾種々高諭を忝ふし謝するに餘り有り長途の旅行自愛せられよと云ひ了り辭し去らんとすれば

學士已に諸會員の家を訪はれしや

映簾未だし

加彌耳然らば今日午后より會館に大會あれば此に赴きなば會員皆集り居

り殊更に一々訪廻るの勞をも省き都合宜しからん

と告ぐるにぞ少女は厚く謝して別れ去りし時早く已に解纜の時刻と見えて頻りに鐘を鳴しければ親族等の旅人を送り來れるもの我先にと各々飛空船より飯るあど混雜宛然鼎の沸が如く映簾も漸くに船に乘り移りて少しく傍らに離れ空船の上より稚贄税號の解纜する樣ぞ眺めて居たりける兎角する間に稚贄税號の周圍に群がれる數百の小空船い皆四方に遠ざかれば郵便局の御用空船書狀を載來り是も均しく飯り去れば乘客一同甲板に出でゝ此方を望み其間鐘聲彌よ高ふして耳ありて其聲忽ち止むと均しく電笛一聲解纜を報ずるを合圖に巨大なる稚贄税號は少しく動くよと見える間に電氣の機力にて次第に高く空中に登れば船中の旅客見送の人々い互に聲を揚げて別れを告け白色の鼻拭を振り黑色の帽子を動かし別れを送りて囂々たる有樣は亦一段の好景色なり稚贄税號い遙かよ雲際よ登りて南の方に向ひ矢よりも早く走り去りければ暫時にして微々たる一小黑とありみるに蒼空の中よ入りて影だに見えずなりしかば群集い猶も奈太耳蘭庭耳両乘雲船の出發す

るを待て是を見んとて暫く留るものもあれども映籠は斯く何時迄も徒らに眺め居るべきの暇なく午後に開かるゝと云ふ學士會員の大會に連りて訪問の勞を省かんと思へば之より皈り去りて叔母に請ひ同伴を願いんと心も自と勇みたち疾く遣れかしと促がして後れやせんと急がし立て我家を指して飛び歸れり

第十回

（第十回　碩學大會翰林院　歴史博士演新說）

飛舸の速度を早めて歸り來る映籠は寶騰夫婦ゑ加彌耳と面會の事より本日學士院會に出席の指揮の事迄逐一物語りしかば兩人も大に嬉びさらば早速映籠召連れ出席せんと夫人自ら云ひ出てければ妾も一入の勇氣を得て直に飛船を飛ばし世にも名高き佛蘭西翰林院にぞ赴きしが苟も文學に志ある者は勿論文なき輩も大會の盛況ばかりも觀んものと距離の遠近を厭はず男女の別なく四方より先を爭ひ來りしかばさしもに廣き會院も人をもて埋めし如く錐立の地をも餘さゝるまでに充滿したれども尚幾千万の群衆郭外にて

苦情を鳴らし或は近隣の家屋を借り其處より演說を聞かんとする人々さへあれば會館の周圍に住める人々は思はぬ利を得るもあれども之さへ限りあるをもて遠方より傳聲器の力を借りて纔かゑ演說の聲のみを聞きし人已に牧擧し盡すべからず夥多しきなど云ふ計りなかりける

斯る混雜なれば館内に入る可くも見えざりしが寶騰家とは巴里府内は更なり世上膾炙たる富豪の夫人剩さへ政治社會にも寶騰夫人其人ある事を知られたれば紳士淑女に尊敬せらるゝとも輕からざれば名刺を通すれば恁る熱鬧を充滿したるにも拘らず直に案内者出迎へて映籠女諸共別席にぞ誘ひける時正に午後一時にて未だ開會には一時間の猶豫あるものから豫て知己の人々も側に着座したれば世上の噂抔彼是として在りしが既にしも二時の鐘響きて會員も已に大概は出席し殊に豫定の時刻ゑもありしことゆゑ學士會院長は壇上の席に着きければ滿場一時に拍手せしが漸くにして更に肅然たり而して衆眼頓に院長の方に集れば院長は一禮し了りて口を開き簡單なる演說にて茲に大會を開きし旨を告げ且本日は更に八名の

新會員を加入せしめ今日其加入式を擧行する旨をも告け新會員の姓名官行及び其學識學科著述等の大畧を報道して茲に學士會院が撰び扱きて會員たらしむる理由を演べ了り會釋して演壇をぞ下りける

看恁而會式も終りしかば皆思ひ〳〵の演說をなす中にも本日新に學士會員の列に加はるの名譽を得し八名の人々は或は詩人あり或は文人あり或は演說家あり或は稗史家ありて各々名譽を博せんとて今日ところ一世の晴の場なりと數十日前より考へ詰めたる得意の說をぞ述たりけれ。聽衆一同感じ入り流石は撰扱に學士會員となりし人々かなとぞ稱しあへり其後に壇に登りしものは從來の會員にして一人の史家ありけり今更茲に喋々し長辨を費さゝるが如く今を距ること僅かに十年以前我西曆一千九百四十年の頃に當て古今未曾有なる新派の史學を起したる大歷史家とぞ出たりける是れ實に稀世の大學士にして其名を布惠理志亞加尼耳とぞ呼ばれたり古今の諸書に渉獵して事の見ざる處を見古人の知らざる處を知り考究索搜せずと云ふことなく陰を顯き微を顯し從來歷史家が同一轍の誤謬に陷れるを正し其實あら

ざるの題を擧て之を駁し大に世人の注意を惹き起し數年一日の如く熱心固結して其學派を擴張するに汲々たるのみか今は已に其數年の勉强漸く眞果を結びて精密なる佛國史の新著將に成らんとするの時なれば此日も一場の演說をなすべき約あるをもて如何なる新奇の卓說をや述べ如何なる秀出の高論をや吐くやらんと會員は固より傍聽の人々は指を折りて此日の到るを待ちわびけるよぞ開會の初より氏の壇に登るを頸を延べて待ち居たりける中には遠隔の諸州より來れる者さへ夥しくありて氏が學派の世に用いらるゝの深きは亦以て知るに足るべきなり

既にして布惠理志亞氏出で來つて演壇に登るを見て拍手喝采せる聲は了得に堅固の館院も崩るばかり偖て其風采を見るに數年來學士會員たるの榮を得るも猶强壯にして齡は四十の上を一ばかりも越へたらんか身の長高ふして前傾廣く毛髮は已に殘り少なきまでに禿げ落ちたるは其刻苦精勵の程も推し測られて頗母しく天晴大學士の相貌あり已に壇上に登りて少しく頭を前に垂れ滿場の會員と其他の聽衆とに向ひて一禮し了りて携へ來れる一抱

計りの草稿其他を机上に置き且二人の從僕をして携へ來らしめたる著述書の類を傍らゑ山の如く積あげしめて後硝硴に水を盛り砂糖を和して之を攪ませ徐ろに飲終り漸ゐし眸度を擡へ

諸君淑女紳士

と演べ出んとすれは忽ち四邊拍手して喝采の聲は百雷の一時に震ふが如く暫時い鳴りも止まさりけり耳在て之を繼ぎ

諸君余は諸君が已に知れるが如く專ら佛蘭西歷史の編輯に着手し大に古史の妄誕を正し又世人の惑を解かんとす諸君は知るゐらん嚮に其初編の發刊せるあるを故に余は同史に讓て茲ゐ再び論駁する事を爲さゞるなり然りと雖ども一言の飲ぐ可からざる者あり諸君誰か耳目無らんや諸君試みに想へ現在吾人が生活の上に就て最も些細にして最も簡易なる一事物を考索せよ世上同一の事を記し同一の物を語るに果して異ゐる所無き乎口は以て口に傳へ耳は以て耳に傳へ延々流布して而して眞を傳へし乎果して事實ゑ違はざる乎諸君は皆銳敏ゐり世上の事物は細大となく之を傳

へ又筆にする者或は大にし或は小にして妄誕訛傳終に全く其眞を失ひ或は全く相反せるに至るを見聞すべし諸君現在の事すら猶且然るに非ずや況んや既往をや況んや吾人親しく見聞するを得ざるをや亦況んや歷史家自身も唯文筆に任せて記するをや然り而して此虛飾に虛飾を加へ訛傳に訛傳を添へ無根妄誕の事跡を記せる者を名けて之を歷史と呼ぶ其名何ぞ其實に過るの甚しきや是即ち無實に加ふるに無實を以てするに非ずや諸君想へ現在世人が目擊せる現在の事物も猶且然るに非すや矧んや無根虛飾の古史なるをや彼の歷史家ゐる者も亦身數百千歲の后ゑ生れて遠く太古の事を記し基く所は妄誕訛傳を以て編みたる口碑に依る者に過ぎざるなり要するゑ古來歷史家と云へる輩は唯古人の糟粕を舐て無根妄誕の事を裝飾して毫も事實を正し眞跡を發見するあるを見さるあり今や人智明達陰微を發き幽暝を探り得て高妙の域に進み古の史家は所謂假作者視して歷史家たるを以てせず而して又眞に通常一般の稗史と異ならざるゐり否徒に異ならざるのみならず陽には之を實跡と稱して一に奇

を貴び珍を重んじ或は鬼神を欺き人類絶倫の英雄豪傑或は聖君賢相名士烈女たる者を烏有無何の中に艶して之を裝ひ記するが故に少年子弟の未だ確立せざるの神心を惑乱して其方向を誤らしめ弊害も又大なりと謂ふべし何ぞ毒を流すの甚しき乎斯の如く然り然れば則ち妄誕架空なる古史に依て小説稗史家又は詩人等の想像家たる歴史家が得意の裝飾法を取らずして記事批評の確實法に則るの必要たるを知るなり

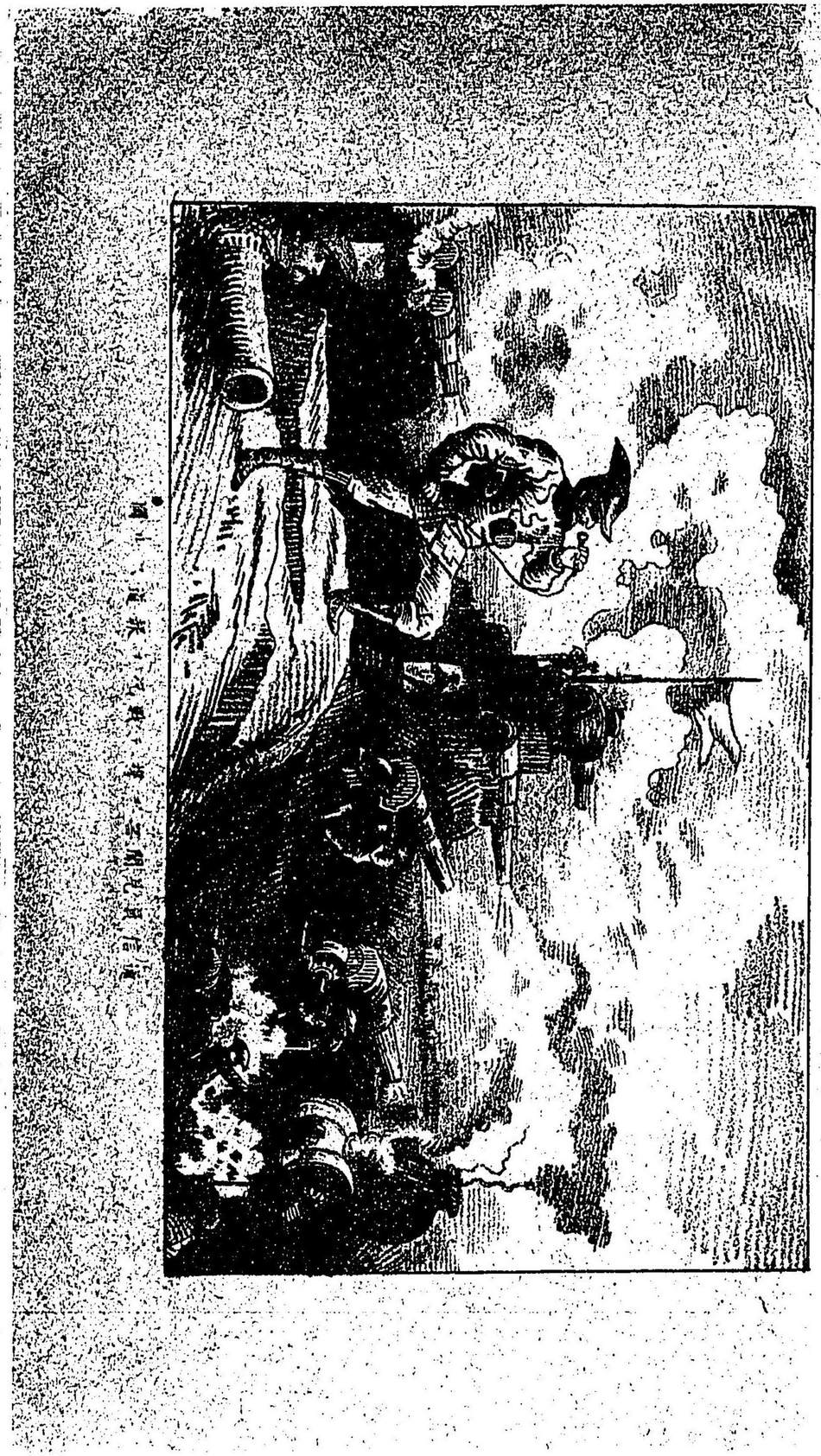
と雄辯滔々流るが如く駁し去るを聞き大呼一聲辯力を以て壓せんと爲るも何ぞ伏せんと叫べども加茂耳毫も撓む色なく冷笑しながら

君は舊派に泥む史家ならん果して然らば又何をか云はん大業にも君ハ六編の奈破翁傳を著せり故に予ハ奈破翁の例を以てせん君が著書中の奈破翁ハ果して何者ぞ奈破翁ハ實に斯の如く有爲の人たるにあらざるなり唯謹直にして篤實温厚の一官吏なり彼ゞ佛蘭西に宰相たるの日ハ一ゝ軍務を處理して巴里府民兵の総督たるに過ぎざるなり予ハ實に古の奈破翁ハ眞に史家の裝飾たるを知り得たり眞に奈破翁ハ性として乘馬を好めるを

以て軍服を着けて駿馬に跨る華美なる肖像を其細君に贈りたり然るに阿士流布智惠耳と云へる十九世紀の歴史家が辛苦の裡に歴山大王の傳を編纂せしが巴里の書肆皆その新奇あらずして已に陳腐ゝ屬せるが故に何れの人も之を出版する者あかりしが其后阿士流布智惠耳氏は圖らずも奈破翁ゞ乘馬の頟を見て其著書中歴山王の名を抹擦して之ゝ換ふるに奈破翁の名を以てし希臘亭武の攻城は忽ちにして尭倫の攻城となり勢露禰の役は馬乱傲の役に變じ遂には阿耳米の激戦ゝ換ふるに未だ曾て兵革を用ひたる事だにおき墺地利の僻邑墺地士耳理度の役なるものを想像し來り世を欺き又自らを欺き巴比魯の都は墺都宇威奈となり太利西王ハ墺帝となれり其他露玖佐奴后を奴利威西后とし歴山の諸勇將に換ふるに抹西奈佞弭由艮周耳等の人を故造せしかば敢て出版する者無かりしが僅か梓に登すを得たりしが圖らず此小説世に流行するの僥倖を得て今の奈破翁ある に至れり歴史の訛傳する所ハ概ね斯の如きに起れり是徒だ智耳の奈破翁史のみおらんや夫れ然り而して此の如き誤謬の甚しきもの世に行れてよ

り史家と稱し稗史と唱ふるもの愈よ想像を逞ふし一に奇を取り珍を重ずる所よりして虚は又虚を加へ彼の宇育上耳山傲氏の如きい遂に塡庭露の大戰爭を想像し出すに至れり唯今日にありては我第八回の革命に際し兵燹に懸つて古書舘を燒きしかば遂に吾輩の如き精察を主とするの徒と雖ども實に事跡の調査に苦むる不幸を來すよ至れども唯向後我十年期の革命は其規律既に整へるをもて今日の事實は後世に至るも之を知ること容易あるべし而して古史中予盾するものあらば後の人已れ自ら虚實如何を判別して誤まると無らんを要するあり

諸君予い已に演じたるが如く虚實錯雜玉石混淆して殆ど人をして其何れが眞何れが僞たるを知り難からしめ凡取るに足らざる者を英雄の如くに思ひ明君傑士も猶且氏名さへ知らざるが如きい比々實に少しとせず嘆せざらんと欲するも得べからざるあり由て我輩い其事實を考索するとに勉めたりしが辛ふじて聊か獲る所あり請ふ之を說かん余破齋が任官中曾て兵乱ある事あく甚詳謐安泰ありしを知る予い又今會院に呈するに初篇



五卷を以てし路易十四世の事跡を詳述せり予い斷言す世の人が路易十四世の隆盛を想像し又其明君賢主ありと云へども曾て我佛蘭西に路易十四世あるに非らざる事を

と奇一奇に說き去れゞ滿院の聽衆噪然として罵詈をさへ加ふれども加菟耳敢て意となさず

眞の路易十四世なる者は史上傳ふる所の者に非す予は數年間の功究考索に由て今之を斷言し得可き確實なる證言の効跡を得たり抑路易十四世は鉄面男(鉄面を以て顏を掩ひし人あり)の綽號を付せられたる甚だ不幸の男子なり此事既に十九世紀ゐ在ても卓見の輩は已に之を知り尙能く考索したりしも中道に於て迷はざれ終ゐ再びせざるなり然れども桑利に饜ざる馬奘闌主相ある者出て而して自ら國家の大權を掌にし以て之を擅にせんと欲し路易王未だ垂髮の頃之を擒へて幽閉せり爾後其勢力の熾なるに畏縮して王位に即ける者い勿論曾て寵遇を受たる輩すら敢て救はざるのみならず慘酷にも人をして其面を知らしめんが爲め遂に鉄面を被らしめて

遷杜摩耳孃孤島に謫して其幽閉の間は馬奚閣古耳辨流明亞及ひ綿杜乃等の夫人專ら佛國を制御せり新聞の之を發く無おきい素より會〻文學を以て世に知られたる徒は悉く利を得さしめて以て其口を塞ぎ又記す事おからしめて不幸なる哉路易十四世敵明聖德を陰蔽したり然れども年一年に想像家等の手に弄する所となり大に虛飾して十八世紀の歷史家が明君仁慈の王たりと稱揚する事とはあれり又綜庭耳は此妄誕訛傳ある傳記を集錄して路易十四世史を著はし親友等の注告するあれバ唯刻成るゐ托して敢て正誤する事をなさす嗚呼何ぞ人を欺くの甚しきや實に社會を瞞着して二百年の間又之を駁擊する者おく今始て眞の大歷史家出て大喝一聲諸君に向つて我佛蘭西に路易十四世あらざるを確言するを憚からざるなり此時聽衆の中より路易十五世あるは何ぞやと詰る者あれば

予他事に汲々として未だ十八世紀の歷史を査索するの閑おけれバ未だ路易十五世あらずと確言するを得ざるあり然れども略ぼ得たる所の憑證に就て考ふる時は該王の歷史も亦大に妄誕なる者あるが如し其一二を擧れ

バ彼か翻巴圖耳妃等其當時に有名おる夫人の行狀事跡を視察する時い此夫人等の如きこそ女子の參政權を得るゑ力めたる事を知れり嗚呼實に女權家の鼻祖たりと謂ふべし而して路易十四世のことの如きい已に著書中に詳論したれバ今又茲に贅辨せず

と答辯すれバ難問者い再び

然らば路易十四世が建築せし宇衛耳采由宮あるい何ぞや

と詰問すれバ加尭耳毫も屈する色なく

該宮い決して路易十四世代に起れるものに非す後世豪富家の建築に係るものおりしが一千九百一年萬國博覽會場の爲めに之を買上げ後露智耳土氏の有に歸して更に修飾を加へ以て今日の宏壯おるに至れり縱しや其建築法が路易十四世時代を證明するの難者あらんゑ是決して信するに足らさるおり何となれバ是等の妄誕錯雜なる虛飾い歷史の虛飾と同一ゐして未だ確然是を判定し難けれバなり

又有名なる囚獄伐斯智耳の沒落を以て一千七百八十九年七月十四日とす

る歴史家多けれども一千八百九十九年内乱の時破壊せる伐斯智耳紀念標に憑れば予に示すに一千八百三十年七月二十八日を以てせり是に由て之を觀れば封建時代中古期の終い實に前世紀即一千八百年代に在る事照として明なり十九世紀中尚諸所に城砦を築きしを以て之を考ふるも其果して然る可きを知るに難しとせず

諸君も熟知せらるゝが如く十九世紀い實に革命の時期にして萬象一新凡て古代の遺物を破壊せり然れども予が考索の勞い徒爾に屬せず巴里府中古の歴史家が曾て知る事を得さる一言の啄を動かせし事あき回教徒の古跡を發見せり是に據て之を考ふる時い巴里府内に回教の行はれし事實あるを知るべし然れども未だ確實ある記錄を得ざる故に其年代を知るに由なきい予が甚だ遺憾とする所なり

と滔々たる雄辯を奮て稍二時間程も演べ居たりし折柄賓騰夫人は夫より手簡を齎らし來るものから何事やらんと執る手遲しと開封すれば映簾り文學を修めければ時事電報の雜報部に記者たるの約束したる旨を知らせ越せし

かば欣然として

和娥喜べや伯父君より斯樣に言ひ來りしゆ

映簾然れど妾は毫しも心得侍らぬものを

と太と困じて見えければ

夫人此趣にては最早伯父が社長珊騰美絢甫君と約し玉ひし事あれば今更辭すべきものにも非さるべし然るからには何は兎もあれけふ此會の狀況を報道するこそ肝要おれ誘々

と促し立てゝ夫人自から指揮して縉紳淑女の姿容打扮杯滑稽洒落を交へて綴らせける間に加厨耳は尚をも語を續ぎ

夫の佛蘭西を危急の中に援ひ出せるは如安佗矩女に非らずして一少年あり然り而して英人の之を燒き殺したるに非ざるあり予は已に阿新曾禮耳女と名くる人と結婚したるとを知れり抑此人は一千八百七十五年の頃なりけん佛國太古の皇族なる米露宇粲家の末孫にして志耳邊利四世と號せる皇子佛蘭西の王位に即かん事を望み將よ大統領に擧げられんとせしに

不幸ある戡反對黨の障碍する所となり遂に其志を遂くることを得ずして一大新聞を起したり

其後千八百八十九年大統領に撰まれし路易珥勢耳ハ佛國に女皇たらん事を企て六週日間にして其職を退けられ終に奴辨加度新の遠島ゑ謫せられたり

と彌出て彌々新奇の事跡を揭來て懸河の辯もて演べ丁しが更に會員に向ひ予ハ斯く演し來る時ハ古代の事跡を調査するの甚だ必要あるを感せり依て玆に古史の調査委員を置かん事を希望するなり

と發議するや滿院贊成を表すを見て意氣揚々として演壇を下れバ拍手喝采の聲ハ會院も搖ぐ斗りに雷時ハ鳴りも已まざりける此に於て學士會も已に終りを告げゝれバ寶勝夫人ハ映簾打連群る中を潛り脫け飛船を飛ばし我家を投して急ぎける

第十一回

身在二巴里府堂屋一 觀二聞外洋隔戰場一

巴里府の中央沙筮稅街に規撰宏大にして巍然雲際に聳えたる高壯華麗の大厦在り是れなん名聲世界に鳴る時事電報社屋なり其建築の機巧ある眞に二十世紀の美術微妙を極めたりと謂ふべし構造下に廣大にして上に尖小なり其最層の上に高さ十五六間の鐵柱數本を樹てたる頂に棚機を架して露臺を結べり特に神奇と稱すべきハ此大建築を總て粘合紙にて作りたる事にして殆ど十九世紀ゑ石や煉瓦を以て積み重ねたる物に異あらざれバ宜に堅牢あるのみあらず至て輕便の建築なり而して其頂上の露臺ハ空船の昇降場と電報新聞發布所とを兼ね其下にハ四塔形の建物ありて中に電氣を蓄へ其下ハ第四層にして編輯局とし第三層ハ宴會席とし第二層ハ擊劍場弄玉室食堂及編輯者の休憩所に分ち最下層ハ百般の雜務を取扱ふ所とし家屋の兩側に高き鐵柱を立て其上端に各直徑十二間許の圓き玻璃凹鏡を地上に面して懸けたるハ咫尺をも辨ぜざる烏羽玉の闇の夜に電光閃々其面を射れバ兩月宛も雲間に雙び出るが如く反射して光り輝かしむる爲めなりと知るべし又其右ある圓形の凸鏡ハ廣告用に充つる物にして其依賴者ある毎に受持社員ハ

屋内に在て機械紙上に其事實を記し又ハ其圖を畫く時ハ電氣力の作用に依つて自ら外部の鏡面に映りて人皆容易く看る事を得べく文字も圖畫も大形に太と鮮明に現るとかや又其左側に懸けたる物ハ觀聞鏡と稱へて時事電報通信者の宇内萬國に散在せる社員と聯絡を通ずる機械あり彼の大西洋波路隔たる亞米利加の遠きも濠地羅利の天邊ある南端も若し至大緊要の事ある時ハ其地に派出せる通信員ハ常に携帶する懐中觀聞機を取り出し本社と電氣の關係を通じ置ひて其重要の点に器械の鏡面を押し向くれバ忽地本社の鏡面へ明瞭に實地の景況を映出するが故に身ハ巴里の中央に在りながら悉く宇宙間の現象を見る事を得て東洋遙なる清帝の觀兵式伯爾西の革命街頭ふ鈴みて容易に之を目擊す實に無上の便益を社會に與ふる妙機なり然れど最初の程ハ聞く事のみハ得ざりしかども目に只其景狀を見るに止まりて耳に音響を聞かざれバ聾人に齊しとて社長ハ有名の學士博士を集めて此事を議せしかバ遂に學術の助けに頼て幾百萬の財貨と幾星霜の光陰とを費やし觀聞兩用の便益を與へしハ錦上花を添ふると謂ふべし故に一千九百五十年

清國大亂の時に當り巴里全府の市民ハ此機器の恩澤を蒙り霧霧飛び交ふ銃砲の響や地を蹈みならす軍馬の音を手に取る如く聞き得しのみか南京寧波の劇鬪黄河の水戰を始めとし北京沒落して城堡傾き共和軍大勝を得て王宮を侵掠し皇居を蹂躙し至る所殺戮殘酷を極め鮮血淋々として全國に雨らし妖氣慘憺浩天を蔽ふ狀況より兵燹蔓延して無辜の人民道路を失ひ生ながら阿彌焦熱の苦惱に號叫する活地獄を看るが如きに至ては人をして慄然自から寒からしめ皇軍の元帥ある沈頓氏が慚く餘喘を保つ軍卒を驅り集めて共和軍を襲ひしも烏合勢の悲しさは脆くも敵に敗られて周章狼狽度を失ひ友喚び交はす群千鳥群々發と逃ぐるを見ては啞然として絶倒する抔數千里を隔つ東洋の大戰を今現在見るが如きは昔時の人の夢にだに豫想し能はざる事どもなり然るに此劇戰の爲め通信員の死する者十八名負傷する者三十一名加之北京攻城の際砲聲の爲め空氣激動して本社の玻璃鏡を破る事七回に及び其度毎に二百圓づつの損害を生ぜしも又是れが爲めに得る所の利潤も莫大なるを以て社主は少しも憂ふる色なく更に頓着せざりしとぞ斯くの如

く萬事注意して江湖の耳目たる大責に當つて聊か愧る所無く其任を全ふすれば他の諸新聞社は皆な措て敢て之と拮抗を試むる事能はざるに至りしとぞ恁くて其新聞發行は毎日午前六時正午十二時午后六時夜半の四回とし若し其間至急を要する重要の事件あれば直に號外を以て之を報知し又毎週二回附錄として寫眞入の新聞紙を配布せり往時は只想像の畫圖を以て足れりとせしも今や否らず現に生ぜる實際の事實を寫眞するあど巧を極むるに至りし中にも電報社は觀聞鏡面に映り來る現狀を寫し取りて之を華主よ配送せるとかや話頭一轉茲に又學士會院を立去りし寶勝夫人は映簾を伴ひ時事電報社に至り社長珮勝美細甫に面會し要談もそれ〳〵に果てければ

寶勝夫人只今世界に如何なる珍事ヤ侍る……鏡面にハ何も現出せる物なきが如し

社長否とよ今鏡面に現れ居るハ亞非利加撒羅の大沙漠に我通信員ハ我備絢駐在兵の菟阿例蠻民を壓服して歸るを待つ折柄あり暫く此處より見玉へ

と語りも了らざるに砲聲遽に耳朶に上り來りぬ此時社長ハ話頭を映簾の身の上に轉じたる折りなりしが觀聞機ハ

菟阿例蠻軍敗走し家畜婦女を助けて血戰す

と報じ來れば全勝も程あかるべしと待つ時しも

蠻民悉く圍まれ籠中の鳥の如くありたりしが蠻將傷を被り其諸婦ハ四人

とあれり

と此の報を聞く寶勝夫人ハ蠻將の婦女の姿を見んものとて玻璃鏡面を打守るに駱駝の一群に引き續き蠻將を初めとして囚虜の一列蠻夫蠻女の數團陸續として現れければ

記者美あり美あり實に快なり我此編輯の任あくんば自ら往て通信員たらん

と云ふ間に勝利を祝する佛軍が撒羅の大沙漠に奏する凱歌の音樂太と勇ましく聞ゆるよと電報社前に簇れる巴里の市民ハ帽を振り手巾を回して同音に佛國萬歳と祝しける兎角する間に一隊の佛兵ハ猶殘賊を蹂捉へんとて一

同に吠と鯨波を揚ぐると聞えしが忽ち躍る沙漠の平野に累々たる蠻兵の倒るゝ屍蹈み超え乗り越え阿修羅王の荒れたる如く火花を散らし逐つ返しつ曳々聲互に放發す砲聲ハ六合四維を覆へさんず勢にて縱横無盡人無き如く又荒れ廻れバ砲烟黄埃地を掠めて天に漲り陰を結び山川蔽ハれて太陽爲に光を失ふ分野に群集ハ手ゝ汗握り片唾を呑んで結局如何と眺むる折柄鏡面忽ち暗りを呈して今まで見えし戰地の現況掻き消す如く失せけれバ社長珮

滕憂を帶びて

是通信員の負傷せしなり

と云ひけれども只眼に視る物なきのみ耳官に觸るゝ砲聲ハ依然として響を絶たざるのみならず一層劇しく聞ゆるにぞ

社長原來ハ全く不通に非ず響音のみハ障りあく吾人の耳に達するハ彼豪膽なる通信者ハ吾人をして詳く戰況を見せしめんが爲め此危險を犯せしならん夫れともまた死せしあハあらざるや

賓滕夫人半部不通にありしとハ如何なる譯に侍るかし

社長其所以ハ他あらず通信器ハ胸部の鈕子に懸け觀聞器ハ之を手に携え諸方に差し向け居れバなり

と訝りながら懐ひ語りて居たりしが良在て呼鐘響ひて告げ來るに耳を聞して之を聞けバ

予ハ右手又一彈丸を受け思ハず觀聞器を取り落せり傷ハ二の腕に受けたれども直ち該器を拾ひ揚げたり

と報じ來るや否や觀聞器ハ再び戰場を現出し蠻兵已に敗して地に跪き降を乞ふ有樣を示しければ

社長戰已に終れり我通信員を見せ申さん

とて傍なる役員に命じ何やら機械を動せバ鏡面にハ在備絢時事電報通信員が輕裝して駘駑に跨り千軍万馬の間に奔走する雄偉活潑の姿を現しければ見る人一同に快と呼び拍手喝采暫時ハ鳴も止まざりける

社長斯くてハ明日より少くも二千人の華主を增さん我通信者ハ實に滿足の人あり予ハ是に四万法の賞金を贈らん

賓勝夫人圖らずも空遙かある撒羅沙漠の戰を見物して面白くころ存じ侍べれり妾是れにて暇玉れは映簾の身上い百事宜あに御指命下されかしと詞優しく叮嚀に社長に頼み遣す孃を誡め諭し我家を投して出で行きける

第十二回

以二傳聲機一報二新聞一 犧二牲身命一爲二編輯一

爾程に映簾孃い學士會院の大會に於て加厨瑠氏の演說を傍聽せしより續ひて大雷轟く計りに太と劇しき亞非利加沙漠の大戰爭の砲聲や電かと怪まる劍戟の閃き光る怖ろしき戰況より蠻族の降服の通信者の負傷等見る物聞く物皆神經を刺擊せざるなきものから乙女氣の心乱れて我ながら我ならぬ思ひに萎る重瓣櫻嵐に腦む風情あり剩さへ新聞編輯の任さへあれば痛く辭ぐを看る社長い笑止の事に思ひ言葉を竭して慰め勵まし

孃や孃や何を痛み玉ふものかあ發兎の時刻い三十分に迫れども今日い他の記事に多けれい只簡短なる記事にて足りなん戰報の後に組入れぬれば猶充分の猶豫あり氣を靜め心を込めて起艸し玉へ

と言和かに說き諭されし映簾い今や默止難くして筆を取り豫て伯母より聞き得たる情話痴談を面白く書き交じへ學士會院大會の盛況等詳細に綴り了り怎生とて社長に差し出せば點頭如く讀み了りし社長美綸甫は小首を傾け思案の体に映簾は何う惡しき事の侍るにやと恐る〳〵問ひ出せば

社長否爾にあらず唯記事少しく陰秘を發き文章頗る剴切に涉れども爾せる事もあるまじけれ最早時刻も近けば此方に來ませ

と編輯局の一室ある傳聲機の前に誘ひ行きて

社長此機に對し孃自から和孃の草稿を聲高に讀み揚げよ爾すれば戰報に續ひて華主諸君の耳に上るべし和孃が給料は先ゴ五万法と定むべし

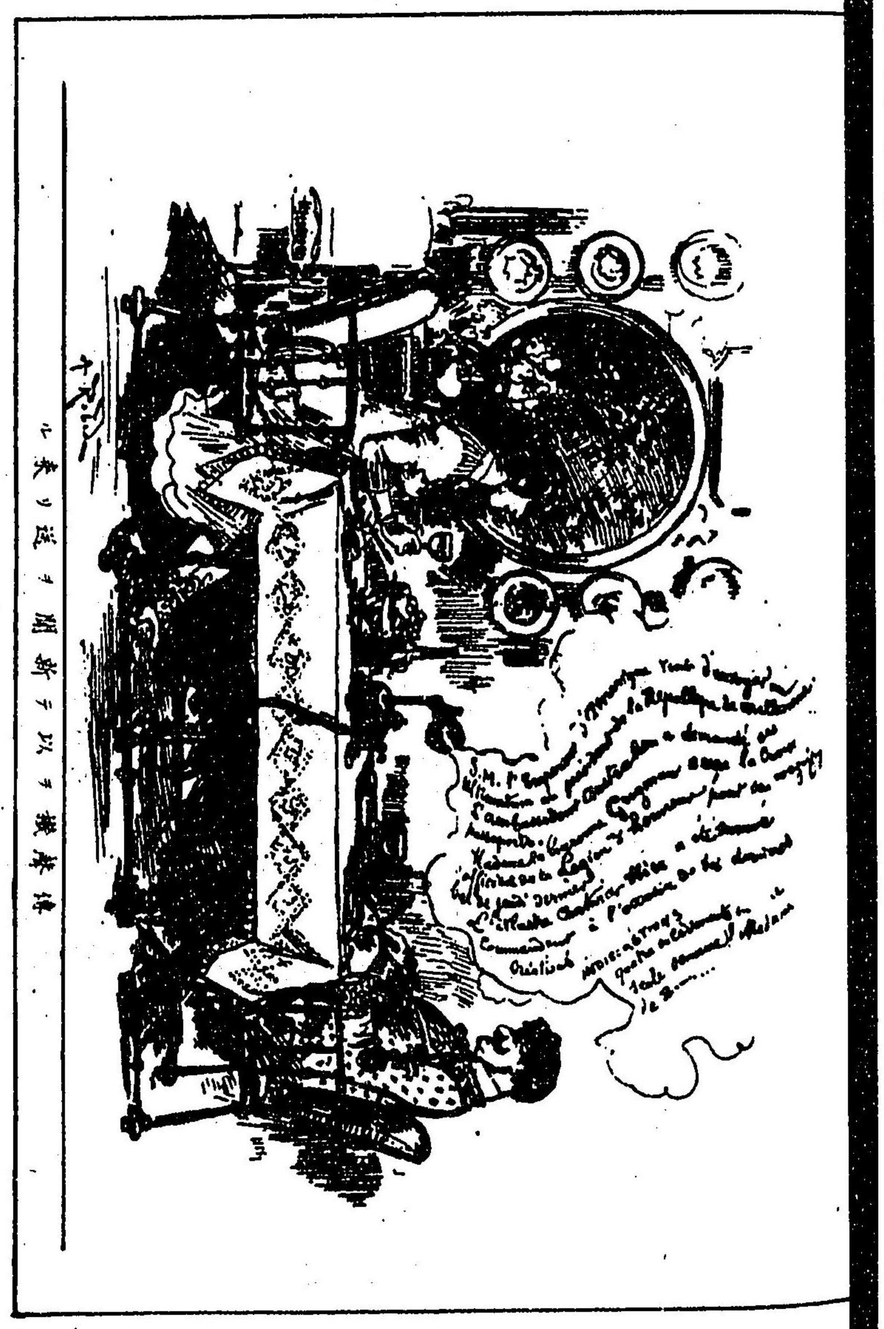
映簾是非共妾自ら之を讀み侍るにや

社長然り然り當時の華主達は皆起稿記者の音聲を聞く事を好まるれば皆自ら記述せるものを讀む事に定めたり先づ其摸樣をば示しまいらせん

と其手を携へ他の記者が發報所に伴ひ行けば映簾喫驚して其有樣を見てあるゑ數多の記者等が各其草稿を各自の傳聲機に向ひ讀み揚ぐれば此等の記

事は皆編輯書記の傳聲機中ゟ集まり其器より次第〳〵に發布して各花主の器中に達する仕掛なりされど映簾は處女氣の高聲に讀み揚ぐる事の羞かしければ如何にもして自讀の任を免れん者と思ひ社長に向ひて

映簾　何故一人にて讀み了らざるや

社長　前にも已に言しが如く顧客の興望に從ふゟり各自其筆するものを讀む時は其語聲語音ゟ因りて言外の意を味ふべし即華文に添ふるゟ殊音を以てせゞ兩なから其妙を著すものゟり殊にハ記者の優劣判然として聽者に知り得るの便ゟり此方に來りて一二を聞かれよ

と尚諸室へ導き斯々恁々と一々摸樣を示しつゝ週りて小說記者の編輯局に至りける此小說記者ハ其名を阿例辭波偶耳と呼び二十世紀稗史家の泰斗と仰がれ毎日一時間一千法の約束にて小說部を擔當して已に七百九十二回に至りしかゞ電報社の是に拂ひし金員ハ七十九万二千法の巨額に達せしとぞ此時其次席なる記者が聲高々と讀み揚ぐるを聞くに